



標註
刪修

故事必讀

市川清流解

三卷

上

13
2186



門 1 3
號 2186
卷

益
詞



明丘瓊山著
市川清流解



標註

刪修

故事文讀

明治十年

官許新刊

後吾所好齋藏梓



益
詞

3188
卷

益詞

美天集

英國靜山書



Sweet Mason Stationer

Faint, illegible cursive handwriting in the background of the left page.

之類を月言は物多様よのほす
 池に暮りあはれをたふ物水々
 水都江の漫板而知新と上意
 を海をを思ひ出さるる徳にぬ

池水ふと我あり物も根を

たつねすは

なみのあやめを

あきゆかほま

故事必讀卷上目次

天文	一丁	地輿	四丁
歳時	九丁	朝廷	十一丁
文臣	十丁	武職	廿丁
祖孫父子等	兄弟	廿七丁	
夫婦	叔侄	卅二丁	
師生	朋友賓主等		
婚姻	女子	卅五丁	
外戚	老壽幼誕等		
卷中			

故事必讀

姑事人事	九等	疾病死喪	百等
訟獄	百等	貧富	百等
釋道鬼神	百等	技藝	百等
文事	九等	科第	百等
卷下			
制作	九等		
飲食	九等	珍寶	九等
鳥獸	九等	衣服	九等
器用	九等	花木	九等
身體	九等	宮室	九等



一 混沌ハ陰陽未ダ分ラ
 二 乾ハ天ナリ坤ハ地ナリ
 三 五星ハ金木水火土ヲ
 四 云フ歳星ト為水ヲ辰
 五 木ヲ歳星ト為火ヲ辰
 六 星ト為火ヲ辰
 七 為土ヲ鎮星ト為
 八 天地定マリ人陰陽ノ
 九 氣ヲ稟テ生ヌ生ノ息
 十 天地ト參ス故ニ三

標註刪修故事必讀卷上

晴保氏心齋書

明 丘濬 著

市川清流 解

天文

文ハ説文ニ錯畫也トアリテ入クミタル模様ヲ云フサレバ天文ニ日月星辰等ノ入亂タルヲ總テ天文ト云フ

混沌初メテ開ケテ

乾坤始メテ奠マル

氣ノ輕清上浮ナル者ハ天ト為リ

氣ノ重濁下凝タル者ハ地ト為ル

日月五星之レヲ七政ト謂ヒ

天地ト人ト之ヲ三才ト謂フ

天文

抄ト曰フ
風起ラントスレバ零
陵山ノ石ノ飛起ツ
商羊ハ一足アル鳥ナ
旋ハクルク廻ル
閃電ハツムジカゼ
閃電ハイト光
青女ハ天神青天王ノ
女ニテ霜雪ヲ司トル
昇ノ妻嫦娥月中ニ奔
是レヲ蟾蜍ト為ス
飛廉ハ神禽ニテ能ク
風氣ヲ致ス箕星ハ風

日ハ衆陽ノ宗タリ
月ハ太陰ノ象タリ
風起ラント欲シテ石燕飛ビ
將ニ雨ヲラントノ商羊舞フ
旋風ハ名ケテ羊角ト為シ
閃電ハ號シテ雷鞭ト曰フ
青女ハ乃チ霜ノ神
滕六ハ即チ雪ノ神
素娥蟾蜍ハ共ニ月ノ號
飛廉箕伯ハ皆風神ナリ

故事必讀

ヲ好ムナリ
時雨ヲ澍雨ト曰フ三
日以上ノ雨ヲ霖ト曰
天ノ形ハ穹窿トシ
ノ如シ東方ヲ蒼天ト
曰ヒ北ヲ玄天ト曰フ
九ノ花多クハ五出雪
花ハ六出ナルハ其數
陰ニ屬スルナリ
三竿ハ九ノ三大ホド
ナルヘシ
蜀ハ山多ク常ニ重霧
アリテ日ヲ見ルル火
ナリ因テ日ノ出ル時
ハ群犬異ミ吠ルト云
吳牛ハ水牛ナリ此牛
熱ヲ畏ル、一甚シ因
テ月ヲ見テモ喘グ也
ルカト疑懼ノ喘グ也

甘霖甘澍ハ俱ニ時雨ヲ指シ
玄穹彼蒼ハ悉ク上天ヲ稱ス
雪花飛ブ一六出先ツ年豊ヲ兆シ
日上リ己ニ三竿乃チ時晏ヲ云フ
蜀犬日ニ吠ルハ人所見甚ダ稀ナル
ニ比シ
吳牛月ニ喘グハ人所見甚シキ
ヲ笑フ
望ノ切ナル者ハ雲霓ヲ望ガ若ク
恩ノ深カキ者ハ雨露ノ恩ノ如シ

天文

三三

大旱ニ雲ヲ望ムハ雨ノ至ルヲ待ナリ

參商ノ二星ハ其ノ出沒相ヒ見ズ

ルレハ雨止故之ヲ見ルヲ恐ルハナリ

牛女ノ兩宿ハ惟七夕ニ一相逢フ

三五

商星ハ東方ニ居リ參星ハ西方ニ居テ互ニ出沒ノ永ク相見ザルナリ

星ヲ披キ星ヲ戴クハ早夜ノ奔馳ヲ謂

牽牛織女ノ二星ハ天河ノ東西ニ居リ毎年七月初七ノ夜河ヲ渡テ一會スト云フ

雨ニ沐シ風ニ櫛ルハ風塵ノ勞苦ヲ謂

星ヲ披テ出ルハ早辰ニ行クナリ星ヲ戴テ入ルハ昏暮ニ歸ヲ云

事意アルニ非ルヲ雲ノ出ル無心ナル

三六

雨ニ沐云々ハ外務ニ従事ノ怠ラサルヲ云

恩ノ遍子ク施コスベキハ乃ハチ陽春

雲ノ心ヲ出ルハ心ヲ云

脚アリト曰フ

三七

リテ然ルニ非ズ人ノ車ヲ為スノ無心ニ出

物ヲ飽テ敬ヲ致スヲ敢テ獻曝ノ忱ヲ

效スト曰ヒ

頼ルト曰フ

三八

人ニ託ノ轉移スルヲ全ク回天ノ力ニ

死ヲ救フノ恩ニ感スルヲ再造ト曰ヒ

三九

再生ノ徳ヲ誦スルヲ二天ト曰フナリ

勢ヒノ盡易キ者ハ冰山ノ若ク

四〇

事ノ相ヒ懸ル者ハ天壤ノ如シ

晨星ハ賢人ノ寥落タルヲ謂ヒ

四一

雷同ハ言語ノ苟合スルヲ謂フ

心ニ過慮多キ何ゾ杞人ノ天ヲ憂フル

四二

二異ナラシ

二異ナラシ

三

ルモ亦タ是ノ如シ
唐ノ宋璟能ク人ヲ愛ス
氏号ノ有脚陽春ト曰フ

人ニ託ノ轉移スルヲ全ク回天ノ力ニ

三

昔宋國ニ田夫アリ冬日曝背ノ暢快因テ之ヲ至尊ニ獻セント欲

死ヲ救フノ恩ニ感スルヲ再造ト曰ヒ

セリトゾ物ハ薄シト雖其志ノ衷情ヨリ出ルヲ云

再生ノ徳ヲ誦スルヲ二天ト曰フナリ

三

天ハ君ノ象ナリ回天トハ君ノ心ヲ挽キ回

事ノ相ヒ懸ル者ハ天壤ノ如シ

三

スト云義ナリ

晨星ハ賢人ノ寥落タルヲ謂ヒ

三

恩ヲ受ケシ人ノ徳ヲ天徳ニ並べ比メ二天ト謂フナリ

雷同ハ言語ノ苟合スルヲ謂フ

三五

偶然ニ一旦ノ勢ヒ盛ナル者ノ永ク保存セサルヲ云

心ニ過慮多キ何ゾ杞人ノ天ヲ憂フル

三六

壤ハ地ナリ天地ノ相

二異ナラシ

三六 三九 四一 四三 四四

隔テ遠キカ如キナリ
晨星ハ甚ダ稀ナルヲ
云フ
雷震ノ為ニ餘聲ノ皆
合同スルヲ謂フ
杞國ニ人アリ常ニ天
ノ墜シテ憂ヒテ寢
食ヲ廢セリト云フ
夸父ハ善走ノ人日影
ヲ追フテ及バズ遂ニ
道ニ渴死セリ
狄ノ相鄴舒晋ノ賈季
ニ門フテ曰ク趙衰趙
盾孰レカ賢ナル對テ
曰ク衰ハ冬日ナリ盾
ハ夏日ナリト
齊ノ寡婦姑ニ事テ謹
ム姑ノ女ノ外ニ嫁ス
ルアリ母ノ財ヲ利ト
シ母ヲ殺シ婦ヲ誣フト

事ノ力ヲ量ラサルハ夸父ノ日ヲ追フ
ニ殊ナラズ
夏日ノ畏ル可ガ如キ是ヲ趙盾ト謂ヒ
冬日ノ愛ス可ガ如キ是ヲ趙衰ト謂フ
齊婦寛ヲ含ンデ三年雨ヲラス
鄒行獄ニ下テ六月霜ヲ飛バス
盛世ノ黎民ハ光天化日ノ下モニ嬉遊
太平ノ天子ハ上夫景星慶雲ノ祥ヲ召

四四 四五 四六 四七 四八

婦前カラ明スル能ハ
ス宛結ノ天ニ告グ天
為ニ三年雨ヲラサズ
鄒行ハ燕ノ恵王ニ勸
諧スレテ獄ニ繫ガ
レ天ヲ仰デ哭スルニ
盛夏天為ニ霜ヲ降ス
光天化日ハ開明ノ時
運ヲ云フ
景星慶雲ハ共ニ聖世
ノ祥瑞ナリ
月箕星ヲ經レハ風多
ク畢星ニ離レハ雨多
クト云フ
風ハ虎ニ從ヒ云々ハ
易ハ語君臣ヲ會合其
因有ニ比シ云フナリ

箕ハ風ヲ好ミ畢ハ雨ヲ好ムハ各人ノ
願欲同カラザルニ比シ
風ハ虎ニ從ヒ雲ハ龍ニ從フハ君臣ノ
會合偶ナラザルニ比ス
雨暘時ニ若ガラハ是レ休徵ニ係リ
天地泰交ハ斯ニ盛世ヲ稱スルナリ
五十九 雨暘云々ハ風雨ノ時ニ應ナルナリ
六十 天地云々ハ陰陽ノ通シ和スルナリ

故事必讀
天文地輿
四

方ハ天圓地方ノ義ニ
テ地輿ト云フナリ
滄ハ海水ノ色ヲ云
滄ハ海トシテ瀛
無キ
貌故ハ水宗ト謂フ
軒轅氏始メ野ヲ畫
百里ノ區ヲ得歩ヲ立
テ畝ヲ定メ以テ民産
ヲ制セリ
禹命ヲ受テ水ヲ治メ
外ニ居ルヲ三年遂ニ
九州ヲ開キ九山ヲ度
リ九道ヲ通ス
幽燕ハ今ノ北京順天
府ナリ

地輿
ルカ如シ故ニ地輿坤輿ト云フ
方輿坤元ハ俱ニ大地ヲ稱シ
滄溟水宗ハ皆ナ瀛海ヲ謂フ
黃帝野ヲ畫シテ始メテ都邑ヲ分チ
夏禹水ヲ治メテ初メテ山川ヲ奠ム
宇宙ノ江山改マラス
古今ノ稱謂各殊ナリ
北京ハ原幽燕ニ属シ金臺ハ是其異號
南京ハ原ト是レ建業金陵ハ又是別名

故事必讀

南京ハ應天ト稱ス昔
楚ノ威王金ヲ埋メテ
王氣ヲ鎮セリ故ニ金
陵ノ名アリ
江西ハ東ニ鄱陽江湖
アリ因テ名トス
福建ハ周ノ閩越ノ地
ナリ三楚ハ東西南ニ
區別ノ云フナリ
山東ハ戰國ノ齊ノ國
ニシテ西ニ黄河アリ東
ニ北岳ノ大山アリ故
ニ山西河東ノ名アリ
廣東ハ古ハ百越ノ地
ナリ
河南ハ古ハ豫州ノ地
黃河北ニ流ル故ニ此
名アリ
陝西ハ古ハ雍州ノ地
西ハ西蕃ニ隣リ東ハ

浙江ハ武林ノ區ニ係リ原ト越國タリ
江西ハ是豫章ノ郡ナリ又吳西ト曰フ
福建省ハ閩中ニ屬シ
湖廣地ヲ三楚ト名ク
東魯西魯ハ即チ山東山西ノ分ナリ
東粵西粵ハ乃チ廣東廣西ノ域ナリ
河南ハ華夏ノ中ニ在故ニ中州ト曰ヒ
陝西ハ即チ長安ノ地原ト秦ノ境タリ
四川ヲ西蜀ト為シ雲南ヲ古滇ト為ス
貴州省ハ蠻方ニ近古ヨリ黔地ト名ク

故事必讀

地輿

五

黄河ノ岸ニ限ル
 四川ハ古ヘ梁州ノ地
 岷江黒白ノ四大水
 ルニヨリ東西南北ニ
 分テ四川トス雲南ハ
 支那ノ西南隅ニ其
 西ハ緬甸南ハ東京交
 趾ニ相續ク
 貴州ハ本西南夷ノ地
 廣西ノ西雲南ノ東北
 ニ最モ海邊ニ遠シ
 東岳ハ兗州ニ西岳ハ
 華州ニ南岳ハ衡州ニ
 北岳ハ定州ニアリ中
 岳ハ西山ニアリ北
 岳ハ西アリテ北
 六峯アリ嵩ト云ハ其
 總名ナリ
 金ハ堅物城金ノ若ク
 破ルバカラザルヲ云
 湯ハ熱水池湯ノ如ク

故事必讀

東嶽ハ泰山 西嶽ハ華山 南嶽ハ衡山
 北嶽ハ恒山 中嶽ハ嵩山 此レヲ天下
 ノ五嶽ト為ス
 饒州ノ鄱陽 岳州ノ青草潤州ノ丹陽
 鄂州ノ洞庭 蘇州ノ太湖 此レヲ天下
 ノ五湖ト為ス
 金城湯池ハ城地ノ鞏固ナルヲ謂ヒ
 礪山帶河ハ乃ハチ封建ノ誓盟ナリ
 帝都ヲ京師ト曰ヒ
 故郷ヲ梓里ト曰フ

近ツクベカラザルヲ
 泰山ハ小サク礪ノ如
 クニ為リ黄河ハ細ク
 帯ノ如クニナル此
 誓ヒハ變ヲシト王者
 諸侯ヲ封建ノ國ヲ
 享ルノ長久ナルヲ極
 言スルナリ
 京ハ大ナリ師ハ師ナ
 リ天子ノ所居人衆久
 地大ナルヲ以テ京師
 ト曰フ
 桑梓ハ父母ノ植ル所
 ナル故ニ郷里ヲ稱メ
 桑梓ト曰フ
 黄河ハ一千年ニ一タ
 ビ清ム聖人ノ瑞ナリ
 晏ハ安ナリ海安ク波
 ヲ揚サレバ天下必ス

滄海桑田ハ世事ノ多變ヲ謂ヒ
 河清海晏ハ天下ノ昇平ヲ兆ス
 水神ヲ馮夷ト曰ヒ又陽侯ト曰ス
 火神ヲ祝融ト曰ヒ又回祿ト曰フ
 路曲リテ僻ナルヲ蹊ト曰ヒ
 路直ミノ小ナルヲ徑ト曰フ
 人ノ包容ヲ望ムヲ海涵ト曰ヒ
 人ノ恩澤ヲ謝スルヲ河潤ト曰フ
 煩累ナキ者ヲ江湖ノ散人ト曰ヒ
 豪氣ヲ負フ者ヲ湖海ノ士ト曰フ

故事必讀

太平ナリト云
馮夷河ヲ渡溺死ス之
水一溺因テ海神ト云
祝融ハ禮月令ニ出
同祿ハ左昭公ニ出
能人ヲ容テ海ノ百川
ヲ涵ルカ如ク謂フ
莊子ニ河ノ潤九里ニ
メ其澤三族ニ及ト云
唐ノ陸龜蒙舟ヲ以テ
茶竈筆林釣具ヲ載セ
江湖ニ往來シ江湖散
人ト号ス
漢ノ許汜劉備ト天下
ノ人物ヲ論シ陳元龍
ヲ稱シ湖海ノ士ト為
砥柱山ハ禹ノ鑿ノ水
ヲ通スル所河水分流シ水
中ニ元立ノ柱ノ如ク見ユ

故事必讀
舍ヲ問ヒ田ヲ求ムルハ原ト大志無シ
天ヲ掀シ地ヲ揭グルハ方ニ是レ奇才
平空ニ事ヲ起ス之レヲ平地ノ風波ト
謂ヒ
獨立ノ移ラザル之レヲ中流ノ砥柱ト
謂フ
黒子彈丸ハ極テ至小ノ邑ヲ言ヒ
咽喉右臂ハ皆ナ要害ノ區ヲ言フ
獨力ノ持シ難キヲ一木焉ゾ能ク大厦
ヲ支ヘント曰ヒ

黒子ハ疾ナリ趙ノ晋宋ノ
太宗ニ對シ曰黒子彈丸
ノ地將ニ何ニ避ル所ソ
度ハ屋ナリ
後漢ノ王元隗器ニ謂
テ曰ク元請一丸泥ヲ
以テ大王ノ為ニ東
谷關ヲ封セン此万世
ノ一時ナリ
東隅ハ日ノ出ル處桑
榆ハ日ノ入ル處ヲ云
八尺ヲ俛ト曰フ簣ハ
土ヲ入ル籠ナリ
蠶ハ小貝ナリ其殼ヲ
用テ大海ヲ汲盡サン
トスルヲ云フ
昔炎帝ノ女東海ニ溺
死シ化メ鳥ト為ル青
衛ト名ツク常ニ西山
ノ木石ヲ啣ミ來テ海

英雄ノ自カラ恃ムニ丸泥亦夕函関ヲ
封ス可シト曰フ
事前ニ敗テ而メ後ニ成ル之レヲ東隅
ニ失フテ之レヲ桑榆ニ收ト曰ヒ
事ノ將サニ成ントシ而メ中止スルヲ
山ヲ為ル九仞功一簣ヲ虧ト曰フ
蠶ヲ以テ海ヲ測ハ人ノ見小ナルニ喻
精衛石ヲ啣ハ人ノ徒ニ勞スルニ比ス
跋渉ハ行路ノ艱難ナルヲ謂ヒ
康莊ハ道途ノ平坦ナルヲ謂フ

故事必讀 地輿 七

陸行ヲ跋ト曰ヒ水行

康壯ハ大路ナリ

磽ハ瘠ナリ不毛ハ草

石田ヲ獲モ其苗ヲ立

ル所無ニ譬フルナリ

學海ヲ經過シテ

溜澗ハ二水ノ名易

ハ能ク此二水ノ味ヲ

辨セリト云フ

涇渭モ亦二水ノ名涇

ハ清渭ハ濁ル合流三

百里ニシテ泥ゼスト

詩ニ泌水洋洋以テ

樂シムベシトアリ

晋ノ謝安隱居シテ東

山ニ高卧セリ

磽地ヲ不毛ノ地ト曰ヒ

美田ヲ膏腴ノ田ト曰フ

物ヲ得テ用ル所無キヲ石田ヲ獲ルカ

如シト曰ヒ

學ヲ為ノテ已ニ大成スルヲ已ニ道岸

ニ登ルト曰フ

溜澗ノ滋味ハ辨スヘク

涇渭ノ清濁ハ當分ベシ

泌水ニ饑ヲ樂シミ隱居ノ仕ヘス

東山ニ高卧ノ職ヲ謝シ安ヲ求ム

聖人出レハ則チ黄河清ミ

大守廉ナレハ則越石見ル

淳俗ヲ仁里ト曰ヒ

惡俗ヲ互郷ト曰フ

里ヲ勝母ト名ツクレハ曾子ハ入ラス

邑ヲ朝歌ト号スレハ墨翟車ヲ回ヘス

壤ヲ擊テ歌フハ堯帝ノ黎民ノ自得ナ

畔ヲ讓テ耕スハ文王ノ百姓ノ相推ナ

以テ相推シ讓テ私セ

文王ノ民ハ皆田界ヲ

ニアランヤト

ノ食フ帝ノ力何カ我

ム井ヲ鑿テ飲田ヲ耕

日出テ作シ日入テ息

老人癯ヲ擊テ歌テ曰

堯出遊スルニ康衢ノ

故ニ車ヲ回ス

歌ヲ以テ時ニ入ラス

母ニ勝ハ不孝故ニ入

ト云フ

貪ナレバ見エズ宋ノ

虞愿獨リ之レヲ見ル

海邊ニ越石アリ常

ニ雲霧中ニ隠ル太守

清ム聖人ノ出ル端ナ

黄河ハ千年ニ一タビ

五十九

陸行ヲ跋ト曰ヒ水行

康壯ハ大路ナリ

磽ハ瘠ナリ不毛ハ草

石田ヲ獲モ其苗ヲ立

ル所無ニ譬フルナリ

學海ヲ經過シテ

溜澗ハ二水ノ名易

ハ能ク此二水ノ味ヲ

辨セリト云フ

涇渭モ亦二水ノ名涇

ハ清渭ハ濁ル合流三

百里ニシテ泥ゼスト

詩ニ泌水洋洋以テ

樂シムベシトアリ

晋ノ謝安隱居シテ東

山ニ高卧セリ

磽地ヲ不毛ノ地ト曰ヒ

美田ヲ膏腴ノ田ト曰フ

物ヲ得テ用ル所無キヲ石田ヲ獲ルカ

如シト曰ヒ

學ヲ為ノテ已ニ大成スルヲ已ニ道岸

ニ登ルト曰フ

溜澗ノ滋味ハ辨スヘク

涇渭ノ清濁ハ當分ベシ

泌水ニ饑ヲ樂シミ隱居ノ仕ヘス

東山ニ高卧ノ職ヲ謝シ安ヲ求ム

聖人出レハ則チ黄河清ミ

大守廉ナレハ則越石見ル

淳俗ヲ仁里ト曰ヒ

惡俗ヲ互郷ト曰フ

里ヲ勝母ト名ツクレハ曾子ハ入ラス

邑ヲ朝歌ト号スレハ墨翟車ヲ回ヘス

壤ヲ擊テ歌フハ堯帝ノ黎民ノ自得ナ

畔ヲ讓テ耕スハ文王ノ百姓ノ相推ナ

以テ相推シ讓テ私セ

文王ノ民ハ皆田界ヲ

ニアランヤト

ノ食フ帝ノ力何カ我

ム井ヲ鑿テ飲田ヲ耕

日出テ作シ日入テ息

老人癯ヲ擊テ歌テ曰

堯出遊スルニ康衢ノ

故ニ車ヲ回ス

歌ヲ以テ時ニ入ラス

母ニ勝ハ不孝故ニ入

ト云フ

貪ナレバ見エズ宋ノ

虞愿獨リ之レヲ見ル

海邊ニ越石アリ常

ニ雲霧中ニ隠ル太守

清ム聖人ノ出ル端ナ

黄河ハ千年ニ一タビ

六十

故事必讀 地輿

費長房ハ能ク千里ノ地ヲ縮シ聚テ目前ニ在ラシメタリ
秦始皇石ヲ驅テ橋ヲ作ルニ石行速カナラズ之ヲ鞭ウツニ忽チ血ヲ流セリト云フ
商鞅ハ秦孝王ニ仕ヘ政令苛酷ニ降陌闕ヲ疆ヲ開ケリ
伊洛ハ二水ノ名夏ノ桀王無道ナリ故ニ天變異ヲ示シ伊洛ミナ燬セシト云フ
家語ニ孔子曰天ニ五行アリ金木火水土時ヲ分テ化育シ以テ萬物ヲ成ス其神之レヲ五帝ト謂フ

費長房ハ地ヲ縮ルノ方アリ
秦始皇ハ石ニ鞭ツノ法アリ
堯ニ九年ノ水患アリ
湯ニ七年ノ旱災アリ
商鞅不仁ニ降陌闕ケ
夏桀無道ニ伊洛竭ク
道ニ遺タルヲ拾ハザルハ在上善政有
由リ
海ニ波ヲ揚ゲサルハ中國ニ聖人アル
ヲ知ル

春ハ蠢ナリ物蠢生シ乃チ動ク故ニ春ト爲日東陸ヲ行リ斗柄東ニ指ス
夏ハ假ナリ火ヲ假リテ而シ宜評ス夏氣赤ウメ光明ナリ故ニ夏ヲ朱明ト曰フ日南陸ヲ行リ斗柄南ニ指ス
秋ハ擎ナリ物擎斂メ乃チ減熟ス日西陸ヲ行リ斗柄西ニ指ス
冬ハ終ナリ万物終成スル所以ナリ日北陸ヲ行リ天氣上騰シ地氣下降メ天地通セズ

歲時 木星之ヲ歲星ト謂フ其一年ニノ行一一次即四時ノ功畢ル故ニ歲星ト曰フ歲字ノ歩ニ從フ者ハ躔度ノ行推歩スベケレバナリ
東方ノ神ヲ太皞ト曰フ震ニ乘而ノ春ヲ司ル甲乙ハ水ニ屬ス木ハ則チ春ニ旺ス其色青シ故ニ春帝ヲ青帝ト曰フ
南方ノ神ヲ祝融ト曰フ離ニ居而ノ夏ヲ司ル丙丁ハ火ニ屬ス火ハ則チ夏ニ旺ス其色赤シ故ニ夏帝ヲ赤帝ト曰フ
西方ノ神ヲ蓐收ト曰フ兌ニ當而ノ秋ヲ司ル庚辛ハ金ニ屬ス金ハ則チ秋ニ旺

收事必讀 歲時 九

閉塞ノ冬ヲ成ス

ス其色白シ故ニ秋帝ヲ白帝ト曰フ
 北方ノ神ヲ玄冥ト曰フ坎ニ乘而冬
 ヲ司ル壬癸ハ水ニ屬ス水ハ則冬ニ旺
 ス其色黒シ故ニ冬帝ヲ黒帝ト曰フ
 中央ハ戊巳土ニ屬ス其色黄ナリ故ニ
 中央ノ神ヲ黄帝ト曰フ
 夏至ニハ一陰生ス是ヲ以テ天時漸ク
 短シ
 冬至ニハ一陽生ス是ヲ以テ日晷初テ
 長シ

八七六

長至漏長ハ皆ナ夏至ノ稱ナリ陽生三至ハ共ニ冬至ヲ謂フ望ニ八月正圓満ナリ

九

月ノ光リテ魄ト為ス望後ヨリ漸ク光リテ減ス故ニ魄ヲ生スト云フ

月ト日ト對スル之レヲ望ト謂フ
 月初テ魄ヲ生ス之ヲ既望ト謂フ
 上弦ハ月其半バ圓ナルヲ謂フ望前七
 ハニ在リ
 下弦ハ月其半バ缺ルヲ謂フ望後七八
 ニ係カレ
 翌日詰朝ハ皆ナ明日ヲ言ヒ
 穀日吉日ハ悉ク是良辰ナリ
 片晌ハ即チ片時ヲ謂ヒ
 日曛ハ乃チ日暮ヲ云フ

十五

曛ハ黄昏時也往日向日ナトモ前日ヲ云フ

十四

晌ハ字書ニ音賞午也トアリソレヨリ轉ノ時ノ意ト為ルナルベシ

十三

穀ハ善ナリ吉且ハ令且ナリ

十二

平且ヲ詰朝ト曰フ

十七

黎昧ハ皆ナ黒キ也半
ハ黒ク半ハ明キ時ヲ
云フ

十八

昔ハ朝臣十日ニ一給
奉アリテ浣沐ノ期ト
為ス澣ハ浣沐ノ義也
九ノ學ニ從フモノ暇
無キヲ以テ辞スベカ
ラス此ノ三餘ヲ以テ
勉ムベシ

十九

宋ニ狙公アリ狙ヲ養
テ食ヲ與フルニ朝三
暮四セントス衆狙皆
怒ル公日朝四暮三セ
ント衆狙ミナ悦コフ
其實ハ皆ナセツナリ

二十

宋ニ狙公アリ狙ヲ養
テ食ヲ與フルニ朝三
暮四セントス衆狙皆
怒ル公日朝四暮三セ
ント衆狙ミナ悦コフ
其實ハ皆ナセツナリ

二十一

膏ハ油ナリ晷ハ日影
ナリ

二十二

又歲月ヲ玩暢ス氏云
フ玩暢ハ共ニ貪ル
ナリ

二十三

時下ノ寒温ヲ述ルナ
リ

二十四

周ハ之レヲ舒ニ失ス
故ニ周衰テ歳寒ナキ
ナリ

二十五

周ハ之レヲ舒ニ失ス
故ニ周衰テ歳寒ナキ
ナリ

故事必讀

疇昔曩者ハ俱ニ前日ノ謂ヒナリ

黎明昧爽ハ皆將ニ曙トスルノ時

月ニ三澣アリ初旬十日ハ上澣中旬十

日ハ中澣下旬十日ハ下澣トス

學ハ三餘ニ足ル夜者日ノ餘リ冬者歳

餘マリ陰兩者時ノ餘リナリ

術ヲ以テ人ヲ愚ニスルヲ朝三暮四ト

曰ヒ

學ヲ為テ益ヲ求ルニ日ニ就月ニ將ト

曰フ

膏ヲ焚テ晷ニ繼ギ日夜辛勤ス

晝ヲノ夜ト作セバ晨昏顛倒ス

自カテ成一無キヲ愧ニ虚ク歲月ヲ延

ルト曰ヒ

人ト共ニ話スルヲ少ラク寒暄ヲ敘ブ

ルト曰フ

憎ム可キ者ハ人情ノ冷暖ナリ

厭フ可キ者ハ世態ノ炎涼ナリ

周ノ末ニ寒年ナキハ東周ノ懦弱ナル

ニ因リ

收車必讀 歳時 十一

秦ハ之レヲ急ニ失ス
秦滅テ燠年ナシ燠ハ

秦階ハ三召ナリ廿六
星アリ上階ヲ天子ト

庶人トス此ノ三階平
ナレバ則天下大平斜

照ス之レヲ王燭ト云
四時均ク和シ王道光

ト云フ
飢年ニハ食尚ホ足ラ

故ニ醉人ヲ見テ祥瑞
トナス

季ハ餓死ノ人ナリ

古事必讀

秦ノ亡ニ燠歳ナキハ嬴氏ノ兇殘ナル

ニ由ル

秦階星ノ平ナルヲ秦平ト曰ヒ

時序ノ調和ナルヲ玉燭ト曰フ

歳ノ歉スルヲ飢饉ノ歳ト曰ヒ

年ノ豊カナルヲ大有年ト曰フ

唐ノ徳宗ノ饑年ニハ醉人ヲ瑞トシ

梁惠王ノ凶歳ニハ野草憐ニ堪タリ

豊年ノ玉荒年ノ穀ハ人品ノ珍トスベ

キヲ言ヒ

晋ノ玉糝藜藿交腐俱

蘇秦曰楚國ノ薪桂ヨ

春秋ノ社時祔祭スル

韶ハ和美ナリ華ハ光

日月其除ス志士正ニ宐ク且ヲ待ツベ

除去ス故ニ志士ハ周
公ノ坐ノ且ヲ待チ行

故事必讀

朝廷 朝廷ハ布政ノ所ナリ又分チイハバ朝ハ臣ノ君ニ
見ユルコトナリ廷ハ停ニテ人ノ集ル所ノ處ナリ

三皇ヲ皇トシ

五帝ヲ帝トス

徳ヲ以テ仁ヲ行フ者ハ王タリ

カヲ以テ仁ヲ假ル者ハ霸タリ

天子ハ天下ノ主タリ

諸侯ハ一國ノ君ナリ

天下ヲ官ニスルハ乃位ヲ以賢ニ讓リ

天下ヲ家ニスルハ是位ヲ以子ニ傳也

三皇ハ天皇氏地皇氏
人皇氏ヲ云フ
五帝ハ伏羲神農黃帝
堯舜是ナリ
天下ヲ官ニセシハ五
帝ナリ
天下ヲ家ニセシハ三
王夏殷周ナリ
陛下階ナリ群臣敢テ
天子ヲ指斥セズ故ニ
階下ニ在ル者ヲ呼ビ
卑ヨリ尊ニ達スルノ
義ナリ
飛龍天ニ在リ大人ヲ
見ルニ利アリ易ノ語
虎拜稽首ハ詩經ニ出

王言綵ノ如ク其出ル
綵ノ如シト礼記ニ出

懿ハ醇美ナルヲ云
後宮ハ擬テ以テ璧ヲ
塗ルナリ其温ヲ取リ

取ル氏云フ
書經ニ元首明ナル哉
股肱良ナル哉庶事康

君ノ被服ノ如シ
龍種ハ帝王ノ種ハ自
カラ人ト異ナルヲ言

フ詩經ニ麟ノ角振マ
公子出トアリテ麟ハ

角アリテモ觸ズ仁厚
ノ徴ニ取ルナリ

陛下ハ天子ヲ尊稱スルナリ

殿下ハ宗藩ヲ尊重スルナリ

皇帝位ニ即クヲ龍飛ト曰ヒ

人臣君ニ覲ルヲ虎拜ト曰フ

皇帝ノ言之レヲ綸言ト謂ヒ

皇后ノ命ハ乃チ懿旨ト稱ス

椒房ハ是レ皇后ノ居ル所口

楓宸ハ乃チ天子ノ蒞所ナリ

天子ハ尊崇故ニ元首ト稱シ

臣鄰ハ輔翼故ニ股肱ト曰フ

文章心讀

朝廷

十三

青宮又東宮春宮ナド

云ヒテ皆春陽發達ノ

義ニ取ルナリ

秦始皇下和ノ玉ヲ以

テ玉印ヲ為リ其相李

斯ニ命シ受命于天既

壽永昌ノ八字ヲ篆セ

シム之ヲ傳國ノ玉璽

龍ノ種麟ノ角ハ俱ニ宗藩ヲ譽メ

君ノ儲國ノ貳ハ皆ナ太子ヲ稱ス

帝ノ子ハ爰ニ青宮ヲ立ツ

帝ノ印ハ乃是レ玉璽ナリ

宗室ノ汎ハ天潢ニ演シ

帝胄ノ譜名テ玉牒ト為

前星采ヲ耀ス共ニ太子ヲ祝スルニ千

秋ヲ以テシ

嵩嶽靈ヲ效シテ三ビ天子ヲ呼フニ萬

歳ヲ以テス

娥ハ娥ニ通ズ娥ハ眉

ノ美ナルモノ故羨女

ノ稱トスルナリ

周ノ宣王常ニ晏起ス

姜后簪珥ヲ脱テ罪ヲ

待タリ

後漢ノ明德皇后馬氏

ハ儉ヲ守テ常ニ汰練

裾ヲ衣タリ

放勲ハ堯ノ徳ヲ賛シ

号スルニ堯帝華ニ巡

狩セシキ封人祝ノ曰

ク願クハ聖人多福多

壽多男アラント

天子ヲ大海ニ比シ太

神器大寶ハ皆ナ帝位ヲ言ヒ

妃嬪媵嬙ハ總テ是宮娥ナリ

姜后簪ヲ脱ノ罪ヲ待ツハ世ニ哲后ト

稱シ

馬后練服ヲ以テ賢ニ鳴ハ共ニ賢妃ト

仰ガ

唐ノ放勲徳昊天ニ配シ遂ニ華封ヲ三

祝ヲ動カシ

漢ノ太子息少海ニ覃ビ乃チ樂府ノ四

歌ヲ興コス

文事小讀

朝廷文臣

一 震ハ春ニ属ス離ハ明ナリ易ニ曰聖人明ニ向テ天下ヲ治ムト云リ宋ノ趙鼎上疏シ張俊ノ功ヲ稱揚シ補天浴日ノ功アリト云リ三公ハ道ヲ論シ邦ヲ經シ陰陽ヲ燮理ス魁下ノ六星兩々相比ヒ三級ヲ為ス因テ三公ヲ此ノ三台ト云フ列宿ハ其数多ク散布スルナリ

二 帝王ハ震ヲ出テ離ニ向カフノ象アリ大臣ハ天ヲ補ヒ日ヲ浴スルノ功アリ三公ハ上三台ニ應ジ

三 郎官ハ上列宿ニ應ズ

四 宰相ノ位ハ台鉉ニ居リ

五 吏部ノ職ハ銓衡ヲ掌ル

六 吏部ハ天官大冢宰タリ

七 戸部ハ地官大司徒ナリ

文臣

蓋法ニ天ヲ經ニシ地ヲ緯ニスルヲ文ト曰フトアリサレバ博ク義理ニ通明ナルヲ文ト謂フベキナリ

七 銓ハ量ルナリ衡ハ平ナリ人物ヲ量リテ平ナラシムルノ義ナリ

八 戸部以下六部ハ俱ニ周官ニ出ヅ天地四季ニ配スルハ唐ノ武后ノ制ナリ

九 内翰學士ハ國朝以來撰スル所ノ制誥ノ文字ヲ編録スルナリ

十 天使ハ天子ノ使ヲ言フ

十一 祭酒ハ大學頭ニ當ル殿柱ノ間ヲ巡按スルヲ以テ之ヲ柱下史ト為ス

十二 唐ノ高宗二年御史臺ヲ改テ憲臺ト曰フ

十三 別駕ハ刺史ニ從部ヲ行別ニ一駕ニ來故名

十四 文臣

十五

禮部ハ春宮大宗伯タリ

兵部ハ夏官大司馬ナリ

刑部ハ秋官大司寇タリ

工部ハ冬官大司空ナリ

都憲中丞ハ都御史ノ號ナリ

内翰學士ハ翰林院ニ稱ナリ

天使ハ行人ヲ稱譽シ

司成ハ祭酒ヲ尊稱ス

都堂ヲ稱シテ大撫臺ト曰ヒ

巡按ヲ稱スル大柱史ト曰フ

司李ノ李ノ字ハ古文
 使ヲ李ニ作ル後誤讀
 ノ李字ト為楚王神羊
 解多ヲ獲テ冠ヲ為ル
 秦楚ヲ滅シ其冠ヲ以
 テ執法ノ近臣御史ニ
 賜フ
 勸農ノ官ヲ田畷ト曰
 鈞ハ均ナリ仕宦國ノ
 政ヲ秉ル其均平ヲ得
 ルヲ言フ
 麾ハ將帥ノ旗ナリ此
 旗ヲ一揮スレバ三軍
 盡ク其轉ズル所ニ隨
 フナリ
 官誥院群夫人ニ敕シ
 金花羅織七張錦縹袋
 為ラシメ賜フニ湯
 沐ノ邑ヲ以テス之ヲ湯

方伯藩侯ハ左右布政ノ號
 憲臺廉憲ハ提刑按察ノ稱
 宗師ハ稱シテ大文衡トシ
 副使ハ稱シテ大憲副トス
 郡侯邦伯ハ知府ノ名尊
 郡丞二侯ハ同知ノ譽美
 郡宰別駕ハ乃通判ト稱シ
 司李豸史ハ推官ヲ贊美ス
 刺史州牧ハ乃知州ノ兩號
 神君慈父ハ即チ知縣ノ尊稱

金花誥ト曰フナリ
 新及弟セシ泥金ヲ
 以テ字ヲ帖シ家書ニ
 附ノ綴ス之ヲ喜信ト
 謂フ
 唐ノ玄宗宰相ヲ命ス
 ル毎ニ先ヅ其名ヲ書
 シ銓擢ヲ以テ之ヲ覆
 フ
 宋ノ真宗王旦ノ已レ
 ヲ諫メントテ恐レ之
 ヲ召シテ尊酒ヲ賜フ
 家ニ歸テ封ヲ發ケハ
 則ケ皆美味ナリ
 金馬門ハ宦者ノ滑ナ
 リ漢武帝大宛ノ馬ヲ
 得銅ヲ以テ其象ヲ鑄
 テ署門ニ立ツ因テ名
 トス宋ノ大宗玉堂之
 署ノ四字ヲ御書メ翰

郷官ニ郷紳ト曰ヒ
 農官ハ是田畷ナリ
 鈞座台座ハ皆ナ仕官ノ稱タリ
 帳下麾下ハ並ニ武官ヲ美ナリ
 秩官既ニ九品ヲ分ツ
 微官ハ惟流ニ入ラズ
 命婦モ亦七階アリ
 一品ヲ夫人ト曰フ
 二品モ亦夫人トシ
 三品ヲ淑人ト曰フ

文庫小讀 文臣

四十九

五十一

五十七

五十八

五十九

院ニ賜ヒ以テ玉堂ノ
上ニ掲ク
漢ノ景帝詔令シ長史
二千石ハ車朱兩轡千
石ヨリ六百石ニ至リ
朱左轡トス(轡ハ車ノ
蔽ヒナリ)
吳郡ノ太守其堂ノ敷
以テ之ヲ塗リタリ故
ニ此名アリ
組ハ綬ナリ官印ヲ佩
ルモノ故ニ致仕スル
ニ印綬ヲ解キ去ルト
云フ
官印ニ金銀銅ノ差アリ
リ綬色ニモ紫青黒等
ノ別アリ
閣門ハ宮人ノ所居即
チ後宮ナリ

四品ニ恭人ト曰ヒ
五品ニ宜人ト曰フ
六品ヲ安人ト曰ヒ
七品ヲ孺人ト曰フ
婦人封ヲ受ルヲ金花誥ト曰ヒ
狀元捷ヲ報ルヲ紫泥封ト曰フ
唐玄宗ハ金甌ヲ以テ宰相ノ名ヲ覆ヒ
宋眞宗ハ美珠ヲ以テ諫臣ノ口ヲ箝ス
金馬玉堂ハ翰林ノ聲價ヲ羨ミ
朱熹包蓋ハ郡守ノ威儀ヲ仰グ

六十

繹ハ捕ハナリ紳ハ帶
ナリ位官アル人ハ効
ヲ大帶ノ間ニ挿ム故
ニ位官ノ人ヲ云フ

台輔ヲ紫閣名公ト曰ヒ
知府ヲ黃堂太守ト曰フ
府尹ノ祿ハ二千石
太守ノ馬ハ五花驄

六十一

六十二

蕭何ト曹參ナリ乃筆
ハ是筆ヲ用テ字ヲ竹
木ノ上ニ書キ刀ヲ以
テ彫リ去リ又書ナリ
社ハ土ヲ祭也稷ハ穀
ヲ祭ルナリ土穀ハ國
ノ本ナル故社稷ノ臣
ト云ハ猶國家ノ臣ト
云ガゴトシ

スルナリ
日ヲ指テ高ク陞ト云フハ預官僚ヲ賀
スルナリ
初テ任ニ到ルニ車ヨリ下ルト曰ヒ
告テ仕ヘテ致スヲ組ヲ解クト曰フ

文事必讀 文臣

十七

藏帑タル世棠剪ル

勿レ伐ル所詩經ニ出

骨ノ咽中ニ留ルヲ鯁

玄宗ノ相盧懷真ハ自

宋ノ至和年中契丹ノ

趙抃弾劾ノ權貴ヲ避

劉寬刺史ト為リ刑人

項仲山廉潔ニシテ馬

鳴鳳朝陽ハ其得ガタ

張綱御史ト為リ出テ

車輪ヲ都亭ニ理メテ

曰ク豺狼道ニ當ル安

入テ効奏ス豺狼ハ佞

古事少讀

藩垣屏翰方伯ハ猶古ノ諸侯國ノ如ク

黑綬銅章令尹ハ即チ古ノ男ノ邦ナリ

大監ハ閹門ノ禁令ヲ掌トル故ニ閹宦

ト名ツケ

朝臣ハ皆ナ筋ヲ紳間ニ搢ム故ニ縉紳

ト曰フ

蕭曹漢高ニ相トシテ曾テ刀筆ノ吏ト

為リ

汲黯漢武ニ相タル真ニ是レ社稷ノ臣

タリ

召伯ハ文王ノ政ヲ布キ嘗テ甘棠ノ下

ニ舎ル後人其遺愛ヲ思フテ其樹ヲ伐

ルニ忍ビズ

孔明ハ王佐ノ才アリテ嘗テ草廬ノ中

ニ隠ル先主其芳名ヲ慕テ乃チ三タビ

其廬ヲ顧ル

魚頭ノ參政ハ魯宗道ノ性ヲ執ノ骨鯁

ナルナリ

伴食ノ宰相ハ盧懷真ノ位ニ居テ無能

ナルナリ

故事必讀 文臣

人ヲ此スルナリ
鄧攸守ト為テ廉ナリ
故ニ民之ヲ慕フ
謝令ハ貪ナリ故ニ民
之ヲ厭ヘリ

廉范蜀郡ニ守ト為リ
火禁ヲ除ク百姓之ヲ
便トス因テ歌テ曰ク
廉叔度來何暮不禁火
民安作平生無襦今五
袴
魯恭令ト為テ惠政ア
リ三異事見ハル桑下
ニ馴雉アリ童子ニ仁
心アリ蝗其境ニ入
郭汲守ト為テ厚徳民
ニ及ブ兒童モ其徳ニ
懐ケリ

王徳用ハ人黒王相公ト稱シ

宋趙抃ハ世鐵面御史ト號ス

漢ノ劉寛ハ民ヲ責ニ蒲鞭シテ辱ヲ示

項仲山ハ已ヲ潔メ馬ニ飲ヒ錢ヲ投ス

李善感ハ直言シテ諱マズ競フテ鳴鳳

朝陽ト稱シ

漢張綱ハ彈劾ノ私ナク直ニ豺狼ノ道

ニ當ヲ斥ク

民鄧侯ノ政ヲ愛シ之レヲ挽テ留ラズ

人謝令ノ貪ヲ嫌ヒ之レヲ推ドモ去ズ

司馬光子俊ヲ用テ運
使ト為テ曰ク此一路
ノ福星ニ非ズヤト其
至ル處民徳ヲ被ラン
ト云フ意ナリ

温公相ト為テ徳民心
ヲ服ス因テ之ヲ祀ル
者萬家ニ至レリ

仇香蒲縣ノ亭張ト為
リ善ク事ヲ治ス王涣
曰ク枳棘叢中鳳鸞ノ
棲ム處ニ非ス百里ハ

大賢ノ路ニ非スト遂
ニ之ヲ薦メテ令トス
晋ノ潘岳河陽ノ令ト
為リ桃花ヲ滿縣ニ植
エシム人之ヲ花縣ト
曰ヘリ

劉昆江陵ノ令タル
火災アリ昆火ニ向ヒ

廉范蜀郡ニ守トノ民五袴ヲ歌ヒ

張堪漁陽ニ守トノ麥穗兩歧アリ

魯恭中牟ノ令ト為テ桑下ニ馴雉ノ異

郭汲并州ノ守ト為テ兒童竹馬ノ迎ル

鮮于子駿ハ寧口一路ノ福星ニ非ズヤ

司馬温公ハ都テ是レ萬家ノ生佛ナリ

鸞鳳枳棘ニ棲ズト云ハ仇香ノ主簿タ

ルヲ羨ムナリ

文臣

十九

頭ヲ叩ケバ風忽チ反
 漢ノ時渤海郡歳飢エ
 盜起ル糞遂守ト為テ
 之ヲ撫輯ス盜其德ニ
 懐キ來リ迎フ遂之レ
 勸メ刀劍ヲ賣リ牛
 犢ヲ買ハシメ專ラ農
 ヲカメ過チテ改メ善
 ニ遷ス期年ニメ郡大
 ニ治ル

故事少讀

河陽遍ク挑苞ヲ種ウトハ乃チ潘岳ノ
 縣官タルヲ云
 劉昆江陵ニ宰トメ昔日風ヲ反メ火ヲ
 滅シ
 冀遂渤海ニ守トメ民ニ刀ヲ賣牛ヲ買
 シム
 此レ皆ナ徳政ヲ歌フベシ
 是以テ令名ノ著ル攸ナリ

韓退之柳子厚歐陽修蘇
 東坡ハ皆文章卓絶ト稱ス
 白起王翦廉頗李牧ハ
 俱ニ武略蓋世ト謂フ
 宋ノ范仲淹ガ軍畧ニ
 長シタルヲ夏人カ恐
 レテ相戒テ小范老子
 胸中云々ト言ヘリ
 項籍初メ江東ノ子弟
 ハ十ト西シ大ニ敗レ
 烏江ニ至ルニ一人ノ
 還ルナシ乃チ嘆ノ曰
 ク縦ヒ江東ノ父老憐
 テ王ト為レ我何ノ面
 目カ之ニ對セント遂
 ニ自カテ刎死ス

武職

武字ハ戈ヲ止ルノ會意ニテ暴ヲ禁シ
 兵ヲ戡メ克ク禍乱ヲ定ムルヲ武ト謂フ

韓柳歐蘇ハ固ニ文人ノ最著ナリ
 起翦頗牧ハ乃チ武將ノ多奇ナリ
 范仲淹ハ胸中ニ數萬ノ甲兵ヲ具ヘ
 楚ノ項羽ハ江東ニ八千ノ子弟アリ
 孫臏呉起ハ將略誇ニ堪タリ
 穰苴尉繚ハ兵機測カリ莫シ
 姜太公ニ六韜アリ
 黄石公ニ三略アリ

孫臏ハ孫武ノ後呉起
ハ衛人皆ナ將略一世
ニ冠タリ
穰苴齊ノ將ト為テ功
アリ司馬法ヲ著ス尉
繚ハ魏人惠王ニ聘セ
ラレ兵法二十四篇ヲ
陳ズ之ヲ尉繚子ト曰フ
六韜ハ文武龍虎豹犬
是レナリ
三略ハ上略中略下略
アリ
高祖韓信ニ問フ君能
ク兵幾何ニ將タル信
曰臣ハ多々益善ナル
毛遂趙ノ客十九人ト
楚ニ使ヒシ楚王ニ迫
テ從ヲ約シ十九人ヲ
顧テ碌々庸常ノ意人

韓信兵ニ將トノ多々益善ク
毛遂衆ヲ譏テ碌々奇無トス
殘賊ノ人ハ蛇豕ニ似タリ
驍勇ノ士ハ貔貅ノ若トシ
大將ヲ干城ト曰ヒ
武士ヲ武弁ト曰フ
都督ハ稱シテ大鎮國ト為
總兵ハ稱シテ大總戎ト為
都閫ハ即チ是レ都司
參戎ハ即チ是レ參將

ニ因テ事ヲ為ス者ト
言ハリ
蛇ハ毒虫也ノ屬スハ
貪婪厭テ無キナリ
貔貅ハ猛獸豹ノ屬ナ
干ハ指ナリ城ハ垣ナ
リ皆外ヲ捍ギ内ヲ護
ルモノナリ
大将ハ外強敵ヲ禦ギ
内百姓ヲ衛ルヲ云
弁ハ巾ナリ士ノ象卒
ノ頭目タルヲ猶ホ巾
ノ一身ノ首級タルカ
如キナリ故ニ武弁ト
謂フ
軍行ニハ車ヲ以テ陣
ヲ為リ相向テ門ヲ為
ス故ニ軍門ヲ轅門ト
曰フ

千戸ハ戸侯ノ號アリ
百戸ハ百宰ノ稱アリ
車ヲ以テ戸ヲ為ルヲ轅門ト曰ヒ
戰功ヲ顯ハシ掲ルヲ露布ト為ス
下上ヲ殺ス之ヲ弒ト謂ヒ
上下ヲ伐ツ之ヲ征ト謂フ
鋒ヲ交ルヲ壘ヲ對スト為シ
和ヲ求ルヲ成ヲ求ト謂フ
戰ヒ勝テ而ノ回ル之ヲ凱旋ト謂ヒ
戰ヒ敗テ而ノ走ル之ヲ潰奔ト謂フ

戰功ヲ旗上ニ書メテ天
下ニ聞エシム之レヲ
露布ト曰フ
豕突狼奔ハ匹夫無謀
ナル血氣ノ勇ヲ云フ
秦ノ符堅晋ヲ伐テ謝
玄ノ為ニ大ニ破ラレ
風聲鶴唳ヲ聞テモ皆
晋ノ師カト疑ヒセリ
後漢ノ馮夷ハ謙退ニ
功ヲ論ズ諸將並坐ノ
屏ク軍中号メ大樹將
軍ト為ス
漢文帝周亞夫ノ陣營
ニ幸スルニ其令甚ダ
嚴肅ナリ為ニ轡ヲ按
徐行セリ
符堅初メ晋ヲ伐ント
ノ曰ク吾百万ノ衆ヲ

君ノ為メニ恨ヲ洩スヲ敵愾ト曰ヒ
國ノ為メニ難ヲ救フヲ勤王ト曰フ
豕突狼奔ハ夷虜跳梁ノ狀ニ比シ
風聲鶴唳ハ士卒敗北ノ魂ヲ驚ス
漢ノ馮夷ハ功ヲ論スルニ當テ獨リ大
樹ノ下ニ立テ己レガ績ニ誇ズ
漢ノ文帝ハ嘗テ軍ヲ勞メ親カラ細柳
營ニ幸シ轡ヲ按シテ徐行セリ
符堅ハ自カラ誇テ將ニ廣メントノ鞭
ヲ投ノ以テ流レヲ斷ツマシト云ヒ

故事以詩

以テ鞭ヲ江ニ投ズル
毛其流ヲ斷ヘシト誇
言ス
毛遂趙ノ客ト為リテ
自ラ薦ム平原君曰ク
士ノ世ニ處ルハ難ノ
囊中ニ處ルカ如シ其
末立ロニ見ユ今先生
門下ニ處ル三年未ダ
聞ユルアラスト毛ガ
答ヘ本文云々ナリ
市中ノ少年嘗テ韓信
ヲ侮テ曰ク若シ能ク
死セバ我ヲ刺セ死ス
ル能ハズンバ我胯下
ヲ出ヨト信俛メ胯下
ヲ出グ一市人皆其怯
ヲ笑フ後漢ニ任テ淮
陰侯ニ封セララル
張良下邳ノ圯橋ニ遊

毛遂ハ自カラ薦メ才奇ナリトノ囊ニ
處テ便チ當ニ穎ヲ脱スベシト云フ
會等ト伍スルヲ羞ダ韓信降テ淮陰ト
作り
江東ヲ見ニ面無ノ項羽故里ニ歸ルヲ
羞ヅ
韓信ハ胯下ノ辱ヲ受ケ
張良ハ履ヲ進ノ謙アリ
衛青ハ猪ヲ牧スル奴ト為リ
樊噲ハ狗ヲ屠フルノ輩タリ

武職 廿二

橋下ニ落シ良ヲ顧テ
 曰孺子下テ履ヲ取レ
 ト良之ヲ取ル老人曰
 我ニ履セヨト良長跪
 ノ之ニ履ス後漢ニ功
 アリテ留侯ニ封セラレ
 漢ノ衛青ハウノ孤貧
 人ノ為ニ羊豕ヲ牧ス
 後チ功ヲ以テ封侯ヒ
 ラレ爵関内侯ヲ賜フ
 樊噲ハ元ト狗ヲ屠ル
 フ以テ業トス此頃ハ狗ヲ食
 フヲ羊豕ト同カリシナリ
 高祖ノ豊ヨリ起ルニ從ヒ
 後遂ニ舞陽侯ニ封ラレ
 子思苟變ヲ衛公ニ薦ム
 公曰變嘗テ使タリシ時
 氏ニ賦ノ二雞子ヲ食フ
 故ニ用ヒズト子思曰ク

故事必讀
 士ヲ求メテ全ヲ求ムル莫レ二卵ヲ以
 テ干城ノ將ヲ棄ル一母レ
 人ヲ用ルハ木ヲ用ルガ如シ寸朽ヲ以
 テ連抱ノ材ヲ棄ル一母レ
 君子ノ身ハ小ニス可ク大ニス可シ
 丈夫ノ志ハ能ク屈シ能ク伸ルナリ
 古ヘヨリ英雄ハ枚ヲ以テ擧ゲガタシ
 將略ヲ詳セント欲バ須武經ヲ讀ベシ
 聖人ノ人ヲ官スルハ猶ホ匠ノ木ヲ用ルガ如シ其長スル所ヲ取テ
 其短ナル所ヲ棄ツ故ニ連抱ニメ教尺ノ朽アリ良工ハ棄ズ戰國ノ
 時ニガリニ卵ノ故ヲ以テ干城ノ將ヲ棄ツ此レ鄰國ニ聞シムベカラ
 バト公再拜ノ曰教ヲ受クト

子ノ子ヲ孫ト曰ヒ孫
 ノ子ヲ曾孫ト曰ヒ曾
 孫ノ子ヲ玄孫ト曰ヒ
 玄孫ノ子ヲ來孫ト曰
 ヒ來孫ノ子ヲ仍孫ト
 曰ヒ仍孫ノ子ヲ雲孫
 ト曰ヒ雲孫ノ子ヲ
 耳孫ト曰ヒ耳孫ノ子
 ノ孫ト曰ヒ孫ノ子
 人ノ脈絡スル鼻先
 形ヲ受故ニ始祖ヲ謂
 テ鼻祖ト云フ
 肯堂肯構ハ書經ニ出
 是レハ其父ノ室ヲ作
 ラントノ既ニ終始シ
 オキタランニハ其子

祖孫父子
 釋名ニ云祖ハ祚ナリ祚ハ物ノ先ナリ孫ハ遜ナ
 リ遜道メ後ニ生ルナリ父ハ甫ナリ始テ已レ
 ナ生ムナリ子ハ孽ナリ相生シテ蕃孳スルナリ
 何ヲカ五倫ト謂フ君臣父子兄弟夫婦
 朋友ナリ
 何ヲカ九族ト謂フ高曾祖考已身子孫
 曾玄ナリ
 始祖ヲ鼻祖ト曰ヒ
 遠孫ヲ耳孫ト曰フ
 父子創シテ造ルヲ肯構肯堂ト曰ヒ
 父子俱ニ賢ナルヲ是父是子ト曰フ

文庫必讀
 祖孫父子
 廿三

タル者京ナ堂基ヲ為
 ラザランヤ肯テ屋ヲ
 構サランヤノ意ニテ子
 ガ父ノ業ヲ継成スヲ云フ
 父子ノ賢ナル若シ是
 賢父志シバ馬ノ是賢
 子アラン若シ是子无
 ンハ馬ノ能ク此賢父
 ヲ躡ハサンヤノ義ナ
 リ
 父ノ考ヲ王父ト曰フ
 王ヲ加フルハ之ヲ尊
 ブナリ
 父ハ子ノ尊嚴スル所
 ノ君ナリ
 椿ハ壽木ナリ父ヲ祝
 スルニ長久ノ義ヲ取
 證ハ忘憂州ナリ母ヲ
 祝スルニ忘憂ノ義ヲ
 取リ云フナリ

祖ヲ王父ト稱シ
 父ヲ嚴君ト曰フ
 父母俱ニ存スル之レヲ椿萱并ニ茂ル
 ト謂ヒ
 子孫ノ發達スル之レヲ蘭桂芳ヲ騰グ
 ト謂フ
 橋木ノ高而ノ仰グハ父ノ道ニ似タリ
 梓木ノ低而ノ俯スハ子ノ卑キガ如シ
 痴ナラズ聾ナラザレバ阿家阿翁ト作
 ラレズ

蘭桂ハ皆芳烈ナルモ
 ノ故ニ其家聲ノ騰ル
 ラ比シ言フナリ
 南山ノ陽ニ橋木アリ
 高クノ仰グ是レ父ノ
 道ナリ陰ニ梓木アリ
 低クノ俯ス是レ子ノ
 道ナリ
 痴ナラズ云々ハ唐ノ
 代宗ノ語何事モ知ラ
 ス顔キカヌ顔ニテ狂
 洋デナケレバ一家ノ
 注久ニハ為ラレズト
 ノ意ナリ
 幹ハ枝葉ノ附テ立ッ
 所ノモノナリ蠱ハ前
 人沈敗ノヲ云フ子
 能ク幹ト為テ振起シ
 父ノ舊失ヲ飾治スル
 ヲ幹蠱ト曰フ

親ニ得ラレ親ニ順ナルハ方ニ人ノ子
 為バシ
 父ノ愆ヲ蓋ヲ名テ蠱ニ幹タリトシ
 義子ヲ育スルハ乃ハ子螟蛉ト曰フ
 子ヲ生バ當サニ孫仲謀ノ如ナルベシ
 ト云ハ曹操カ孫權ヲ羨ムノ語ナリ
 子ヲ生バ須ラク李亞子カ如スベシト
 云ハ朱溫ガ存勗ヲ嘆スルノ詞ナリ
 菽水歡ヲ承ルハ貧士親ヲ養ノ樂ナリ
 義方是訓ハ父親ヲ子ヲ教ルノ嚴ナリ

故事必讀
 祖孫父子
 廿四

螟蛉ハ桑上ノ青虫ナリ
螟蛉之ヲ取リ化ソ
已レノ子ト為
吳ノ孫權字ハ仲謀孫
堅ノ子ナリ
晋ノ李存勗ハ李克用
ノ子ナリ小名ヲ亞子
ト云梁ノ夾寨ヲ破ル
朱温之ヲ嘆羨ス
水ヲ啜菽ヲ食フモ以
テ其歡ヲ盡スハ亦之
ヲ孝ト謂フ礼記ニ出
古語ニ云子ヲ教ルニ義方
ヲ以テスレバ邪僻ニイラズ
良弓ノ家角ヲ撓メテ
引ヲ為ル其子必ス先
柳ヲ屈ノ箕ヲ作ル
ヲ學ビ始テ能ク角ヲ
撓テ弓ヲ成スニ至ル
狼狽ノ家金鉄ヲ溶ノ

箕裘ヲ紹グハ子父ノ業ヲ承ルナリ
先緒ヲ恢ニスルハ子家聲ヲ振ナリ
具慶ノ下ハ父母皆ナ存シ
重慶ノ下ハ祖父俱在トリ
詔謀ヲ燕翼スルハ乃ハチ後ヲ裕ニス
ルノ祖ヲ稱シ
克ク祖武ヲ繩グハ是レ賢ニ象ルノ孫
ヲ稱スルナリ
人ノ令子アルヲ稱ノ麟趾祥ヲ呈スト
曰ヒ

破器ヲ補フ其子必ス
先袍裘ヲ補綴スル
ヲ學ビ始テ能ク金ヲ
鎔ノ器ヲ補フニ至ル
因テ父業ヲ承ルヲ箕
裘ヲ紹グト言フ
先緒ハ先人ノ業ナリ
子大ニ其事ヲ弘ルヲ
言ナリ
燕ハ安ナリ翼ハ敬ナ
リ子孫ノ為ニ謀リ安
敬无事ナラシメント
欲スルヲ言フ
克ハ能ナリ繩ハ繼ナ
リ祖武ハ先祖ノ跡ナ
リ子孫能ク祖宗ノ族
ヲ繼承スルヲ言フ
麟ノ性仁厚ナリ其趾
生草生蟲ヲ踐ズ其母
德身ヲ修ム故ニ子孫

官ニ賢郎アルヲ稱ノ鳳毛美ヲ濟スト
曰フ
父ヲ弑シテ自立スル隋ノ揚廣ノ天性
何ゾ存セン
子ヲ殺シテ君ニ媚ル齊ノ易牙ノ人心
奚カ在ラン
甘ヲ分テ以テ目ヲ娛シムルハ王羲之ガ
孫ヲ弄ノ自カラ樂ナリ
安ヲ問フテ惟ダ頷ヲ點スルハ郭子儀
ガ厥孫ノ最モ多キナリ

女
孫必讀

祖孫父子

廿五

皆ナ善ニ化スルニ此
 宋ノ謝鳳才名アリ其
 子超宗亦文詞ヲ善ス
 謝宗曰ク超宗殊ニ鳳
 毛アリト其克ク父ニ
 肖ナルヲ言ナリ
 晋ノ王羲之ハ弱孫ヲ
 抱キ一味ノ甘ヲ割キ
 分チ以テ耳目ヲ娛シ
 マシメタリ
 唐ノ郭子儀ハ衆孫ア
 リテ安ヲ問フニ盡ク
 辨スルヲ能ハズ但ダ
 點領テ示スノミ
 唐ノ柳仲野ノ母ハ善
 ク子ヲ訓ヘ常ニ苦參
 黃蓮熊膽ヲ以テ和シ
 凡ト為テ仲野ガ夜學
 スルキ之ヲ嚙シメ口

丸ニ和ノ子ヲ教ハ仲野ガ母ノ賢ナリ
 戲彩ノ親ヲ娛シムハ老萊子ノ孝ナリ
 毛義檄ヲ捧ズルハ親ノ存スル爲ニシ
 伯俞杖ニ泣ハ母ノ老タルニ因テナリ
 慈母ノ子ヲ望ハ門ニ倚リ閭ニ倚ル
 遊子ノ親ヲ思ハ姑ニ陟リ此ニ陟ル
 愛ニ差等無キヲ兄ノ子モ隣ノ子ノ如
 シト曰ヒ
 有ヲ分テ相同スルニ吾翁ハ即チ若ノ
 翁ト曰フ

苦クノ睡ルヲ能ハザ
 老萊子ハ年七十ニシ
 テ父母猶存ス身五彩
 ノ斑衣ヲ着テ兒戲ノ
 状ヲ爲シ親ノ心ヲ慰
 メシナリ
 後漢ノ毛義賢名アリ
 張奉之ヲ慕ヒ往テ候
 ス時ニ義ヲ以テ安陽
 ニ守タルノ府檄至ル
 義檄ヲ奉ノ喜ビ顔色
 ニ動ク奉心ニ之ヲ賤
 ミ乃チ辞シ去ル後義
 ノ母没スルニ及デ竟
 ニ仕ヘズ奉嘆ノ曰往
 日ノ喜ハ乃親ノ爲ニ
 屈セシナリト
 伯俞親ニ事テ孝ナリ
 過チアリテ杖ルニ

長男ヲ主器ト爲ス
 令子ハ家ヲ克ス可シ
 子ノ前ニ光カスヲ充閭ト曰ヒ
 子ノ父ニ過ヲ寵ニ跨ルト曰フ
 寧馨英物ハ皆是人ノ兒ヲ羨ヤムナリ
 國器掌珠ハ悉是人ノ子ヲ稱スルナリ
 愛ス可キ者ハ子孫ノ多キヲ益斯ノ蠶
 蟄タルガ若キナリ
 羨ニ堪タル者ハ後人ノ盛ナル瓜瓞ノ
 綿綿タルガ如ナリ

祖孫父子 廿六

故事必讀

痛マサレバ母ノカノ
衰ハタルヲ悲ミ泣シ
トナリ
王孫賈ノ母賈ニ謂テ
曰ク汝朝ニ出テ晚ニ
來ルモ吾則テ門ニ倚
テ望ミ暮ニ出テ還ラ
ガレバ吾則ケ閭里外
ノ総門ニ倚テ望ムト
山ニ草木無キヲ峭ト
曰ク草木アルヲ記ト
曰ク詩ノ陟岵篇ハ遊
子ノ親ヲ思ヒ山ニ登
テ親ノ在ル方ヲ望ム
ト詠セシナリ

漢王ノ父太公項羽ノ為ニ獲ラル羽太公ヲ姐上ニ置キ人ヲ漢王ニ告
シメテ曰ク下ラバンバ太公ヲ烹ント王曰ク吾若ダト先ニ懷王ニ事ヘ
約シ兄弟トナレリ吾翁ハ即チ若ダノ翁必ズ之ヲ烹バ幸ヒニ我ニ一杯
ノ饌ヲ分テト
宗廟意銓ノ器ヲ主宰スルハ嗣ヲ承ル長子ニ如クハ無シト易ニ出ヅ
晉ノ賈充ノ生レシ時其父之ヲ祝シ後當ニ充閭ノ慶アルベシト因テ充
ト名ツク充閭ハ其出入ノ車馬閭門ニ充ルヲ謂フ
跨ハ過ナリ竈上ニハ釜アリ釜ハ父ト同音ナル故借テ過父ノ義ニ言ト
ナリ
晉ノ溫嶠ノ兒タル時桓溫其啼ク聲ヲ聞テ曰ク此レ真ノ英物ナリト
國器ハ其才國家ノ用ヲ為スベキヲ曰フ
人ノ子ヲ生メルヲ賀メ掌中ノ珠玉ノ如シト美言ナリ
龔斯ハ一タビニ九十九子ヲ生ズト云フ
大ナルヲ舂ト曰ク小ナルヲ舂ト曰ク本ニ近ク初生ノ者ハ小ニシテ延
テ末ニ至テ大ナリ

後漢ノ袁紹ノ子譚其
弟尚ト兵ヲ治メ相攻
ム王修譚ニ謂テ曰ク
兄弟ハ手足ナリ譬ヘ
ハ人將ニ門カハントノ其臂
ヲ断テ曰ク我必ス勝ッ
ト可ナランヤ
梁史ニ王銓手姿美ハ
シ其弟王錫ト共ニ孝
行ナリ世人為ニ銓錫
ハ玉昆金友ナリト曰
フ昆ハ兄ナリ友ハ弟
ナリ兄弟金玉ノ美キ
カ如キヲ褒言ナリ
伯仲ハ兄弟ヲ曰フ墳麓
ハ皆樂器ナリ其音調ノ

兄弟 釋名ニ云兄ハ荒ナリ荒ハ大ナリ、
弟ハ第ナリ相次第ノ上ルナリ
天下不是底ノ父母ナク世間得ガタキ
者ハ兄弟ナリ
須ラク同氣ノ光ヲ貽メ手足ノ雅ヲ傷
フト母ルベシ
玉昆、金友ハ兄弟ノ俱ニ賢ナルヲ羨ム
ナリ
伯塤、仲麓ハ聲氣ノ相ヒ應スルヲ謂フ
ナリ

故事必讀

兄弟

廿七

相和スルヲ兄弟ノ和
親ナルニ比シ言ルナリ
唐ノ玄宗ハ兄弟交愛
ナリ常ニ諸兄ト一樓ニ
宴樂ス額ノ花萼相輝
之樓ト曰フ詩ノ棠棣
ノ章ハ兄弟宴スルノ樂
歌ナル故其義ヲ取リ
テ名ケタルナリ
鶴鳴ハ飛ハ則チ鳴行ケ
ハ則チ急難ノ意アリ
詩ノ鶴鳴原ニ在リ兄
弟急難ハ急難アラバ便
チ當ニ相助クベキヲ云
礼ニ兄弟ノ出雁行ハ雁
行ノ序アルガ如キヲ云
漢ノ陳元方ノ子ト季
方ノ子ト互ニ其父ノ功徳
ヲ争ヒ之ヲ其祖大邱ニ
問フ太邱曰ク兄弟兩

兄弟既ニ翕ヘル之レヲ花萼相輝クト
謂ヒ
兄弟ノ聯芳ナル之レヲ棠棣競秀スト
謂フ
患難相ヒ顧ミルハ鶴鳴ノ原ニ在ルニ
似タリ
手足ノ分離ナルハ雁行ノ翼ヲ析ルカ
ゴトシ
元方、季方ハ俱ニ盛徳祖大邱稱メ兄タ
リ難弟タリ難ト為

賢皆得カタキノ意
宋郊、宋祁兄弟トモニ
礼部ニ試ラレ竝ニ狀
元ヲ賜フ
後漢ノ荀爽ノ子ハ人
竝ヒ才名アリ世人目
ノハ龍ト曰フ
唐ノ薛收其從兄弟元
敬族兄弟德音ト名フ
齊ヤス時人河東ノ三
鳳ト曰フ
周ノ成王立周公之ニ
相タリ時ニ公ノ弟管叔蔡
叔共ニ叛シ流言ノ公ヲ謗
テ曰ク周公將ニ孺子ニ利
カラザラントスト故ニ周公東
征ノ之ヲ誅ス因テ東征
破斧ノ詩アリ
趙礼賊ニ遇フ賊之ヲ殺
シ食ハントス其兄孝曰

宋郊、宋祁ハ俱ニ中元當時ノ人號ケテ
大宋、小宋ト為セリ
荀氏ノ兄弟ハ八龍ノ佳譽ヲ得
河東ノ伯仲ハ三鳳ノ美名アリ
東征破斧ハ周公ノ大義親ヲ滅スルナ
リ
賊ニ遇テ死ヲ争ヒ趙孝身ヲ以テ弟ニ
代
豆ヲ煮ニ其ヲ燃クハ其相害フヲ謂フ
斗粟尺布ハ其ノ容レザルヲ譏ルナリ

文庫必讀 兄弟

故事必讀

礼ノ瘦クテ孝ノ肥ク
ルニ如カスト賊義ト為
テ俱ニ之ヲ放ス
曹植ハ魏ノ文帝ノ弟ナ
リ帝之ヲ忌テ殺サント
欲シ七步中ニ詩ヲ作ラ
シメ若シ成ズンハ大法ニ
行ハント定ム植即チ吟
ノ曰ク煮豆燃其豆在釜
中泣本是同根生相煮
何太急ト文帝感ノ之
ヲ釋ス
漢ノ文帝ノ弟厲王長
謀反シ蜀郡ニ廢置セラ
レ食メノ死ス民歌テ曰一
尺布尚可縫一斗粟尚
可舂兄弟一人不相容
詩ニ兄弟牆ニ閔クト雖
外侮アレバ必同心ノ之ヲ
禦グバシト云リ

兄弟牆ニ閔クハ即チ兄弟ノ鬪狠ナリ
天羽翼ヲ生スハ兄弟ノ相親キヲ謂フ
姜家ハ大被以テ眠リヲ同ウシ
宋君ハ艾ヲ灼メ而シ痛ヲ分ツ
田氏財ヲ分テ忽チ庭前ノ荆樹ヲ瘁シ
夷齊國ヲ讓テ共ニ首陽ノ蕨薇ヲ採ル
安寧ノ日ハ友生ニ如カズト雖氏
其實ハ今ノ人兄弟ニ如クハ莫シ
宋ノ大祖性友愛ナリ其弟匡義疾アリテ艾ヲ納スルニ大祖モ亦艾
ヲ灼メ其癩ヲ共ニセシト云
田真田慶田廣ノ兄弟ハ義ヲ重シ均シク財ヲ分フ時ニ庭前ノ紫
荊樹花葉茂盛スルヲ同ク三分セントセシニ明旦其樹忽枯レタリ兄

後漢ノ美臆其弟ト親
善ナリ秋被ヲ作り寢
レバ則之ヲ共ニセシト云

拙荆ハ才拙ク姿色無
シト云謙辞ナリ内子
ハ嫡妻ヲ云フ
砧ハ碇ナリ借リテ夫
ヲ言フノトス良ハ
猶善ノコトシ妻其夫
ヲ稱シ言フナリ
沈麗ハ偶ナリ
東方朔武帝ニ答フル
ニ我妻ヲ細君ト曰フ
妻ヲ室ト曰フ
齊ノ桓公内色ヲ好テ

弟之ニ感ノ其ノ讒ヲ止タリケレバ紫荊花復茂盛セリ
伯夷叔齊ノ父將ニ死セントスルニ遺命ノ叔齊ヲ立テ父卒ノ齊夷ニ
遜ル夷ハ父ノ命ヲ尊ミ遂ニ逃レ去ル齊ハ天倫ヲ重シ立メテ逃ル國
人其中子ヲ立ッ後武王ヲ諫メ首陽山ニ隱レ遂ニ餓死セリ

夫婦 男女既ニ配スルヲ
夫婦ト曰フナリ

孤陰ハ則チ生セズ

獨陽ハ則チ長セズ

故ニ天地ノ配ハ陰陽ヲ以テシ

男ハ女ヲ以テ室トシ曰ク又内子ト曰

女ハ男ヲ以テ家トス

故ニ人生ノ偶ハ夫婦ヲ以テス

約罷多ク夫人ノ如キ
 モノ六人アリタリ
 束髮ノ時皆配スル所
 ノ者ハ則チ初婚ナリ所
 謂許字ナリ
 人妻ヲ喪フテ再々娶ル
 ハ琴嫁已ニ断テ再ヒ
 續クニ似タリ
 醮ハ酒ヲ酌テ祭ルヲ
 云フ合巹ヲ再ビ用ル
 ノ義ナリ
 鰥ハ愁絶寐ラレザル恒ニ
 鰥々然タルノ義妻無キ
 モノヲ曰フ
 調ハ和スルナリ琴瑟ノ音調
 相和スルヲ夫妻ノ和合ナルニ
 比ス調ハハ和セザルナリ又
 目ハ鼻ノ語ヲ夫婦目ハ鼻
 ラン相視ルヲ謂フ書ニ此難
 長スル惟家ノ深ナリトアリ

陰陽和シテ而ノ後雨澤降リ
 夫婦和シテ而ノ後家道成ル
 夫ハ妻ヲ謂テ拙荆ト曰ヒ又内子ト曰
 ヒ
 妻ハ夫ヲ稱メ藁砧ト曰ヒ又良人ト曰
 フ
 人ノ妻ヲ娶ルヲ賀スルニ榮諧伉儷ト
 曰ヒ
 物ヲ留テ妻ニ與フルヲ細君ニ歸遺スト
 曰フ

妻ノ愁聲ヲ恐ル獅子
 吼ヲ聞ガ知シトハ東坡カ陳
 季常ノ妻ヲ畏ルニ戯テ
 作リタル詩句ナリ
 吳起魯ニ仕フ時ニ魯齊
 フ伐シトス起カ妻ハ齊女タ
 ルヲ以テ疑ハル起乃チ妻ヲ
 殺シ自カラ狩ヲ求メタリ
 曾子母ノ為ニ妻ニ梨ヲ蒸
 シタルニ孰セズ因テ之ヲ
 出セリ
 張敞京兆ノ再ト為テ
 常ニ其妻ノ為ニ眉ヲ畫セリ
 唐ノ賈直言嶺南ニ敗セラ
 ル時ニ妻董氏繩ヲ引髮ヲ
 束タルニ帛ヲ以テシテ曰君ニ
 非サレバ解シト直賤セラレ
 三十年ヲ経テ還ルニ帛ヲ
 封スル宛然タリシト云

室ヲ受ルハ即チ是レ妻ヲ娶ルナリ
 寵ヲ納ルハ人ノ妾ヲ娶ルヲ謂ナリ其
 正妻ハ之レヲ嫡ト謂ヒ
 衆妾ハ之レヲ庶ト謂フ
 人ノ妻ヲ稱シテ尊夫人ト曰ヒ
 人ノ妾ヲ稱シテ如夫人ト曰フ
 髮ヲ結グハ是レ初婚ニ係リ
 絃ヲ續グハ乃チ是レ再娶ナリ
 婦人重婚スルヲ再醮ト曰ヒ
 男子ノ偶無キヲ鰥居ト曰フ

故事必讀
 夫婦必讀

三ノ

冀郤缺ハ周ノ時ノ人家
 貧ニシテ自カラ野ニ耕ス
 其妻之レニ鑑スル毎ニ
 相敬スルヲ賓ノ如クセリ
 於陵ノ陳仲子ハ夫婦
 園ニ灌イデ自カラ其カニ食
 セリ
 貧賤ノ交リハ忘レバカラズ
 糟糠ノ妻ハ堂ヨリ下サズ
 トハ後漢ノ宋弘ガ古語ヲ
 引テ光武帝ニ答ヘシナ
 リ
 後漢ノ梁鴻節操アリ
 孟光ハ醜ニ德行アリ光自
 カラ擇テ梁鴻ノ妻トナリ
 常ニ荆釵布裙ヲ着ケ食
 ヲ進ル毎ニ操ヲ舉テ眉
 ニ濟ウシ夫ニ事ルニ敬礼
 ヲ盡セリ

琴瑟調ハサルハ夫妻目ヲ反スルノ詞
 ナリ
 北雞ノ晨ヲ司トルハ婦人ノ事ヲ主ト
 ルニ比シ
 河東ノ獅吼ハ男子ノ妻ヲ畏ル、ヲ譏
 ルナリ
 妻ヲ殺シテ將ヲ求ムルハ呉起何ノ其
 レ忍心ナルヤ

晋ノ竇鞫子殺メヌシク
 還ラズ其妻蘇氏回文錦
 ヲ織リ寄テ以テ歸ヲ勸
 ム其詞極テ悽惋ナリ
 陳ノ徐徳言乱ニ遭フテ
 妻ト別ル、時鏡ヲ分チ各
 ヲ其半ヲ執テ後證トス
 妻後ニ越公ニ得ラレシ
 ガ遂ニ復徳言ト合セリ
 張瞻曰ニ炊クト夢ミト諸
 王生ニ請テ之ヲ判セシム
 生曰ク曰ニ炊クハ釜ノ無
 ニ因ル釜ハ婦ト同音ナリ
 其レ婦ヲ亡ハント瞻ノ妻
 死シタリ
 莊子ノ妻死ス恵子之ヲ
 弔ス莊子釜ヲ鼓シ歌テ
 曰ク浮世曩スルニ堪タリ
 世事花ノ開卸ノ如キアリ

梨ヲ蒸テ妻ヲ出スハ曾子善ク孝道ヲ
 全ウスルナリ
 張敞妻ノ為メニ眉ヲ畫クハ媚態晒ノ
 可ク
 董氏夫ニ對シテ髮ヲ封スル貞節論ニ堪
 タリ
 冀郤缺夫妻相ヒ敬スルヲ賓ノ如クシ
 陳仲子夫婦園ニ灌ハカニ食スルナリ
 糟糠ヲ棄ザルハ宋弘ガ光武ノ話ヲ回
 スナリ

故事少讀
 夫婦

云々ト
漢ノ鮑宣ノ妻初メ嫁セ
シ其奩資甚ク厚シ宣悦
ハス乃チ更ニ短衣ヲ著ケ自
カテ出汲テ婦道ヲ修行
ス婦人ハ夫ニ從フヲ以テ順
トスルナリ
朱買臣ハ家貧ニシテ薪ヲ
負ヒ行々書ヲ讀ム妻之
ヲ恥ヂ自カラ出テ去ル後
買臣會衛ノ太守ト為リ
タレバ妻復シテ來ム臣
曰ク能ク覆水ヲ收メバ方
ニ復セント妻其事ノ成ザ
ルヲ知リ自カラ縊死セリ
司馬相如初メ臨邛ノ客
舍ニ寓ス隣ニ富人卓王孫
アリ其女ヲ文君ト曰フ素
ト琴ヲ喜ブ相如乃チ鳳求
鳳ノ曲ヲ操リ以テ之ヲ枕ム

案ヲ舉テ眉ニ齊ハ梁鴻孟光ノ賢ヲ得
ルナリ
蘇蕙ノ迴文ヲ織リ樂昌ノ鏡ヲ分ツハ
是レ夫婦ノ生離ナリ
張瞻曰ク炊ノ夢、莊子盆ヲ鼓スルノ歌
ハ是レ夫婦ノ死別ナリ
鮑宣カ妻ノ甕ヲ提テ出テ汲ムハ雅ニ
順從ノ道ヲ得ルナリ
齊ノ御ノ妻カ御ヲ窺テ夫ヲ激スルハ
内助ノ賢ト稱スベシ

ニ遂ニ夜ル相如ノ客舍
ニ奔リ相與ニ馳テ成都ニ
還リタリ
其後
謝道韞其叔父謝安ヲ
稱シ阿大中郎ト曰フ
揚脩幼シ聰慧ナリ叔
素之ヲ奇トシ吾家ノ龍

怪哉可キ者ハ買臣ノ妻貧ニ因テ去ソ
曰ク求メ覆水ノ收メ難用良思ハス
醜シム可キ者ハ相如ノ妻夜ニ黃テ私
ニ奔ル但絲桐雅意アルヲ識ルナリ
知ル身修テ而シテ後家齊クヒ
要ス夫義有テ自然王婦順ナルヲ
叔姪
父ノ兄ヲ伯父ト曰ヒ父ノ弟又叔父ト曰ヒ伯叔
ヲ總テ諸父ト曰フ兄弟ノ子ヲ姪ト曰フ姪又侄ト作ル
諸父ト曰ヒ亞父ト曰フハ皆ナ叔伯ノ輩
猶子ト曰ヒ此兒ト曰フハ俱ニ侄兒ノ稱

故事必讀

叔姪

三十二

文ナリト言ヘリ
 烏衣巷ハ登陵ニアリ晉
 王謝ノ居リシ所ナリ
 符朗ハ符堅ノ從兄ノ子
 ナリ堅常ニ人ニ語テ吾
 家ノ千里駒ナリト言リ
 阮籍ハ叔ナリ阮咸ハ侄ナ
 リ共ニ竹林七賢ノ内ナリ
 謝玄曰ク人家ノ子侄譬
 ハハ芝蘭玉樹ノ如シ正ニ
 其庭階ニ發生センコトヲ
 欲スルノミト
 鄧攸字ハ伯道後趙ノ
 石勒ガ江ヲ過ルル收遂
 ニ逃走シ亡弟ノ子ヲ收
 メテ己レノ子ヲ棄タリ
 張範子ノ凌ト侄ノ畿ト
 賊ノ為ニ執ラル範之ヲ
 還サンコトヲ乞フ賊乃チ子ヲ
 以テ還ス範曰ク吾侄ノ

阿大中郎ト云道韞カ叔父ヲ雅稱スル
 吾家ノ龍文ハ揚素ガ侄兒ヲ比美スル
 烏衣ノ諸郎君ハ江東王謝ノ子弟ヲ稱シ
 吾家ノ千里駒ハ符堅符朗カ侄兒ヲ羨
 竹林ハ叔侄ノ稱ナリ
 蘭玉ハ子侄ノ譽ナリ
 侄ヲ存シテ兒ヲ棄ルハ伯道ガ後無キ
 悲シムナリ買田ト妻貧ニ因マシ

小ナルヲ怜レム寧ロ子
 ラ以テ侄ニ代ント賊之ヲ
 義トシテ還セリ

漢ノ馬融諸生ヲ教授
 ス常ニ千數アリ絳帳ハ
 師席ニ垂ル帷ナリ
 杏壇ハ臧文仲ガ誓盟セ
 シ所ノ壇ナリ孔子常ニ此
 處ニ居テ生徒ニ教授セリ
 鐸ハ鈴ノ屬金口木舌ノ
 者ヲ木鐸ト曰ク文教ニ

叔ヲ視テ猶父ノゴトキハ公綽ノ官ニ
 居テ羨ムナリ
 盧邁兒無ウメ侄ヲ以テ身ノ後チヲ主
 トラシメ
 張範賊ニ遇テ子ヲ以テ而ノ侄ガ生ニ
 代ラシム
 師生 王篇云師ハ範ナリ人ヲ教ルニ道ヲ以テスル
 者ノ稱ナリトアリ未熟ヲ生ト曰フ弟子ヲ諸
 生ト稱スルモ其學ヲ所未タ熟セサルノ謂ナリ
 馬融絳帳ヲ設前ニ生徒ニ授後ニ女樂
 ヲ列ス

叔侄師生

之ヲ用フ木口金舌ノ者ヲ
 金鐸ト曰フ軍法ニ之ヲ用
 フ俱ニ以テ衆ヲ警ムルナリ
 左傳ニ鄭伯ガ曰ク寡人
 弟アリ和協スル能ハズ而
 其口ヲ四方ニ鋤セシムト漢ノ
 賈逵經ニ通ス来リ學フ者
 多ク粟ヲ獻ン倉ニ盈ツ或
 曰逵カ耕スルニ非ズ乃チ
 古耕スルナリト
 師ヲ請テ家ニ延ク之ヲ西
 席ト云師席ハ左右席間
 一丈ノ地ヲ容ル其指畫教
 示スル所アルガ為ナリ
 脩ハ彌ナリ乃チ乾内ヲ云
 十挺ヲ束ト爲古ハ相見ルニ
 必ス贊ヲ執リ以テ礼ヲ爲ス
 一束ノ脩ハ其礼至薄ノ者
 唐ノ狄仁傑多ク善士ヲ薦
 メ名臣ヲ出ス或曰天下ノ

孔子杏壇ニ居テ賢人七十弟子三千ア
 教館ヲ稱スルニ設帳ト曰ヒ又振鐸ト
 曰フ
 教館ヲ讓スルニ鋤口ト曰ヒ又舌耕ト
 曰フ
 師ニ西席ト曰ヒ師ノ席ヲ函丈ト曰
 學ニ家塾ト曰ヒ學俸ヲ束修ト曰フ
 桃李公門ニ在ハ人ノ弟子ノ多クヲ稱シ
 首着長ノ欄干ハ師ニ飲食ヲ奉ノ菲ナリ

桃李盡ク公門ニ在リト
 薛令之教授ト爲リ清淡
 ナリ因テ詩ヲ作テ曰朝日上
 園々照見先生盤盞中何
 所有首着長欄干
 荀子云水ハ水之ヲ爲セ
 氏水ヨリ寒シ
 北史ニ李謐初メ小學博
 士孔璿ニ師事ス後璿謐ニ
 就テ業ヲ請ク同門生爲ニ
 語ン青ハ云ヤト言リ
 宮牆外ヨリ望ムハ其學淺
 クノ未タ堂ニ昇ル能ハ
 ザルヲ謂フ
 釋迦金縷ノ僧迦黎衣
 フ將テ摩訶迦葉ニ與
 ヘシヨリ代々法ヲ傳フル符
 トノ衣鉢ヲ與フナリ儒家亦
 借テ之ヲ言フノミ
 後漢ノ揚震學ヲ好ミ窮究

水ハ水ヨリ生メ水ヨリ寒カナルハ學
 生ノ先生ニ過ルニ比シ
 青ハ藍ヨリ出テ藍ヨリ勝レルハ門下
 ノ師傳ニ優レルヲ謂フ
 未門ニ及ブト得ザルニ宮牆外ヨリ
 望ムト曰ヒ善學ヲ稱スルニ衣鉢眞傳スト
 曰フナリ
 人揚震ヲ稱シテ關西ノ孔子ト爲シ
 世賀循ヲ稱シテ當世ノ儒宗ト爲ス

故事必讀

師生、朋友、賓主

三十四

セザルナシ諸儒為ニ語シテ
 関西ノ孔子ト言ヘリ
 漢ノ蘇章ハ笈ヲ負ヒ師ニ
 從テ千里ヲ遠シトセバ
 宋ノ游酢揚時ハ俱ニ伊川
 先生ニ師事ス一日先生坐
 ノ壇スニ子立侍ノ敢テ去
 ラズ久ク先生顧テ曰ニ子
 尚ホ在カト退ク井門外雪
 深キ一尺ニ及マリ
 宋ノ朱公掞明道先生ニ汝
 州ニ見テ歸テ人ニ語テ曰我春
 風ノ中ニ在テ坐了ス一月ナリ止
 草木ノ生スル播種樹植ハ
 人カ已ニ至リ而テ自カラ化スル
 能ハズ少ク所ノ者ハ雨露ノ滋ミ
 此時ニ及テ雨フレバ其化速シ
 人ヲ教ルノ妙猶是ノ言トシ

笈ヲ千里ニ負フハ蘇章ガ師ニ從ガフ
 ノ綴ナルナリ
 雪ニ程門ニ立ツハ游揚ノ師ヲ敬マフ
 ノ至レルナリ
 弟子師ノ善教ヲ稱スルニ春風ノ中ニ
 坐スルガ如シト曰ヒ
 學業師ノ造成ヲ感スルヲ時雨ノ化ニ
 沾ホフヲ仰グト曰フ
 朋友賓主
 類ヲ同ウスルヲ朋ト曰ヒ志ヲ合スルヲ友ト曰フ
 賓ハ客ナリ外ヨリ來ル者ナリ主ハ主人ナ
 リ居停スル者ナリ

易ニ曰ク二人同心ナレバ其
 利一金ノ師同ハノ言其真
 蘭ノ如シトアリ
 雨澤相附麗ノ五ニ滋
 益アルヲ謂フ朋友講習ノ
 象ナリ
 執ハ事ヲ執ルヲ云父ノ友
 ハ父ト志ヲ同ク共ニ事ヲ
 執ルノ人ナリ
 詩ニ豈衣無シト曰ンヤ子
 ト袍ヲ同ウストアリ
 莊子ニ心ニ逆フ莫キハ遂
 ニ相與ニ友ト為ルト云リ
 稱衡年二十ニ滿ズ而ノ孔
 融ト交ハル時ニ融年五十
 ナリ是即忘年ノ交ナリ
 同心ノ友ハ生死ヲ俱ニシ
 ヲ勿ルモ悔無キヲ刎頸ノ
 交リト云フ
 總角ハ未タ冠セサル時ヲ云

善ヲ取テ仁ヲ輔ハ皆朋友ニ資リ
 往來交際シテ迭ヒニ主賓ト為ル
 爾我心ヲ同スルヲ金蘭ト曰ヒ
 朋友相ヒ資クルニ麗澤ト曰フ
 東家ニ東主ト曰ヒ
 師傅ニ西賓ト曰フ
 父ノ交ハリ遊ブ所ハ尊ミテ父執ト為
 己カ事ヲ共ニスル所ハ之ヲ同袍ト謂
 心志相ヒ孚トスルヲ莫逆ト為シ
 老幼相ヒ友トスルニ忘年ト謂フ

故事必言

友友賓主

童子竹馬ノ交リナリ
 雷義茂オノ彬ニ舉ラレ陳
 重讓ルニ刺史聽ス義乃チ
 伴狂シ髪ヲ披テ走り命ヲ
 キカズ時人語ノ日隈漆堅シ
 ト雖正雷ト陳トニ如カスト
 漢ノ范式字ハ巨卿張劭
 字ハ元伯友ト善同ク大學
 ニ在リ歸コ告グ式ガ曰ク今
 コリ一年ノ後九月十五日至
 リ當ニ過テ尊親ヲ拜スベシ
 ト期ニ至リ劭雞ヲ殺シ黍
 ヲ炊テ之ヲ待ツ母曰ク二年
 ノ別千里ノ約何ッ之ケ審ヲ
 期セント劭曰ク巨卿ハ信人ナ
 リ爽フベカラズト言未ダ畢
 ラサルニ巨卿果ノ至ル母大
 ニ悦ビ深ク其信ニ服セリ
 芝ハ瑞草九莖アリ金色
 綠葉ニテ夜ル光リアリ

勿頸ノ交リハ相如ト廉頗ト
 總角ノ好ミハ孫策ト周瑜ト
 膠漆相投スル陳重ト雷義ト
 雞黍ノ約ハ元伯ト巨卿ナリ
 善人ト交ハルハ芝蘭ノ室ニ入り久ウ
 シテ而シテ其香ヲ聞ザルガ如ク
 惡人ト交ハルハ鮑魚ノ肆ニ入り久ウ
 シテ而シテ其臭ヲ聞ザルガ如シ
 肝膽相照ラス斯レテ腹心ノ友ト為
 意氣孚トセザル之ヲ口頭ノ交ト謂フ

蘭ハ香草ナリ
 鮑魚ハ鮑魚ナリ肆
 店舎ナリ
 肝胆云々心相顧ミルナリ
 意氣合ハザルハ只是レ
 交ナリ
 參商ハ相懸隔スル二星ノ
 名ナリ
 氷炭ハ猶水火ノ同ウスマ
 カラザルガコトキナリ
 氏ノ徳云々詩ノ語乾餼ハ
 食ノ薄キ者朋情ヲ失スル
 者但乾餼ノ未ダ周子カラ
 ザルニ因テ亦以テ罪ヲ招ク
 ノミトアリ
 玉ハ溫潤至美石ハ麤澀
 至惡然レ玉兩玉相磨シ
 テハ器ヲ成サズ石ヲ以テ
 相磨シ而シテ後器ヲ成ス
 一ヲ得ルナリ

彼此合ハザル之レヲ參商ト謂ヒ
 爾我相仇スル氷炭ヲ同スルガ如シ
 民ノ徳ヲ失スルハ乾餼以テ愆リ
 佗山ノ石ハ以テ玉ヲ攻サムバシ
 落月屋梁ハ顔色ヲ相ヒ思ヒ
 暮雲春樹ハ丰儀ヲ相望ナリ
 王陽位ニ在テ貢禹冠ヲ彈キ以テ薦ル
 ヲ待チ
 杜伯罪ニ非スノ左儒死ヲ寧ウシ君ニ
 狗ハズ

落日云々暮雲云々ハ共
 杜甫カ友ヲ懷フノ詩
 句ナリ
 前漢ノ王陽益州ノ刺史
 ト為リシニ其友貢禹冠ヲ
 彈キ以テ陽ノ薦ルヲ待ツ
 ニ果ノ大夫ト為ル
 周ノ宣王其臣杜伯ヲ殺
 サントス伯ノ友左儒之ヲ
 諫メ争フ九タビス王聽
 ズシテ遂ニ伯ヲ殺ス儒之
 ニ死セリ
 魏ノ文侯ハ篁ヲ擁シ門ヲ
 掃テ以テ朋友ヲ迎ヘ手ヲ
 握テ歡ビタリ
 吳ノ陸凱范曄ト友タリ
 網謝乎ニ隴頭ニ遇ヒ因テ
 梅一枝ヲ折一絶ヲ口占ノ
 曄ニ寄贈ノ云折梅逢驛
 使寄與隴頭人江南無

首ヲ分テ袂ヲ分ツハ別ヲ叙ノ辭ナリ
 篁ヲ擁シテ門ヲ掃フハ迎送ノ敬ナリ
 陸凱梅ヲ折リ驛使ニ逢テ聊カ江南一
 枝ノ春ヲ寄セ
 王維柳ヲ折テ行人ニ贈リ遂ニ陽關三
 疊ノ曲ヲ唱フ
 頻リニ來テ忌メ無キハ乃チ幕ニ入ル
 ノ賓ヲ云
 請ハズノ自カラ來之レヲ速カザルノ
 客ト謂フ

所有聊贈一枝春
 唐ノ王維人ヲ送別スルノ
 詩ニ渭城朝雨浥輕塵客
 舍青青柳色新勸君更
 盡一杯酒西出陽關無
 故人
 晉ノ郗超桓溫ノ參軍タ
 リ溫超ヲ帳中ニ臥シメテ
 其言ヲ聽ク謝安溫ニ詣ル
 ニ風動カシテ帳開リ安笑
 テ曰ク郗生ハ入幕ノ賓ト
 謂フバシト
 楚ノ元王穆生ト交リ善シ
 生酒ヲ嗜マズ因テ王宴毎
 ニ禮ヲ設テ之ヲ待ス後久
 ク設ルヲ忘ル生曰ク以テ去
 ルバシ王ノ意忘レリ今若シ
 去ズンバ楚人將ニ我ヲ市ニ
 針セントスト遂ニ病ヲ謝メ去
 漢ノ陳遵客ヲ會スル毎ニ

醴酒設ケサルハ楚ノ元王ノ士ヲ待ス
 ルノ意忘タルナリ
 轄ヲ井ニ投ズルハ漢ノ陳遵ノ客ヲ留
 ルノ心誠アルナリ
 蔡邕ハ屣ヲ倒ニシテ以テ賓ヲ迎ヘ
 周公ハ髮ヲ握テ而シテ士ヲ待ス
 陳蕃ハ徐穉ヲ器重シ榻ヲ下メ相延キ
 孔子ハ道ニ程子ニ遇ヒ蓋ヲ傾而メ語
 伯牙絃ヲ絶フハ子期ヲ失テ更ニ知音ノ
 輩無ケレバナリ

故事必讀

朋友賓主

三七

輒ナ門ヲ閉シ客ノ車轡ヲ取
 テ井中ニ投シ急アルモ去ル
 コヲ得ザラシメタリ
 漢ノ蔡邕客ヲ會ス王蔡
 ガ門ニ至ルト聞履ヲ倒シ
 之ヲ迎ヘタリ
 陳蕃ハ北府ノ尹タリ徐穉ハ
 南昌ノ人罕ニ接見ノ相敬
 グ因テ別ニ榻ヲ設ケ以テ穉
 ヲ待シ去レハ則之ヲ懸ケ來レ
 バ則之ヲ下セリ孔子郊ニ之ク
 途ニ程子ニ遇ヒ蓋テ頃テ語
 リ終日相親ミタリ
 伯牙琴ヲ鼓ケハ鐘子期音
 ヲ知ル牙志高山ニ在レバ子
 期曰巍々乎高山ノ如シ志流
 水ニ在レバ曰洋洋々乎江河ノ如ト
 子期死ス牙絃ヲ絶テ復鼓セ
 々世ニ知音ノ者無テ以テナリ
 管寧華歆ト共ニ書ヲ讀ニ

管寧席ヲ割テ華歆ヲ拒グハ同志ノ人
 ニ非ザルヲ謂フ
 金ヲ分テ多ク與ルハ鮑叔獨管仲ノ貧
 ナルヲ知レバナナリ
 緜袍垂レ愛スルハ須賈ガ深ク范叔ノ
 窮ムヲ憐レムナリ
 知主賓ハ聯ルニ情ヲ以テシ須ラク
 ヲ東南ノ美ヲ盡スベシ
 要朋友ハ合サニ義ヲ以テス當サニ
 切悃ノ誠ヲ盡スベシ

軒ニ乘シ門ヲ過ル者アレ
 ハ散出テ之ヲ見ル寧曰富
 貴當ニ自カラ致スベシ豈他
 人ヲ窺ハンヤト遂ニ席ヲ割
 キ坐ヲ分テ之ト絶セリ

離騷ノ注云蹇修ハ人名媒
 ヲ為以テ詞理ヲ通ス
 詩ニ柯ヲ伐ル如何斧ニ非
 レハ克ハガ妻ヲ取ル如何媒
 ニ匪レバ得ガ
 晋ノ令狐策氷上ニ立テ氷
 下ノ人ト語ルト夢山占ノ曰
 陽ニシテ陰ト語ル媒介ノ
 トナリト果シ人ノ為ニ媒
 ヲ作セリ
 周礼ニ媒氏萬民ノ判ヲ
 掌トル注ニ云判ハ半ナリ

管仲鮑叔ト友タリ叔金ヲ得テ之ヲ分ツニ多ク仲ニ與フ仲曰鮑子我貧
 ヲ知ルナリ又曰我ヲ生ム者ハ親ナリ我ヲ知ル者ハ叔ナリト
 魏ノ須賈秦ニ使ス故人范雎秦ニ相タリ乃チ微行ノ賈ヲ試ム賈曰ク
 范叔一寒如此カト乃チ緜袍ヲ以テ之ニ贈ル
 東方ハ主位南方ハ客位ナリ論語ニ朋友ニハ切々悃々タリト切々ハ
 懇到ナリ悃々ハ詳勉ナリト
 昏姻 婚ハ昏時ニ礼ヲ行フ故ニ昏ト曰フ姻ハ婦人ハ夫ニ因テ
 親ミ父母ハ子女ニ因テ親シム故ニ姻ト曰フナリ
 良縁ハ夙締ニ由リ
 佳偶ハ天成自リス
 蹇修ト柯人トハ皆ナ是レ媒灼ノ號
 氷人ト掌判トハ悉是言ヲ傳ルノ人
 禮ハ六禮ノ周子キヲ須ヒ
 好ミハ二姓ノ好ミヲ合ス

故事必讀

婚姻

其半ヲ夫婦ト成スナリ
 議婚ニ納采問名納吉納
 徵請期親迎是レヲ六礼
 ト為
 女子嫁ヲ許セバ繫ルニ
 ヲ以テス其係屬スル所アル
 ヲ示スナリ
 漢ノ向長字ハ子平子ノ
 為ニ嫁娶畢リ家事ヲ断
 シ相関ラズ乃チ曰吾男女
 已ニ嫁娶セリ吾願畢レリト
 聘儀ニ雁ヲ執ルハ其陰陽
 往來ノ義ヲ取ルナリ雁ハ
 陽ニ向テ去リ陰ニ向テ來ルニ
 鳳凰于ニ飛テ和鳴銜々
 ノ義ヲ取リ鳳占ト云
 詩ニ綢繆束薪三星天ニ在
 今夕何ノタタ此ノ良人ヲ見ル
 ト喜ビノ甚シク自カラ慶ス
 ルノ辞ナリ

女ノ嫁スルニ子歸ト曰ヒ
 男ノ婚スルニ完娶ト曰フ
 婚姻ニ財ヲ論スルハ夷虜ノ道
 同姓婚セザルハ周禮則チ然リ
 女ノ家聘礼ヲ受ル之ヲ許纓ト曰ヒ
 新婦祖先ニ謁スル之ヲ廟見ト曰フ
 文定納采ハ皆チ聘ヲ行ナフノ名ナリ
 女嫁男婚スル子平ノ願ヲ了スト謂フ
 聘儀ニ鴈幣ト曰ヒ
 妻ヲ卜ニ鳳占ト曰フ

唐ノ韋固婚ヲ求ム月下ニ
 老人アリ曰我赤繩アリ以テ
 夫婦ノ足ヲ擊グ此繩一繫
 スレバ仇敵ノ家異楚地ヲ
 異ニシ貴賤懸隔スト雖死終
 ニ違フベカラズ君ガ婦令適
 ニ三歳ナリ十四年ヲ経テ君ガ
 門ニ入ント後果ノ其言ノ如シ
 一匏ヲ以テ分テ兩器ト為ス
 之ヲ盥ト謂フ皆礼ノ并督ト
 婦ト各一片ヲ執リ以テ醋ハ
 巾ハ手ヲ拭フ者櫛ハ髮ヲ
 理ル者箕箒ハ洒掃ニ供ス
 ル者皆婦ノ執リ以テ其夫ニ
 事フル所ナリ
 母ハ女師ナリ閑ハ習フナリ
 礼ノ内則ニハ多ク婦道ヲ
 載ス故ニ謂フナリ
 綠窓云々紅樓云々ハ白氏
 ノ詩ニ出ツ

誓ヲ成スノ日ヲ星期ト曰ヒ
 命ヲ傳ルノ人ヲ月老ト曰フ
 下采ハ即チ是レ納幣ナリ
 合盃ハ是レ盃ヲ交ルニ係ル
 巾櫛ヲ執箕箒ヲ奉スルハ皆女家自カ
 ラ謙スルノ辭ナリ
 姻訓ニ閑ヒ内則ニ習フハ皆チ男家女
 ヲ稱スルノ說ナリ
 綠窓ハ是レ貧女ノ室
 紅樓ハ是レ富女ノ居

女事必讀

婚姻

三十九

詩ニ桃ノ天々タルハタル其
花之ノ子子ニ歸ハ男女婚姻
宣ク時ヲ以テスヘキヲ言フ
標梅ハ梅落テ樹ニ在ル者以
トキヲ言フ以テ時過テ大ニ
晚キヲ見ハストリ
唐ノ子祐禁衛ニ歩シ御溝
ニ紅葉ノ流ルヲ見ル葉上
詩ヲ題シ云流水何太急深
宮盡日閑慙慙謝紅葉好
去到入閨祐モ亦詩ヲ題シ
紅葉ヲ流ス宮女之ヲ得タリ
後放サレテ祐ニ嫁ス他日各
紅葉ノ詩ヲ出シ互ヒ見テ大
驚キタリ祐カ詩ニ云獨歩
天溝岸臨流得葉時此
情誰會得腸斷一聯詩
唐ノ郭元振半姿美ナリ
宰相張嘉真之ニ女ヲ妻ハセン
ト欲シ曰吾ニ五女アリ各一絲

ヲ慢後ニ執ラシム子之ヲ牽
テ得タル者ヲ婦ト為セト
振一紅絲ヲ執リ第三女ヲ
得ルニ最モ美色アリ
漢ノ武帝幼ナル時長公主其
女ヲ指テ曰阿嬌好キヤ否ヤ武
帝曰若シ阿嬌ヲ得バ當ニ
金屋ヲ以テ之ヲ貯フベシト
韋固月老ノ解前ニ出
徐州ノ古豐縣朱陳村アリ
村中惟朱陳ノ兩姓アルノ
ミセ々婚姻ヲ為ス
秦晋ハ皆大國其勢ニ相匹
ス故ニ世々婚姻ヲ結ベリ
雍伯義漿ヲ致シ行人ニ給
スルヲ三年一人アリ飲訖テ
石子一升ヲ出シ伯ニ與テ曰
此レヲ種エハ好玉ヲ生シ并
テ好婦ヲ得ント乃チ之ヲ種
ウ後數年白壁五雙ヲ得

故事必讀

挑天ハ婚姻ノ時ニ及ブヲ謂ヒ
標梅ハ婚期ノ已ニ過ルヲ謂フ
御溝ニ葉ヲ拾フテ子祐宮娥ヲ得ルヲ
喜コビ
綉幙絲ヲ牽ハ元振ガ美女ヲ得ルヲ幸
トナス
漢武景帝ニ對シ婦ヲ論シテ金屋嬌ヲ
貯ヘント欲シ
韋固月老ト誓ヲ論メ始テ知ル赤繩ノ
足ヲ繫グヲヲ

朱陳一村ニシテ而ノ好ヲ結ビ
秦晋ノ兩國ハ以テ誓ヲ成セリ
藍田玉ヲ種ルハ雍伯ガ縁ナリ
寶窓誓ヲ選グハ林甫ガ女ナリ
鵲橋ニ駕ノ以テ河ヲ渡ルハ牛女相會
スルナリ
雀屏ヲ射テ而シ目ニ中ハ唐高ノ妻ヲ
得ルナリ
禮ニ親迎ヲ重スルガ若キニ至テハ人倫
ノ始ヲ正ス所以ナリ

故事必讀 婚姻女子 四十

以テ聘トシ徐氏ノ女ヲ娶レ
唐ノ李林甫六女アリ壁間
一窓ヲ開キ飾ルニ雜宝ヲ以
テシ蒙クニ繡紵ヲ以テシ子
弟ノ入り謁スルゴトニ六女ヲ
ノ窓下ニ窺ハシメ自カラ選
テ之ニ事ヘシム

宋ノ高太后ハ哲宗ノ沖
幼ヲ以テ皇猷ニ親臨シ故臣
ヲ召シ新法ヲ罷ム史臣贊ノ
真ニ女中ノ堯舜ト稱セリ
晋ノ張玄ノ妹才質アリ顧
氏ニ適ク濟泥之ヲ美メテ曰
清心玉映自カラ是レ閨房
ノ秀ナリト淑ハ善ナリ美

故事必讀

詩ニ好速ヲ首メトスルハ王化ノ原ヲ
崇シトスル所以ナリ

唐ノ高祖ノ皇后竇氏其父毅以為ラク此女奇相妾リニ人ニ與ヘ
ジト因テ二孔雀ヲ展上ニ画キ婚ヲ求ムル者ヲノ二矢ヲ以テ之ヲ射セ
シメ陰ニ目ニ中ル者ニ女ヲ與ヘント約ス射ル者數十皆合ハズ高祖
最後ニ射テ各一目ニ中ツ因テ遂ニ帝ニ歸ケリ

女子 人ノ陽ヲ男ト曰ヒ陰ヲ女ト曰フ又巳ニ嫁スル
ヲ婦ト曰ヒ未ダ嫁セサルヲ女ト曰フ

男子ハ乾ノ剛ヲ稟ケ

女子ハ坤ノ順ニ配ス

賢后ハ女中ノ堯舜ト稱シ

烈女ハ女中ノ丈夫ト稱ス

閨秀ト曰ヒ淑媛ト曰フハ皆ナ賢女ヲ
稱スルナリ

閨範ト曰ヒ懿徳ト曰フハ并ニ佳人ヲ
美タルナリ

婦ハ中饋ヲ主トリ飲食ヲ烹治スルノ
名ナリ

女子歸寧スルハ家ニ回テ親ヲ省ルノ
謂ナリ

何ヲカ三從ト謂フ父ニ從夫ニ從子ニ
從フ

色ヲ獲ト曰フ閨範懿徳ハ
婦人ノ才徳アルヲ稱ス
饋ハ食ナリ主ハ專ナリ
婦人專ラ厨中飲食ノ事ヲ
主トルヲ謂フ
婦ノ父母ノ家ニ歸リテ安
ヲ問フヲ歸寧ト謂フ
孔子曰ク婦人ハ入ニ伏スル
ナリ專制ノ義ナシ
婦徳ハ貞証ナリ婦言ハ詞
令ナリ婦工ハ絲麻婦
容ハ婉婉ナリ此レヲ
四徳ト謂フ
周姜太妊太姒俱ニ懿徳
アリテ内助ノ賢ト稱セリ
夏ノ桀王ハ妹喜ヲ寵シ
亡ビ商履ノ紂王ハ妲己
ヲ寵シテ亡ビ此レ皆傾國
ノ妖婦ナリ

從フ

故事必讀 女子

アリ叔父安嘗テ内集ス俄
ニ雪下ル安曰ク白雪紛々
何所似美ノ子朗曰ク散
空中差可擬ト道韞曰ク
未若柳絮因風起ト安曰
ク柳絮才高ト
氷ハ至堅雪ハ至潔ノモノナリ
因テ婦人ノ節操ニ比ス衛ノ
太子共伯蚤ク死ス其妻
共姜義ヲ守ル父母奪フ
テ嫁ヒシメント欲ス共姜乃
チ拍舟ノ詩ヲ作テ他無キ
ヲ誓ヘリ
晋ノ叔向巫臣氏ヲ娶ント
欲ス其母ノ曰ク夫レ尤物
ハ以テ人ヲ移スニ足ルアリ
苟モ徳義アルニ非レバ必ス
禍ヒ及バント尤ハ異ナリ
李延年ノ詩ニ北方ニ佳人
アリ絶世ニ獨立一顧スレバ

何ヲカ四徳ト謂フ婦徳婦言婦工婦容
ナリ
周家ノ母儀ハ太王ニハ周姜アリ王季
ニハ太妊アリ文王ニハ后妃アリ
三代ノ國ヲ亡ス夏桀ハ妹喜ヲ以シ商紂
ハ妲己ヲ以シ周幽ハ褒姒ヲ以テス
蘭蕙ノ質柳絮ノ才ハ皆ナ女人ノ美譽
氷雪ノ心拍舟ノ操ハ悉ク孀婦ノ清聲
女貌ノ妖嬈タル之レヲ尤物ト謂ヒ
婦容ノ嬌媚ナルハ實ニ城ヲ傾ゲシ
潘妃ノ歩ハ朶々タル蓮花
小蠻ノ腰ハ纖々タル楊柳
張麗華ガ髪ハ光リ鑑マク
吳絳仙ノ秀色ハ食スマシ
麗娟ガ氣ハ馥トノ蘭ノ如シ呵スル處
恰モ香霧ヲ成シ
太真ガ涙ハ血ヨリ紅ニシテ滴タル時
更ニ紅氷ヲ結ブ
孟光ガ力大ニシテ石臼ヲ擎マシ
飛燕ハ身輕クノ掌上ニ舞フベシ

人ノ城ヲ傾ケ再顧スレバ人
ノ國ヲ傾クト
齊ノ東昏侯金ヲ鑿テ蓮
花ヲ為リ地ニ貼シ潘妃ヲ
其上ヲ歩セシム故ニ女人ノ
足ヲ謂テ金蓮ト曰フ
小蠻ハ白樂天ノ妾ニテ善
ク舞ヘリ故ニ人楊柳小蠻
腰ト謂フ
隋ノ煬帝絳仙ヲ見ル毎
ニ曰古人秀色食スベシト謂
フ絳仙ノ若キモノハ以テ飢
ヲ療スベシト
揚太真初メ宮ニ入キ父母
ニ別ルヲ悲ミ泪滴リ凍テ
紅氷ヲ成セリト
孟光ノ一夫婦ノ部ニ出
趙飛燕ハ漢ノ成帝ノ妃
ナリ
漢ノ淳于意罪アリテ刑ニ當

故事必讀
女子
四十二

ル乃チ罵テ曰我女ヲ生テ男ノ生ズ緩急益スル所非バト其幼女緹縈之ヲ悲ミ上書シ入テ官婢ト為リ以テ父ノ罪ヲ贖ハンコト願フ文帝之ヲ憐ミ遂ニ肉刑ヲ除ケテ鄭ノ義宗ノ妻盧氏ハ夜ル盜アリテ其家ヲ劫カス家人皆逃ケ匿ル惟姑姥未タ去ラス盧氏刃ヲ冒シ其側ニ立テ之ヲ衛レリ晋ノ陶侃ノ母湛氏ハ適范逵ガ至ルニ家貧ニシテ因テ髮ヲ截有ニ易テ之ヲ待シ薦ヲ對シ馬ニ給セリ漢武徵行ノ夜ル百谷村ニ至ル主人其賊ヲ疑ヒ之ヲ執シト欲ス村媪曰客ハ常人ニ非ジト乃チ雞ヲ殺シ之ニ謝シタリ

古事記

緹縈上書シテ而ノ父ヲ救ヒ
 盧氏刃ヲ冒シテ而ノ姑ヲ衛ル
 此レ女ノ孝ナル者ナリ
 侃母髮ヲ截テ以テ賓ヲ延キ
 村媪雞ヲ殺シテ而ノ客ヲ謝ス
 此レ女ノ賢ナル者ナリ
 韓玖英ハ賊ノ穢ヲ引テ而ノ自カラ穢ニ投シ
 陳仲ガ妻ハ德ヲ隕サンコトヲ恐テ而ノ寧ニ崖ニ隕ツ

漢ノ重成ノ女攻英賊ニ遇テ執ヘラル乃チ自カラ糞坑中ニ投ス賊乃チ之ヲ捨タリ陳中ノ妻ハ張叔明ノ妹ナリ其媪ト行テ賊ニ遇ヒ辱セラレントヲ恐レ遂ニ崖下ニ墜テ死セリ五代ノ王凝任處ニ卒ス妻李氏其幼子ヲ携ヘ以テ歸ル途開封府ノ過テ宿ニ投ゼントスルニ主人納レズ其臂ヲ牽テ之ヲ出ス李氏曰ク此手入ノ為ニ執レシヤト即斧ヲ用テ之ヲ斷テリ夏侯ノ女曹氏ニ嫁ノ早ク寡トナル家人再嫁ヲ勸ム女乃チ刀ヲ引テ鼻ヲ割キ以テ嫁セザルノ志ヲ誓ヘリ班固漢書ヲ修シ未ダ竣ラバノ卒ス其妹昭之レヲ續

此レ女ノ烈ナル者ナリ
 王凝ガ妻ハ牽レテ臂ヲ斷テ地ニ投シ
 曹令女ハ志ヲ誓ヒ刀ヲ引テ鼻ヲ割グ
 此レ女ノ節ナル者ナリ
 曹大家ハ續テ漢帙ヲ完クシ
 徐惠妃ハ筆ヲ援バ文ヲ成ス
 此レ女ノ才アル者ナリ
 載女ハ練裳竹筥
 孟光ハ荆釵布裙
 此レ女ノ貧ナル者ナリ

女子

ク昭ハ曹世叔ニ事フ故曹
大家ト云フ
唐ノ徐孝徳ノ女ハ八歳ニシ
テ能ク文ヲ成ス太宗聞テ
之ヲ召シ宮ニ入テ才人ト為
唐ノ任環太宗ニ寵アリ
二美女ヲ賜フ妻柳氏之ヲ
妬ミ其髮ヲ爛セリ
晋ノ賈充ノ婦郭氏子ヲ
生ム乳母ニ命テ撫養ス充
乳母ニ就テ之ヲ見ル郭其
私スルカト疑ヒ乳母ヲ鞭チ
殺ス因テ子モ亦卒ス後又
子ヲ生ス復タ乳母ヲ召ス
又疑フ前ノ如ク亦之ヲ殺
ス子モ亦卒ス充遂ニ漏ラ
絶テリ
晋ノ韓壽ハ姿容美ナリ賈
充辟テ嫁ト為死ノ女私ニ
之ト通ズ時ニ外國異香ヲ進

柳氏ハ妃ノ髮ヲ禿シ
郭氏ハ夫ノ嗣ヲ絶ツ
此レ女ノ妬メル者ナリ
賈女ハ韓壽ニ通シ以テ香ヲ偷ミ
齊女ハ陳郎ニ會シ而メ廟ヲ燬ク
此レ女ノ淫ナル者ナリ
東施ハ顰ニ效ヒ而メ厭フベク
無鹽ハ刻畫シテ以テ堪ヘ難ク
此レ女ノ醜クキ者ナリ
古ヨリ貞淫各異ナリ

武帝以テ充ニ賜フ女其香
ヲ竊テ壽ニ與フ充覺リ遂
ニ女ヲ以テ壽ニ妻ハス
北齊ノ公主生ル乳母ニ命
テ撫養ス後乳母ノ子陳
郎之ヲ慕フ公主廟ニ會シ
通センヲ約ノ果サス陳郎頗
悶シ遂ニ唐ヲ以タリ
諸暨縣ニ亭羅村アリ俱ニ
施ヲ姓トス若耶溪水ヲ夾
テ居ル西ヲ西施ト曰ヒ東
ヲ東施ト曰フ西村ニ女子
アリ絶美ナリ因テ稱シ西施
ト曰フ人々悦慕ス常ニ疾
アリ則チ心ヲ撫シ擲ス而メ
東村ノ醜婦以テ為ラシ西
施ヲ悦ガハ心ヲ撫シ擲スル
ニ因ルノミト故ニ之ニ效テ擲
ス貌愈醜シ人皆厭テ走レ

人生妍醜同ジカラズ
是生菩薩九子母鳩盤荼ハ婦態ノ變
ノ更畏ルバキヲ謂フナリ
故錢樹子一點紅無麋恥ハ青樓ノ妓
ニ女名ヲ殊ニスルヲ謂フ
此レ固ニ人群ニ列セズ
亦之ヲ附ノ以笑ヲ博ス
唐ノ裴炎常ニ人ニ言フ妻ニ三畏アリ年少ノ時之ヲ視レバ生菩薩
ノ如シ人安ゾ畏レザランヤ兒女前ニ滿ルニ及テ之ヲ視レバ九子
母ノ如シ人安ゾ畏レザランヤ五六十二至リ猶粧粉ヲ施ス或
ハ黒ク或ハ青ク尙紫茶ノ如シ人安ゾ畏レザランヤト
唐ノ許子和ハ吉州ノ求新ノ倡家ノ女ナリ宮ニ入り因テ求新ト名
ツク能ク新聲ヲ變ス卒スルニ臨ミ其母ニ曰フ阿母錢樹子倒ルト

故事必讀

女子外戚

四十四

古事記

一、點、紅、ハ、敵、ヲ、謂、フ、ナリ、故、ヲ、詠、メ、一、及、玉、手、千、人、枕、半、点、朱、唇、万、客、嘗、ム、ノ、句、アリ

外戚 戚ハ字書ニ近ナリ親ナリナド云注アリテ妻ハ元外ヨリ來テ相親近スルニヨリ其親族ヲ外戚ト曰フナリ

帝ノ女ハ乃チ公侯婚ヲ主トル故ニ公

主ノ稱アリ

帝ノ婿ハ正駕ノ車ニ非ズ乃チ是レ駟

馬ノ職ナリ

郡主縣君ハ皆ナ宗女ノ謂ナリ

儀賓國賓ハ皆ナ宗婿ノ稱ナリ

舊好ヲ通家ト曰ヒ

古ヘ天子ノ女ヲ諸侯ニ嫁スルニ公侯同姓ノ者ヲ之ヲ妻トラスム故ニ稱ノ公主ト曰フ
駟ハ副ナリ正駕ニ非ルナリ漢ニ始テ駟馬都尉ヲ拜ソ御駕ヲ掌ラシム
宗女ハ國ト宗ヲ同ウスルノ女ヌ或ハ封ノ郡主ト為或ハ封ノ縣君ト為宗婿ハ王府ノ婿ナリ
晋ノ衛珣妻ノ父樂廣ト皆重名アリ議者因テ婦翁ヲ以テ水清トシ女婿ヲ

好親ヲ懿戚ト曰フ

氷清玉潤ハ丈人女婿榮ヲ同クシ

泰山泰山ハ岳母岳父ノ兩號ナリ

新婿ヲ嬌客ト曰ヒ

貴婿ヲ乘龍ト曰フ

贅婿ヲ館甥ト曰ヒ

賢婿ヲ快婿ト曰フ

凡東牀ニ屬スルハ

俱モニ半子ト為ス

女子ヲ門楣ト號ス唐ノ貴妃ハ父母ニ

玉潤ト為丈人ノ妻ノ父ヲ曰泰山ノ上ニ丈人峰アリ因テ妻父ヲ泰山又岳丈ト謂フ魏ノ黃尚李元礼ト俱ニ司徒ト為リ並ニ太尉担叔元ノ女ヲ娶ル時人叔元兩女俱ニ龍ニ乘ルト謂フ孟子ニ帝甥ヲ貳室ニ館ストアリ
晋ノ王羲之ハ王導ノ從子ナリ郗鑒門生ヲ遣リ女婿ヲ導ニ求ム導東廂ニ就テ徧ク子弟ヲ觀セシム門生還曰王氏ノ諸少並ニ佳也然レ此レ佳者ノ如シト鑒カ曰ク東廂ノ林上ニアリ坦腹獨食ノ聞ザル者ノ如シト鑒カ曰ク此レ佳者ナリ訪ニ及テ乃チ羲之ヲ遂ニ女ヲ以テ之ニ妻ハス半子ハ女婿ヲ謂フ

故事必讀

外戚

四十五

門楣ハ門上ノ横梁ナリ其門戸ニ光榮アルヲ言フナリ
 晋ノ魏舒少ウシ孤ナリ外家甯氏ニ養ハル甯氏宅ヲ起ス宅ヲ相スル者ノ曰ク當ニ貴甥ヲ出スベシト舒長スルニ及テ果ソシ徒ト為ル
 葭ハ芦ナリ葦ハ其泊波至薄ナリ薄親ヲ謙シ言フ
 吳ノ孫策皖ヲ攻テ喬公ノ二女ヲ得皆國色ナリ自カラ大喬ヲ納レ周瑜小喬ヲ納ル
 李晋卿ニ二女アリ將ニ死セントスルキ家人ニ囑ノ曰ク長女ハ王樂道岳州ノ判官ニ配セヨ次女ハ元發布衣ニ配セヨ此二賢ヲ得バ足ント乃其言ノ如クス二人遂ニ袂ヲ連テ次年發科ニ登リ不日

光リアリ
 外甥ヲ宅相ト稱ス晋ノ魏舒ハ母家ニ報ヲ期ス
 共ニ舊姻ヲ敘テ原ヨリ瓜葛ノ親アリ
 ト曰ヒ
 自カラ劣戚ヲ謙ノ忝ク葭萐ノ末ニ在
 ト曰フ
 大喬小喬ハ皆十姨父ノ號ナリ
 連襟連袂ハ亦夕姨夫ノ稱トス
 葭葭玉樹ニ倚ルハ自カラ戚屬ノ光リ

翰林ニ相繼グ袂ヲ連ルハ衣襟ノ相連ルカ如キナリ
 毛曾夏侯堪ト並ヒ坐シ其相匹セザルヲ謙シ言フ
 葭ハ蒭生ナリ女蘿ハ兔絲ナリ葭蘿ノ松上ニ施ルヲ以テ兄弟親戚纏綿依附ノ意ニ比スルナリ
 不凡ハ猶ホ尋常ナラザルト言フガ如シ
 申ハ即チ申伯ナリ詩ニ維岳神ヲ降シ甫及ビ申ヲ生ズトアリ
 湯餅ハ凡ソ麪ヲ以テ之ヲ煮ル皆テ湯餅ト曰フ
 江南ノ風俗子生レテ期ニ

ヲ借ルコトヲ謙シ
 葭蘿喬松ニ施ルハ自カラ依附ノ所ヲ得ヲ幸トスルナリ
 不凡ノ子ハ必ス其生ヲ異ニス
 大徳ノ人ハ必ス其壽ヲ得ナリ
 人ノ生日ヲ稱スルニ初度ノ辰ト曰ヒ人ノ旬ニ逢フヲ生申今旦ト曰フナリ

老壽幼誕
 說文ニ十ヲ老ト曰フトアリ是ハ極老ト云フ義ナルマシ壽ハ凡ソ年齒皆十壽ト曰フ幼ハ十歳以下ヲ曰フ誕ハ元天子ノ生ルニ降誕ト云ヒタルヨリ後ニハ総テ人ノ出産ヲ誕生ト云フナリ

故事必讀 外戚老壽幼誕 四十六

醉盤取ル所ノ物ヲ設ク男ニ
 ハ弓矢紙筆女ニハ針線ヲ
 用ヒ之ヲ兒ノ前ニ置キ其取
 ル所ヲ觀テ以テ智愚ヲ試ム
 礼記ニ男ノ生日ニ桑弧蓬
 矢ヲ門ニ懸ケ上下四方ヲ
 射ルノ義ヲ取ル男子四方ヲ
 事ト為ルノ意
 女ノ生日ニハ帨巾ヲ門ニ設
 ク女子ノ事アル所ナリ
 嵩ハ五岳ノ内中岳ナリ神
 ハ神靈ナリ不凡ノ人ハ本ト
 嵩岳ノ神ノ降リ生ルト謂フ
 意ニ緩急非蓋ノ解前ニ出
 詩ニ之ヲ弄スルニ璋ヲ以テス
 ルハ其德ヲ尚トナリ
 瓦ヲ以テスルハ其事アル所ヲ
 習フナリ瓦ハ紡磚ナリ熊
 夢ニ云々詩斯干ノ篇ニ出
 ツ

三朝洗^フ三^ビスルヲ湯餅ノ會ト曰ヒ
 周歲周ヲ試ルヲ醉盤ノ期ト曰フナリ
 男ノ生辰ヲ懸弧ノ令旦ト曰ヒ
 女ノ生誕ヲ帨ヲ設佳辰ト曰フ
 人ノ子ヲ生ムヲ賀スルニ嵩嶽神ヲ降
 スト曰ヒ
 自カラ女ヲ生ムヲ謙シテ緩急益ニ非
 ズト曰フ
 男ヲ生ム之レヲ弄璋ト曰ヒ
 女ヲ生ム之レヲ弄瓦ト曰フ

鄭ノ文公夢ミル所アリテ妾
 燕吉ニ蘭ヲ與ヘ之ヲ幸ノ
 穆公ヲ生ム因テ名ケテ蘭
 穆公ト曰フ
 晋ノ桓温ノ生レシト温嶠
 見テ奇骨アリト謂ヒ又其
 帝ク聲ヲ聞テ此レ真ノ英
 物ナリト言ヒタリ
 姜源ハ高辛氏ノ妃ナリ后
 稷ヲ生ム稷堯ノ田正官ト為
 ル是即周ノ祖ナリ
 帝嚳ノ妃簡狄ハ契ヲ生ム
 契舜ノ司徒ト為リ商ニ封セ
 ラル後世遂ニ天下ヲ有テリ
 孔子ノ生ル前麟アリテ玉
 書ヲ闕里ニ吐ク其文ニ曰ク

熊ヲ夢ミ羆ヲ夢ルハ男子ノ兆トシ
 虺ヲ夢ミ蛇ヲ夢ルハ女子ノ稱ナリ
 蘭ヲ夢テ吉ニ叶フハ鄭文公ノ侍妾穆
 公ノ奇ヲ生スルナリ
 英物奇ト稱スルハ晋ノ温嶠ガ聲ヲ聞
 テ桓温ノ異ヲ知ナリ
 姜源ノ稷ヲ生ムハ大人ノ跡ヲ履デ而
 ノ娠メルアリ
 簡狄ノ契ヲ生ムハ玄鳥ノ卵ヲ吞デ而
 ノ孕ニ叶ヘリ

古事記
 老壽幼誕
 四十七

水精之子孫衰周而素王トアリタリ

張説ノ母一玉燕飛テ懷中ニ入ト夢ミ因テ孕メルアリテ説ヲ生シ後宰相トナル

趙ノ婕妤嬪メレ十四月ニシテ弗陵太子ヲ生ム

老子ハ李樹ノ下ニ生ル因テ李ヲ以テ姓トス生ルノ時頭髮盡ク白カリシト云

漢ノ韋元將韋仲將兄弟トモ並ヒニ美ナリ孔融其父ニ與ル書ニ曰ク意ハザリキ双珠並ニ老蚌ニ出ントハト

宋ノ梁灝八十二歳ニテ状元ニ及第ス其謝恩ノ詩ノ末

故事必讀

麟ノ玉書ヲ吐クハ天孔子ヲ生スルノ

瑞ナリ

玉燕ノ懷ニ投スルハ夢ニ張説ヲ孕ノ

奇ナリ

弗陵ノ太子ハ懷胎十月ニシテ而シテ

始テ生レ

老子道君ハ懷孕八十年ニシテ而シテ始

メテ誕ス

晩年子ヲ生之ヲ老蚌玉ヲ生スト謂ヒ

暮歳科ニ登ハ正ニ是レ龍頭老ニ屬ス

句ニ也知年必登科子爭奈龍頭屬老成

松柏ハ能ク雪霜ヲ凌多ク

桑榆ハ日ノ入ル所ノ処ナリ

後漢ノ光武帝馬援ノ老健ナルヲ稱シ曰ク矍鑠々

ル哉是翁也上矍鑠ハ老テ健ナル良

贖ハ耳薄スルナリ眊ハ目昏スルナリ

龍鐘ノ切癢ナリ潦倒ノ切老ナリ即チ老羸癢疾ノ義ナリ

老壽ヲ賀スルニ南極ノ星輝クト曰ヒ	女壽ヲ賀スルニ中天ノ婺煥スト曰ク	松柏ノ節操ハ其ノ壽元ノ久ニ耐ヘル	ヲ羨ルナリ	桑榆ノ暮景ハ自カラ老景ノ多無キヲ	謙スルナリ	矍鑠ハ人ノ老健ナルヲ稱	眊ハ自カラ衰頹ヲ謙ス	黃髮兒齒ハ壽アルノ徴シ	龍鐘潦倒ハ年高ノ狀ナリ
------------------	------------------	------------------	-------	------------------	-------	-------------	------------	-------------	-------------

故事必讀

老壽幼誕

行年五十而ノ四十九年ノ
非ヲ知ルハ蓬伯玉ノ語ナリ

蓋ハ老ナリ年ノ至ルノ義
蓋ハ邁ナリ老ナリ
期ハ望ムナリ人望ム所百年
ニ過キズ願ハ養ナリ百年ハ
惟養テ人ニ待ツノ義ナリ

勺ヲ舞フハ即チ周頌ヲ以
テ武王ヲ美ルナリ象ヲ舞フ
ハ即チ以テ文王ヲ美ルナリ之
ヲ舞フハ以テ其体ヲ柔ラカ
ニスルナリ今學校ニテ体操
ヲ為スモ其意自カラ相似ク
ルモノト謂フヘシ
王制六十以上人ノ老年ヲ稱
ハリ之ヲ制外ニ特スルナリ

古事必讀

日月逾邁クハ徒ニ自カラ傷悲ムナリ	春秋幾何ゾトハ人ノ壽算ヲ問フナリ	少年ヲ稱スルニ春秋鼎ニ盛ト曰ヒ	高年ヲ羨ヤムニ齒德俱ニ尊ト曰フ	行年五十當ニ四十九年ノ非ヲ知バシ	世ニ在百年那ゾ三萬六千日ノ樂有シ	百歳ヲ上壽ト曰ヒ八十ヲ中壽ト曰ヒ	六十ヲ下壽ト曰フ	八十ヲ蓋ト曰ヒ九十ヲ耄ト曰ヒ百歳	ヲ期願ト曰フナリ
------------------	------------------	-----------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	----------	------------------	----------

童子十歳ニシテ外傳ニ就キ十三ニシテ	ヲ舞ヒ成童ニ象ヲ舞フ	老者六十ニシテ郷ニ杖キ七十ハ國ニ	杖キ八十ハ朝ニ杖ツク	後世固トニ畏ル可シト為ス	而ノ高年尤モ當ニ尊ムベシ
-------------------	------------	------------------	------------	--------------	--------------

標註刪修故事必讀卷上終

老壽幼誕

四十九

坪ハ皮ナリ四形ヲ謂フ
 頰ハ四ノ四圍高キナリ
 駢脅ハ肋骨ノ一枚板ナ
 ルヲ謂フ
 孝經ニ身体髮膚ハ父母
 ニ受ク敢テ毀傷スベカ
 ラスト云リ
 唐ノ婁師徳ハ度量アリ
 其弟代州ニ守タリ徳之
 ニ事ニ耐ルヲ教訓ス弟
 曰ク若シ人ノ面ニ唾ス
 ル有バ之ヲ拭フテ止マ
 シ乎ト徳曰ク是其怒リ
 ヲ重ヌルナリ當ニ自カ
 ラ乾カシムベキノミト
 燦銷ハ皆鎔ナリ甚ダ諱
 諧ノ畏ルベキヲ言ナリ
 誅求ハ徵發ナリ魯處子
 賤ヲノ單父ノ令タラシ
 ム子賤書ヲ善スル者一

文王ハ龍顔ニメ而メ虎眉アリ
 漢高ハ斗胸ニメ而メ隆準ナリ
 孔子ノ頂ハ圩ノ若トク
 文王ノ胸ニハ四乳アリ
 周公ハ反握シテ興周ノ相ト作り
 重耳ハ駢脅ニメ霸晉ノ君ト為ル
 此レ皆ナ古聖ノ英姿不凡ノ貴品ナ
 リ
 髮膚毀傷スヘカラサル若キ至テハ
 曾子常ニ身ヲ守ルヲ以テ大ト為ス

人ヲ借り物ヲ書シノ子
 賤傍ヨリ其肘ヲ掣キ書
 醜ナレバ則チ之ヲ怒ル
 好ク書ント欲スレハ又
 之ヲ掣ク書者辞シ還リ
 以テ告グ魯君曰ク子賤
 吾ガ之ヲ擾スガ若キハ
 善政ヲ施スヲ得ジト命
 ノ單父ニ徵發スル一母
 ラシメケレバ其化甚タ
 行ハレタリ
 厚顔ハ愧ノ面ニ見ハレ
 ガルナリ
 促ハ近ナリ二人對坐シ
 膝ヲ前メ近ケテ心事ヲ
 談スルヲ言フ
 趙王和氏ノ璧ヲ得タリ
 秦王十五城ヲ以テ之ニ
 欲ント欲ス相如璧ヲ捧
 ノ秦ニ入ル秦王城ヲ償

人ヲ待ツハ須當ニ量大ナルベシ師徳ハ
 面ニ唾セラレモ自カラ乾ヲ貴トブ
 讒口傷ニ中テ金燦ス可ク而メ骨銷ス
 可シ
 虐政誅求其ノ膚ヲ敲テ而メ其ノ髓ヲ
 吸フ
 人ノ牽制ヲ受ルヲ掣肘ト曰ヒ
 羞愧ヲ知ラサルヲ厚顔ト曰フ
 好テ議論ヲ生スルヲ唇ヲ搖カシ舌ヲ
 鼓スルト曰ヒ
 身體
 五十一

故事
 少言
 五十一

フノ意ナシ相如怒髮冠
 フ冲壁ヲ完ウノ還ル
 唐ノ崔鉉僕射ニ進ミ權
 勢アリ之ニ依ル者火ニ
 近ツキ手ヲ炙テ熱スル
 ガ如キヲ言フナリ
 玄宗鏡ニ向テ樂シマス
 左右曰韓休相ト為テ陸
 下殊ニ瘦タマフト上曰
 朕瘦ト雖天下必ズ肥
 ント
 唐ノ李林甫計ヲ以テ人
 ヲ傾ク世其密ヲロニシ
 劍ヲ腹ニスト謂フ
 趙雲寡兵ヲ以テ曹操ノ
 大軍ヲ敗ル劉備稱ノ曰
 子龍一身渾テ是レ膽ナ
 リト
 唐ノ來俊臣性苛酷ナリ
 毎ニ醋ヲ以テ囚人ノ鼻

故**事**必**讀**
 共ニ哀腸ヲ話スルヲ膝ヲ促カシ心ヲ
 談スルト曰フ
 髮ヲ怒ラシ冠ヲ冲クハ蘭相如カ英氣
 勃々タルナリ
 手ヲ炙テ熱ス可キハ唐ノ崔鉉カ貴勢
 炎々タルナリ
 貌ハ瘦タリト雖天下肥ルハ玄
 宗ノ自カテ謂フナリ
 口ニ蜜アリテ而シテ腹ニ劍アルハ李
 林甫ノ人ト為リナリ

二注ギタリ
 嚴光ハ後漢ノ光武ノ故
 人ナリ帝位ニ即キ三聘
 ノ乃チ至リ共ニ卧スニ
 足ヲ以テ帝ノ腹ニ加ヘ
 タリ
 唐ノ田承嗣魏地ニ據有
 ス郭子儀使ヲ遣ル承嗣
 西望ニ拜ノ曰ク茲滕人
 ニ屈セサルコ久シ今乃
 公ノ為ニ拜スト
 晉ノ陶淵明彭澤ノ令ト
 為ル郡守督郵ヲシ縣ニ
 至ラシム吏白ス應ニ未
 帶ノ之ヲ見ベシト淵歎
 ノ曰ク吾五斗米ノ為ニ
 膝ヲ折テ郷里ノ小人ニ
 事ヘズト即チ印ヲ解テ
 去ル
 宋ノ真宗隱者楊朴ヲ見

趙子龍ハ一身都テ是レ膽ナリ
 周ノ靈王ハ初テ生テ便鬚アリ
 來俊臣ハ醋ヲ囚鼻ニ注テ法外ニ兇ヲ
 行ヒ
 嚴子陵ハ足ヲ帝腹ニ加ヘテ其尊貴ヲ忘
 スル
 久ク茲ノ膝ヲ屈セズトハ郭子儀カ尊
 ノ宰相ニ居ルナリ
 米ノ為メニ腰ヲ折ザルハ陶淵明カ吏
 晉ヲ拜セサルナリ
 身體
 五十二

故事必讀
 五十二

問フテ曰ク詩ヲ作テ君ニ送ル者アリヤ曰ク臣ガ妻詩アリテ云更休落魄耽盃酒亦莫猖狂愛作詩今日捉將官裡去這回斷送老頭皮
 貴妃浴ヲ出襦腰襖ゲテ一乳ヲ露ハス明皇捫弄ノ曰ク軟温新剝雞頭肉ト祿山傍ニ在テ荅テ曰潤滑猶似塞上酥ト貴妃笑テ曰ク信ニ是胡兒只酥ヲ知ルノミト
 手指ノ纖長ナルヲ美テ春筍ト言フ
 眼中ノ清澄ナルヲ稱ノ秋波ト言フ
 道家ニ兩肩ヲ以テ玉樓ト為双目ヲ銀海トス
 唐ノ李珣李絳ヲ見テ曰

斷送ス老頭ノ皮ハ楊璞妻ノ送詩ヲ愛スルナリ
 新剝ス雞ノ肉ハ明皇カ貴妃ノ乳ヲ愛スルナリ
 纖指ハ春筍ノ如ク
 媚眼ハ秋波ノ如シ
 肩ヲ玉樓ト曰ヒ眼ハ銀海ト名ク
 泪ヲ玉筋ト曰ヒ頂ヲ珠庭ト曰フ
 擔ヲ歇ヲ肩ヲ息ト曰ヒ
 服セサルヲ強項ト曰フ

日角殊庭痛ハノ相ニ非ズト額角ハ日ノ起ルガ如ク天庭ハ珠ノ圓ナルガ如キヲ言フ
 鄭ノ子駟曰ク請フ肩ヲ晋ニ息ハント
 後漢ノ董宣公注ノ奴ヲ殺ス帝主ニ謝セシム宣地ニ據テ敢テ拜セズ上之ヲ叱ノ曰ク強項令出
 ヨト錢三十万ヲ賜フ
 寇萊公相タリ丁謂參知政事タリ嘗テ會食ス錢公ノ鬚ヲ深ム謂起テ之ヲ拂フ公色ヲ正ウメ曰身執政ト為テ而ノ親カラ官長ノ為ニ鬚ヲ拂フカト後遂ニ隙ヲ成セリ
 北齊ノ彭樂周文ト戰ヒ勝テ刺サレ肉ヲ出ス之

丁謂人ノ與ニ鬚ヲ拂フ何ゾ其レ諂フヤ
 彭樂腸ヲ截テ戰ヒテ決ス亦勇ナラズバ
 肉ヲ剗リ瘡ヲ醫スルハ目前ノ急ヲ濟
 フヲ權ルナリ
 心ヲ傷リ足ヲ捫ルハ衆士ノ心ヲ安ン
 スルヲ計ルナリ
 漢ノ張良ハ足ヲ躡耳ニ附キ
 東方朔ハ髓ヲ洗ヒ毛ヲ伐ツ
 尹繼倫ハ契丹稱シテ黑面大王ト為シ
 傳堯俞ハ宋后稱メ金玉ノ君子ト為ス

故事必讀 身体

ヲ收ムルニ入ラズ乃チ
 截去テ復戦ヒタリ
 聶夷中カ農ヲ憫ムノ詩
 二月賣新絲五月糶新穀
 警得眼前瘡宛去心頭肉
 ト詠ゼリ
 漢王項羽ニ伏弩射ラレ
 胸ヲ傷ツク乃チ足ヲ捫
 テ曰ク虜吾指ニ中ツ止
 韓信假リニ王ト為テ齊
 ヲ鎮セシト請フ張良帝
 ノ足ヲ躡ミ耳ニ附テ勸
 メテ信ヲ封シタリ
 東方朔黃眉翁ニ遇テ曰
 吾レ食ヲ却ケ氣ヲ服ス
 三十年ニ一タヒ骨ヲ反
 シ髓ヲ洗ヒ三十年ニ一
 タヒ皮ヲ剥キ毛ヲ伐ル
 吾已ニ三洗三伐セリト
 尹繼倫大ニ契丹ノ軍ヲ

土木形骸ハ自カラ粧ヒ飾ラサルナリ
 鐵石心腸ハ性ヲ執イノ堅剛ナルナリ
 會晤ヲ叙スルニ芝眉ヲ挹スルヲ得
 ルト曰ヒ
 契濶ヲ叙ブルヲ久シク顔範ニ違フト
 曰フナリ
 女客ヲ請フニ金蓮ヲ迂ヘ奉ルト曰ヒ
 親友ヲ邀フルニ敢テ玉趾ヲ板ト曰フ
 侏儒ハ人身ノ矮キヲ謂ヒ
 魁梧ハ人貌ノ奇ナルヲ稱ス

徐河ニ破ル契丹相戒テ
 曰當ニ此ノ黒面大王ヲ
 避クベシト中書侍郎傅
 堯俞卒ス太后輔臣ニ謂
 テ曰傅侍郎清直節ヲ立
 始終変ゼズ真ニ金玉ノ
 君子方ニ倚テ相ト為シ
 トセシニ遽カニ是ニ至
 レリト
 晋 稽康風度アリ而シ
 形骸ヲ土木ニシテ自カ
 ラ藻飾セズ人以為ラク
 龍章鳳姿天質自然ナリ
 宋ノ廣平剛態毅狀人其
 鐵心石腸ヲ疑フ然レト
 毛其梅花賦ヲ觀ルニ及
 デハ清新富麗ナリ
 唐ノ元德秀字ハ紫芝房
 瑄見ル毎ニ嘆ソ曰紫芝
 ノ眉宇ヲ見レバ人ヲノ

龍章鳳姿ハ廊廟ノ彦ナリ
 麀頭鹿耳ハ草野ノ夫ナリ
 恐懼甚シキニ過ルヲ首ヲ畏ミ尾ニ畏
 ルト曰ヒ
 感佩ノ忘レサルヲ骨ニ刻ミ心ニ銘ス
 ト曰フ
 貌ノ醜キヲ颺ラスト曰ヒ
 貌ノ美ナルヲ冠玉ト曰フ
 足跛ナルヲ蹠跚ト曰ヒ
 耳聾ナルヲ重聽ト曰フ

故事必讀

身体

故事必讀

名利ノ心都テ盡シムト
顔範ハ親シク面ヲ教ラ
受ルノ義
金蓮ノ解前ニ出
侏儒ハ矮小ノ人ヲ謂フ
魁ハ大ナリ梧ハ悟ナリ
既ニ見テ驚悟スベキヲ
曰フナリ
唐ノ苗晋卿元載ヲ薦ム
李揆載ガ寒相ナルヲ輕
シメ曰龍章鳳姿ノ士ハ
用ヒラレズ麀頭鷄目子
乃チ官ヲ求ル耶ト
鄭ノ子家曰古人言アリ
曰首ヲ畏シメ尾ヲ畏シ
ム身其レ餘ラン哉ト
晋ノ叔向鄭ニ適ク酸茂
貌醜ナリ堂下ニ立ツ一
言ノ善叔向之ヲ聞テ以
為ラク必發明ナラント

期々艾々ハ口訥スルノ稱
喋々便々ハ言多ノ狀ナリ
嘉ス可キ者ハ小心翼々ナリ
鄙ベキ者ハ大言慚サルナリ
腰ノ細キヲ柳腰ト曰
身ノ小キヲ雞肋ト曰フ
人ノ齒ノ缺タルヲ笑テ狗竇大ニ開ク
ト曰ヒ
人ノ決セサルヲ譏ルニ鼠首事ヲ債ル
ト曰フ

下テ其手ヲ執リテ曰子
少ク颺ラズ子若言ハズ
シ吾幾ンド子ヲ失セ
ント周勃陳平ヲ漢王ニ
譏ノ曰平美ト雖氏冠玉
ノ如シ其中ハ未ダ必ス
有ザルナリト
蹠蹠ハ跛行ナリ黃霸類
川ノ太守ト為ル許丞聲
セリ霸曰許丞ハ廉吏重
聽何妨ト
漢ノ周昌高帝ノ太子ヲ
廢スルヲ争ヒ怒テ曰臣
期々詔ヲ奉ゼズト魏ノ
鄧艾口訥シ常ニ自カラ
艾ハ下稱セリ喋々便々
ハ利口捷給ヲ云フ翼々
ハ恭敬ノ貌
體雞肋ノ小ナルカ如ク
ニ弱キヲ言フ

口中ヲ雌黃ハ事ヲ言テ而ノ改移多キナ
リ
皮裡ノ春秋ハ心中自カラ褒貶アルナ
リ
脣亡テ齒寒キハ彼此ノ依テヲ失フ謂
フ
足上首下ハ尊卑ノ顛倒スルヲ謂フナ
リ
為ス所意ヲ得ルニ氣ヲ吐キ眉ヲ揚ク
ト曰ヒ

故事必讀

身体

張亥祖八歳ノ時齒齧ク
 或人之ニ戯テ曰君ガ口
 何ゾ狗竇ヲ開テ為ス祖
 曰君ノ輩ヲメ此ヨリ出
 入セシメント欲スルノ
 ミト
 鼠ノ性多ク疑フ穴ニ出
 入セント欲スルニ其首
 フ左右ノ進退定マラズ
 人ノ事ヲ決セザルモ亦
 此ニ類ス
 晋ノ楮衰字ハ季野桓彝
 曰季野ハ皮裡春秋アリ
 ト其外ニ臧否無ウソ内
 ニ褒貶アルヲ言フナル
 宮之奇虞公ヲ諫テ曰號
 ハ虞ノ表ナリ諺ニ所謂
 輔車相依ル唇亡テ齒寒
 トハ其虞統ノ謂ナリ
 李白韓朝宗ニ与フル書

人ヲ待スルノ誠心ナルヲ心ヲ推腹ニ
 置曰フ意マ異ハニ原マ如キ言マ異
 心慌ルニ靈臺亂ルト曰ヒ
 醉倒スルヲ玉山頽ト曰フハマ酔マ
 睡ルヲ黒甜ト曰ヒ
 卧スヲ息偃ト曰フ此ハホトマ夫マ酔
 口尚ホ乳臭キハ世人年少ウノ無知ナ
 ルヲ謂ヒ
 三夕ヒ其肱ヲ折ルハ醫師老成ノ諳練ナ
 ルヲ謂フ黃ハ事マ言マ而ハ也絲マ十

ニ曰何ゾ階前盈尺ノ地
 フ惜テ白ヲソ眉ヲ揚氣
 フ吐キ青雲ニ激昂セシ
 ヲサル耶ト 史記ニ蕭
 王赤心ヲ推テ入ノ腹中
 ニ置クトアリ
 晋ノ山濤叔夜ノ人ト為
 リヲ謂テ孤松ノ獨立ス
 ルガ若ク其醉ルヤ玉山
 ノ將ニ頽レントスルガ
 如シト言ヘリ
 東坡ノ詩ニ三杯飲飽後
 一枕黒甜餘ノ句アリ
 漢王酈食其ニ魏ノ大將
 ハ誰ナルヲ問フ曰柏直
 ナリト漢王曰是レ口尚
 ホ乳臭安シ能ク吾韓
 信ニ當ランヤト
 人三夕ヒ其臂ヲ折テ病
 痛ヲ歷ル多キ者然ル後

西子心ヲ捧テ愈々妍ヲ増ヲ見
 醜婦顰ニ效ヒ巧ヲ弄メ反拙シ置ハ
 慧眼始メテ道骨ヲ知ルハ肉眼ノ賢人
 ヲ知ラサルナリ
 婢膝奴顔ハ諂容厭可ク肩ヲ脇カノ諂
 笑ハ媚態堪難シ
 忠臣肝ヲ披クハ君ノ藥為リ
 婦人ノ長舌ナル厲ノ階タリ
 事心ヲ遂ルヲ願ヒノ如シト曰ヒ
 事ノ愧ツ可キヲ顔ニ汗スト曰フ

故事必讀
 身體
 五十六

治療ノ法ヲ知テ良醫ト
成ルナリ
西施ノ解女子部ニ出
鄭ノ光業狀元及弟久シ
キアリ謝メ曰當時貴人
ヲ識ズ凡夫ノ肉眼今日
俄ニ後進ト為ルト
長古ハ多言ナリ婦人ノ
多言ナルハ禍ヒヲ名ク
ノ楷榑ナリ
人心中ニ愧ルアレバ
則チ汗面上ニ發ス
寒山ガ豊干鏡舌ナリト
言ヒタルハ俗ニオシヤ
ベリト云カ如シ
蓮子ニ担梨橘袖皆口ニ
可ナリハ俗ニ隨分食ハ
ルモノト云カ如シ
文王人ヲ沼ヲ為ラン
ムルニ枯骸ヲ得更ニ之

人ノ多言ナルヲ饒舌ト曰ヒ
物ノ食ニ堪ルヲ口ニ可ト曰ヒ
澤枯骨ニ及フハ西伯ノ深仁ナリ
灼艾痛ノ分ツハ宋祖ノ友愛ナリ
唐ノ太宗ハ臣ノ為ニ病ヲ療ノ自カラ
其鬚ヲ剪リ
顔果卿ハ賊ヲ罵テ輟マス賊其ノ舌ヲ
斷チタリ
横逆ニ較セサルヲ之ヲ度外ニ置クト
曰ヒ

ヲ華ムラシム天下其仁
ニ帰シタリ灼艾ノ解兄
弟部ニ出
唐ノ李勣病ス醫ノ曰龍
鬚灰治スベシト太宗乃
チ自カラ其鬚ヲ剪リ藥
ニ和メ之ヲ治スルニ即
愈クリ顔果卿賊ヲ罵テ
輟ス賊其舌ヲ斷ツ
光武隗囂未ダ平ラカサ
ルヲ苦ミ諸將ニ謂テ曰
且ツ當ニ此ノ兩子ヲ度
外ニ置クベシト
馬良字季常眉ニ白毫ア
リ兄弟五人並ニ才名ア
リ諺ニ曰馬氏五常白眉
最モ良ト以阮籍散ク青
白眼ヲ作ス已ガ悦フ者
來レハ則青眼ヲ以テ之
ヲ待セリ

洞カニ虜情ヲ悉スヲ已ニ掌中ニ入ルト
曰フ
馬良白眉アリテ獨リ衆ニ出デ
阮籍青眼ヲ作テ厚ク人ヲ待ス
漢高牙ヲ咬テ雍齒ヲ封スルハ衆將ノ
心ヲ安スルヲ計リ
高祖泪ヲ含ンテ丁公ヲ斬ルハ法叛臣
ノ罪ヲ正スナリ
果ヲ擲テ車ニ盈ツハ潘安仁カ美姿愛
スベク

故事必讀
身體
五十七

漢初諸將自カラ危フミ
 反ヲ謀ル者多シ帝之ヲ
 良ニ圖ル良曰上ノ平生
 憎ム所誰カ最モ甚シキ
 曰雍齒我ト奮怨アリト
 良曰急ニ先ツ之ヲ封セ
 バ人々自カラ安ンゼン
 ト是ニ於テ其言ノ如ク
 ス果テ群臣皆喜テ曰ク
 雍齒スラ且侯ト為ル我
 屬患ヒナシト丁公初ノ
 羽力將タリ高帝ヲ逐ヒ
 迫リ而ノ緩ウシ還ル後
 帝ニ謁ス帝曰丁公羽ニ
 天下ヲ失ハシム後世ノ
 人臣ヲノ丁公ニ效フ
 無カラシメント遂ニ之
 ヲ斬リタリ
 晋ノ潘岳^{ガク}姿美ナリ洛
 陽ニ出レバ途上ノ婦人

石ヲ投ノ載ニ滿ル張孟陽カ醜態憎ム
 堪タリ
 事ノ怪ム可キハ婦人ノ鬢ヲ生スルナリ
 人ノ聞ヲ駭所ハ男子ノ子ヲ誕スルナリ
 物ヲ求メテ用テ濟フヲ燃眉ノ急ト謂ヒ
 事ノ成無キヲ悔ユルヲ噬臍何ソ及ト曰フ
 情ノ相關カラザルヲ秦越人ノ肥瘠ヲ
 視ルカ如シト云ヒ
 事當サニ本ヲ探ルヘシ醫ヲ善スル者ノ
 如キ祇ニ精ヲ論ス

皆喜テ佳果ヲ擲ツニヨリ果車
 ニ盈テ歸レリ張載ハ容兒甚
 ダ醜シ出ル毎ニ小兒瓦石ヲ投
 スルニヨリ委頓ノ婦レリ
 宋ノ酒保ノ婦朱氏年四十二
 ノ忽チ鬚ヲ生セリ宋ノ時城
 都ニ青果ヲ賣ル夫アリレカ
 懷孕ノ子ヲ生タリ
 楚ノ文王申ヲ伐テ鄧ヲ過
 ル鄧公之ヲ饗ス公ノ三嬖皆
 楚子ヲ殺サント請フ許サズ
 三子曰鄧ヲニス者ハ此人ナ
 ラン若早ク圖ラシハ後君勝
 望ント越人秦人ノ肥瘠ヲ見
 ル其心ニ喜戚ヲ加ヘス
 尸位ハ死尸ノ位ニ在ルカ如ク
 其位ニ居テ其事ヲ為ス能
 ハサルナリ素餐ハ其職ヲ務
 ノズノ空シク俸祿ヲ食スル
 者ヲ謂フ

功無ノ祿ヲ食之ヲ尸位素餐ト謂ヒ
 譎劣能無キ之レヲ行尸走肉ト謂フ
 老テハ當ニ益壯ナルベシ寧白首ノ心
 ヲ知ラン
 窮シテハ且ツ益堅キハ青雲ノ志シヲ
 墜サズ
 一息尚ホ存ス此志少モ懈ルベカラズ
 十手ノ指ス所此心安ゾ自欺ベケンヤ
 譎ハ淺ナリ劣ハ愚ナリ行尸ハ死尸ニ能ク行カ如キヲ謂ヒ走肉
 ハ死肉ニ能ク走ルカ如キヲ言フ
 後漢ノ馬援ハ少ノ大志アリ嘗テ曰大夫夫ノ志ヲ為ス窮ノハ當ニ
 益堅カルベク老テハ當ニ益壯ナルヘシ

故事必讀
 身體官室
 五十八

故事必讀

凡ノ入タル者息ノ有ニ限リハ彝倫ノ志須臾モ懈タルベカラズ
衆人ノ見ル所理非分明ナレバ陰惡ヲ作シテ天然ノ良心ニ背クベカラストシ

宮室

釋名云宮ハ宮也屋垣上ニ見エテ宮隆然タルナリ
室ハ實ナリ人物其中ニ實満スルナリトアリ

上古ハ宮室ナシ冬ハ則穴窟ニ居リ夏ハ則糞巢ニ居リ未ダ
火化アラズ草木ノ實鳥獸ノ肉ヲ食ス未ダ絲麻アラズ
其羽毛ヲ衣タリ
詩ニ室下ノ固キヲ竹ノ苞ノ如ク上ノ密ナルヲ松ノ茂レルガ如ク其横宇ノ峻起スルニ
鳥ノ驚テ革ルガ如ク其簷阿ノ華彩軒リ翔ルハ飛翬ノ翼ノ如シトアリ
紫宸殿ハ前漢ノ前殿周ノ路寢ナリ青瑣ハ青ヲ以テ戸邊ヲ塗リ其中ヲ鏤ムハ天子

洪荒ノ世ニハ野處シテ穴居ス有巢ヨ
リ以後棟ヲ上ニシ宇ヲ下ニス
竹苞松茂ハ制度ノ宜ヲ得ヲ謂ヒ鳥革
翬飛ハ創造ノ善ヲ盡スヲ謂フ
朝廷ヲ紫宸ト曰ヒ
禁門ヲ青瑣ト曰フ
宰相ノ職ハ絲綸ヲ掌テ黃閣ニ内居シ

ノ制ナリ
礼ニ王言絲ノ如シ其出ル綸ノ如シトアリ一タビ出レハ反ラザルヲ謂フナリ丞相
事ノ門ヲ黃閣ト曰フ尚書郎事ヲ明光殿ニ奉胡粉ヲ以テ壁ヲ塗リ古賢烈士ヲ画キ丹朱ヲ以テ地ニ漆ル之ヲ丹墀ト曰フ
秘書閣下ハ穹窿タル高殿之ヲ木天ト謂フ唐開元ニ中書ヲ改紫微省ト曰フ
金馬玉堂ノ解文臣ノ部ニ出漢ノ朱博御史大夫ト為リ府中ニ柏樹ヲ列植ス常ニ野鳥數千其上ニ棲ム因テ鳥臺ノ名アリ
藩垣ナリ泉ハ法ナリ
花縣ノ解文臣部ニ出處子賤ハ單父ヲ治ムルニ琴

百官ハ章疏ヲ具陳シテ丹墀ニ敷奏ス
木天署ハ學士ノ居ル所口
紫微省ハ中書ノ蒞所ナリ
金馬玉堂ハ翰林ノ院宇同去ナリ
柏臺鳥府ハ御史ノ衙門高華ナルヲ稱シ
布政司ハ稱ノ藩府ト為シ
按察司ハ是レ臬司ニ係ル
潘岳桃ヲ滿縣ニ植ウ故ニ花縣ト稱シ
子賤琴ヲ鳴シ以邑ヲ治故ニ琴堂ト曰
潭府ハ是仕官ノ家ナリ

ヲ彈ノ自カラ堂ヲ下ラス而
 ノ善ク治ル因テ琴臺ト号ス
 潭ハ是水ノ深キ者其官
 府ノ深キヲ以テ潭府ト曰
 衡ハ横木ナリ貧者門上ニ横
 木ヲ用ルノミ
 藹ハ集ルナリ瑞ハ祥氣ナリ
 門庭吉祥ノ多キヲ言フ
 蓬華共ニ草ノ名寒士ノ居
 流蕪タル處ニ人ノ訪来ルニ因
 テ光リヲ生ストナリ
 輪ハ輪困高ナルナリ與ハ
 負爛衆多ナルナリ以テ其廣
 潤ヲ美ルナリ
 肯構々々ノ解父子部ニ出
 楚子章華之宮ヲ成シ諸侯
 ト之ヲ落ス宮室始テ成テ之
 フ祭ルヲ落スト曰フ
 宋ノ李洸第ヲ治ス僅カニ
 馬ヲ旋ラスベシ或人其太タ

衡門ハ乃隱逸ノ宅タリ
 人ノ喜アルヲ賀スルニ門闌瑞ヲ藹ス
 ト曰ヒ
 人ノ過訪ヲ謝スルニ蓬華輝ヲ生ス
 ト曰フ
 美負美輪ハ禮ニ屋宇ノ高華ナルヲ稱シ
 肯構肯堂ハ書ニ父子ノ同志ナルヲ言フ
 土木方ニ興ヲ經始ト曰ヒ
 創造已ニ畢ヲ落成ト曰フ
 樓ノ高キハ以テ星ヲ摘ム可シト云ヒ

隘キヲ謂フ沆曰宰相タラシニ
 公廳誠ニ隘シ太祝タラシニ
 フ奉スル廳則チ寬シト
 淮南子ニ大廈成テ燕雀相ヒ
 賀スト云ハ巢ヲ營ナム有ル
 フ喜ブ義ナリ
 蝸牛ノ僅カニ身ヲ容レ
 負フニ比シ言フナリ
 閭閻共ニ里中ノ總門ナリ
 其等ヲ明カニスルヲ闕ト曰
 ヒ其功ヲ表スルヲ闕ト曰フ
 朱門ハ丹朱ヲ以テ門ヲ漆ル
 ナリ 白屋ハ白茅ヲ以テ
 屋ヲ覆フ故ニ名ク
 行客ハ百事意ニ順ナラザル
 者ユエ逆旅ト謂フナリ
 郷ハ行書ノ舍今ノ驛ノ如シ
 芸香草ハ蠹魚ヲ避ル者故ニ
 書齋ノ名トス
 周之正月朔日太宰王政之

屋ノ小ハ僅ニ膝ヲ容ニ堪タリト云フ
 寇萊公ハ庭除ノ外只花ヲ栽ウ可シト
 云ヒ
 李文靖ハ廳事ノ前僅ニ馬ヲ旋ス容シ
 ト云リ
 躬カラ屋ノ成ヲ賀スルニ燕賀ト曰ヒ
 自カラ屋ノ小ヲ謙スルニ蝸居ト曰フ
 民家ヲ名ケテ閭閻ト曰ヒ
 貴族ヲ稱シテ闕闕ト為ス
 朱門ハ乃チ富豪ノ第ナリ

故事必讀
 宮室

事ヲ天下ニ布キ又書シテ之ヲ
 象魏ニ懸ク象ハ魏闕ナリ
 唐元トノ國子學ヲ廢改シテ
 垂拱中ニ改テ成均ト爲
 辟雍ハ天子ノ學大射行禮
 處ナリ
 魯ノ哀公曰人善ク忘ルル者ア
 リ宅ヲ徙ノ其妻ヲ遺ルト孔
 子曰尤モ甚シキ者アリ桀紂
 ハ色ヲ愛メ其身ヲ忘レタリ上
 孫策薨ス推哭ノ息マズ張昭
 ガ曰今兇奸競ヒ逐フ而之乃
 ナ礼制ヲ顧ルハ猶門ヲ開イ
 テ盜ヲ揖スルカゴトシト
 宋ノ時京師ニ何樓アリ其下
 ニ賈ル所ノ物虚偽多シ故以
 テ名アリ
 龍斷ハ高キ處其レニ登リテ
 左右ヲ望シ獨リ市利ヲ占
 シトスルナリ

白屋ハ是レ布衣ノ家ナリ
 客舎ヲ逆旅ト曰ヒ
 驛館ヲ郵亭ト曰フ
 書室ヲ芸窓ト曰ヒ
 朝廷ヲ魏闕ト曰フ
 成均辟雍ハ皆ナ國學ノ號ナリ
 黌宮膠序ハ乃チ郷學ノ稱ナリ
 人ノ善ク忘ルル、ヲ笑フニ宅ヲ徙ノ妻ヲ
 忘ルハト曰ヒ
 人ノ謹マサルヲ譏ルニ門ヲ開イテ盜

華門ハ荆竹ヲ以テ門ヲ織ル
 ナリ圭竇ハ牆ニ穿テ之ヲ爲
 ル門傍ノ小戸ナリ上銳ニ下
 方ニノ注ノ形ナリ甕牖ハ甕
 ヲ以テ牖ヲ爲ルナリ繩樞ハ
 繩ヲ以テ樞ト爲ルナリ
 宋ノ寇準大名府ヲ鎮ス北使
 曰相公ハ望重レ何ゾ中書ニ
 在ラザル公曰北門ノ鎖鑰準
 ニ非レバ不可ナルハミ
 劉宋ノ檀道濟大功アリ後將
 ニ濟ヲ誅セントス曰乃チ汝
 万里長城ヲ壞ルカト

ヲ揖スト曰フ
 何樓ノ市ル所ハ皆ナ濫惡ノ物ナリ
 龍斷獨登ハ利ヲ專ニスル人ヲ譏ナリ
 華門圭竇ハ貧士ノ居ニ係リ
 甕牖繩樞ハ皆窘人ノ室ナリ
 宋ノ寇準ハ眞ニ是レ北門ノ鎖鑰
 檀道濟ハ万里ノ長城ニ愧ヂズ

器用
 一人ノ需ムル所口其ノ異ニ入
 百工斯レ備フヲ爲ス

故事必讀
 宮室 器用
 六十一

毛穎ハ中山ノ人蒙恬載以
 婦ル始皇之ヲ管城ニ封シ管
 城子ト号ス累リニ中書令ニ
 拜ス今呼テ中書君トス
 南越ノ人姓ハ石名ハ虛中即
 墨侯ニ拜ス薛稷硯ヲ為リ石
 郷侯ニ封セラレ
 玄宗ノ案上ノ墨ヲ龍香劑ト
 曰フ一日墨上ニ小道士アリ
 テ行ク上之ヲ叱スレバ萬歳
 ヲ呼ビ奏メ曰ク臣ハ墨ノ精
 墨松使者ナリト
 毛穎傳ニ毛穎會稽ノ楮先生
 ト友トシ善シ毛穎ハ筆ナリ
 楮先生ハ紙ナリ
 學友ヲ稱シ同窓又同硯也曰
 衣鉢ノ解前ノ師生ノ部ニ出
 五代糸維翰鉄硯ヲ鑄人ニ示
 レテ曰硯弊レハ則チ業ヲ改

但用フルキハ則チ各其用ニ適フ
 而ノ名キハ則毎ニ其名ヲ異ニス
 管城子、中書君ハ悉ク筆ノ號ナリ
 石虛中、即墨侯ハ皆是硯ノ稱ナリ
 墨ヲ松使者ト稱シ又陳玄ト曰ヒ龍劑
 ト曰フ
 紙ヲ楮先生ト號シ又剡藤ト曰ヒ玉版
 ト曰フ
 筆硯ヲ共ニスルハ窓ヲ同スルノ謂ナリ
 衣鉢ヲ傳フルハ道ヲ傳フルノ稱ナリ

ト卒ニ進士及第ニ擧ラレ
 弘肇大志略アリ嘗テ人ニ謂
 テ曰朝廷ヲ安シシ禍乱ヲ定
 ムル直チニ須カラク大劍長
 槍ヲ用フベシ安シゾ毛錐子
 フ用ルヲ為シヤト
 吳ノ千將其妻莫耶ト劍ヲ鑄
 ルニ金鐵未ダ鑄マ夫婦乃髮
 ヲ断爪ヲ剪テ爐中ニ投ジ乃
 燭ノ二劍ヲ成ス因テ千將莫
 耶ト名ツク一干將ハ陽劍莫
 耶ハ陰劍ナリ
 晉ノ表山松東陽郡ノ守ト為
 ル謝安一扇ヲ取リ以テ行ヲ
 送ル山松答テ曰輒チ當ニ仁
 風ヲ奉揚ノ彼ノ黎庶ヲ慰ス
 ベシト扇以テ面ヲ掩フニ便
 ナリ故ニ便面ト言フ
 形如蟬ノ如レ因テ此名アリ
 艦幢ハ皆戰船ナリ

志ヲ篤メ儒ヲ業トスルハ鐵硯ヲ磨穿
 スルト曰ヒ
 文ヲ棄テ武ニ就クヲ安シゾ毛錐ヲ用
 ヒント曰フ
 劍ニ千將鎔鄒ノ名アリ
 扇ニ仁風便面ノ號アリ
 小舟ヲ舩艦ト名ケ
 巨艦ヲ艦幢ト曰フ
 金根ハ是皇后ノ車
 菱花ハ是婦人ノ鏡

故事必讀 器用

太皇太后ハ六御ニ駕ス金根車ハ玉輅ニ法トル
 鏡ヲ菱花形ニ作ルコハ漢以上ヨリ之アリ
 銀鑿落ハ銀屑ヲ以テ飾リタル盛ナリ
 笙簫ヲ作ル形參差以テ鳳翼ニ象ル
 楚人舟行ノ劔ヲ水中ニ墮ス遠ニ舟ニ刺ソ之ヲ求テ曰吾劔此ヨリ墮ット楊子ニ或曰往聖人ノ法ヲ以テ將來ヲ治スルハ猶柱ニ膠ノ瑟ヲ鼓スルガゴトシ
 斗ハ量ノ名木ヲ以テ之ヲ為ル十升ヲ容ル筭ハ竹器以テ十二升ヲ容ルベシ
 棟梁ハ大材ニ非レハ其用ニ中ラズ
 養老杖ノ端ニ鳩形ヲ刺ムハ

銀鑿落ハ原是酒器
 玉參差ハ乃是簫名
 舟ニ刻メ劔ヲ求ムルハ固ニメ而ノ通ゼサルナリ
 柱ニ膠ノ瑟ヲ鼓スルハ執シテ而ノ化セサルナリ
 斗筭ハ其器ノ小ナルヲ言ヒ
 棟梁ハ是レ大材ヲ謂フナリ
 鉛刀ハ一割ノ利無ク
 強弓ニ百石ノ名有リ

鳩ハ食ニ噎ハサル鳥ナルニ因リ老人ノ食ニ噎ハサルヲ希フテ之ヲ為ルナリ
 司馬相如ニ綠綺琴アリ吳人桐ヲ燒テ以テ變ク者アリ蔡邕其爆スルヲ聞テ曰此レ良材ナリト之ヲ請ヒ削リ以テ琴ヲ為ルニ其尾焦タリ因テ焦桐ト名ツク
 昔黃帝天ニ昇リ弓ヲ墮ス群臣弓ヲ抱テ號泣ス故ニ其弓ヲ名ケテ烏號ト曰テ繁弱鉅黍ハ古ノ良弓ナリ
 唐ノ申王檀水ヲ以テ童子ノ燭ヲ執ル象ヲ刺ム之ヲ燭奴ト謂フ
 鷓鴣ハ水鳥江東ノ人其像ヲ船尾ニ画ク故ニ云吳ノ諸葛恪鴨頭船ヲ為ル
 王度ノ古鏡記ニ之ヲ稱ソ壽

杖ハ鳩ヲ以テ名ク鳩ハ喉ノ噎バザルニ因ル
 鉛ハ魚様ニ同ウス魚目ノ常ニ醒ニ取ナリ
 兕觥ハ是レ頭盃ニ係リ
 巨羅ハ乃チ酒器ト為ス
 短劔ハ匕首ト名ケ
 檀水ヲ艶能ト白ク
 琴ヲ綠綺焦桐ト名ケ
 弓ヲ烏號繁弱ト號ス

故事心譜

光先生トス江寧縣ノ寺ニ晉
時ノ長明燈アリ色青ニ変ノ
熱セズ隨陳ヲ平ラゲテ猶滅
セザリト云

莊子云後口重ク前輕ク水ヲ
挈ルコト抽クガ若シ其名枯槁
ト曰フ
襪襪ハ細絹ヲ以テ之ヲ為リ
加フルニ油ヲ以テス
楚王驚弱ヲ張リ忘歸ノ矢
ヲ載テ蛟兕ヲ雲夢ニ射タ
リ
刀斗ハ銅ヲ以テ斗ヲ作り畫
ハ炊キ夜ルハ撃ツ令ノ鑼鍋
是ナリ
劉褒雪裏ノ圖ヲ画ケバ觀ル
者皆ナ熱シ北風ノ圖ヲ画ケ

觀ルモノ皆ナ涼シ
後漢ノ劉琨祖逖ト友タリ後
逖ガ用ヒラル、ヲ聞人ニ与
フル書ニ曰吾戈ヲ枕ニ且
ヲ待チ逆虜ヲ梟セント志シ
嘗テ恐ル祖生ガ吾ニ先タチ
テ鞭ヲ着ントヲ
湯王野ニ行キ獵人ノ網ヲ四
面ニ張ラ見ル祝ノ曰天ヨリ
降り地ヨリ出四方ヨリ来ル
者皆チ吾網ニ罹レト王曰之
ヲ盡サシカナト乃其三面ヲ
去リ改メ祝ノ曰左リセント
欲セバ左リセヨ右セント欲
セハ右セヨ命ヲ用ヒガル者
ハ吾網中ニ入レト恩禽獸ニ
及ブ民之ニ歸セリ
韓信趙ヲ攻テ伴リ走ル趙軍
壁ヲ空ウメ之ヲ逐フ信ノ別
軍壁ニ入り盡ク趙ノ白幟ヲ

故事必讀

香爐ハ寶鴨ト名ケ

燭臺ハ燭奴ト名ク

龍涎雞舌悉ク是香ノ名ナリ

鷓首鴨頭ハ別ニ船ノ號ト為

壽光客ハ是レ妝臺無塵ノ鏡ナリ

長明公ハ是レ梵堂不滅ノ燈ナリ

桔槔ハ是レ田家ノ水車

襪襪ハ乃チ農夫ノ雨具

烏金ハ炭ノ美譽ナリ

忘歸ハ矢ノ別名ナリ

夜ハ撃ツヘク朝ハ炊可キハ軍中ノ刀斗

雲漢熱シ北風寒キハ劉褒カ畫圖ナリ

人ノ發憤ヲ勉ニ猛ク祖鞭ヲ著ト曰ヒ

人ノ宥罪ヲ求ニ幸ニ湯網ヲ開ト曰フ

幟ヲ拔キ幟ヲ立ルハ韓信ノ計甚タ奇

ナリ

楚ノ弓楚ニ得ルハ楚王ノ見所未大ナ

ラス

董安子ハ性緩シ常ニ絃ヲ佩テ以テ自

ラ急ニス

故事必讀

卷用

六十四

拔キ去リ漢ノ赤幟ヲ樹テ夾
 三撃テ大ニ趙軍ヲ破テ成安
 君ヲ斬タリ
 楚王出遊ノ爲號ノ弓ヲ失フ
 左右之ヲ求メント請フ王曰
 止ヨ楚人弓ヲ失ヒ楚人之ヲ
 得ル又何ヲ求メント孔子之ヲ
 聞テ曰ク惜イカナ其大ナラザ
 ル人弓ヲ遺ヒ人之ヲ得ント曰
 フキノ三何ゾ楚ヲ必トセト
 弦ハ張ナリ物ノ急ナル者安
 于之ヲ佩テ警スル所アルナ
 リ韋ハ熟皮ナリ物ノ柔ナル
 者約之ヲ佩テ其柔ニ類セン
 ト欲スルナリ
 漢ノ孟敏轆ヲ負ヒ地ニ墮レ
 顧ミズ去ル林宗故ヲ問フ
 答テ曰輓已ニ破ル之ヲ顧ル
 モ何ノ益アラント林宗之ヲ
 奇トス宋ノ太祖髀ヲ抚シ嘆ノ

西門豹ハ性急ナリ常ニ韋ヲ佩テ以テ
 自カラ寛ス
 漢ノ孟敏力嘗テ輓ヲ墮シテ顧ミザル
 ハ其益無キヲ知レハナリ
 宋ノ太祖ノ法ヲ犯ハ劍アリト謂ハ正
 ニ威ヲ立ント欲スルナリ
 王衍ハ清談ノ常ニ塵拂ヲ持チ
 横渠ハ易ヲ講ノ毎ニ臯比ヲ擁ス
 尾生カ橋ヲ抱テ而シテ死ルハ固執ヲ通
 ゼザルナリ

曰二十年河ヲ夾テ戦争シ天
 下ヲ取り得ルニ軍法約束ヲ
 用ル能ハズ誠ニ兒戯ニ同シ
 朕今士卒ヲ撫養ス固ヨリ爵
 賞ヲ各マバ苟シ吾ガ法ヲ犯
 サバ惟劍有ノミト
 晉ノ王衍妙ニ玄言ヲ善シ惟
 老莊ヲ談ス毎ニ玉柄ノ塵拂
 ヲ持チ清談ノ日ヲ終フ一塵
 ハ大鹿ナリ衆鹿皆塵尾ニ從
 テ行ク故ニ人ヲ教道スル者
 之ヲ執ナリ
 宋ノ張橫渠講席ゴトニ臯比
 ニ坐セリ臯比ハ虎皮ナリ
 尾生密ニ女子ト藍橋ニ會セ
 ント約ス適洪水ノ至ルニ生
 猶ホ去ラズ橋毀レテ溺死セ
 山楚ノ昭王ノ夫人ハ齊ノ女
 ナリ王出テ夫人ヲ漸臺ニ留
 ノ約ノ日召ス必ス符ヲ以テ

楚ノ妃ノ符ヲ守テ而シテ亡ルハ貞信
 録スベシ
 温嶠昔犀ヲ燃テ水族ノ鬼怪ヲ照見シ
 秦政方鏡アリテ世人ノ邪心ヲ照見ル
 車載斗量ノ人ハ勝ゲテ數フ可カラス
 南金東箭ノ品ハ實ニ是奇トスルニ堪
 檄ヲ傳ヘテ定ム可キハ極テ敵ノ破リ
 易キヲ言ヒ
 刃ヲ迎ヘテ而シテ解ハ甚夕事ノ為シ
 易キヲ言フ

故事必讀

器用花木

六十五

セント江水大ニ至ル王使ヲ
馳テ之ヲ迎フルニ符ヲ持ツ
ヲ忘ル夫人敢テ從ハズ使者
還リ符ヲ取リ未ダ至ラザル
ニ基已ニ崩レ夫人溺死セリ
晉ノ温嶠牛渚ヲ過グ傳ヘ言
フ水中ニ怪多シト乃チ犀角
ヲ燃シ之ヲ照セバ水族ノ奇
怪ヲ見ル夜ニ至リ人ヲ夢ム
曰ク爾ト幽明道ヲ異ニス何
ヲ相迫ルコト乃チ爾ルト

卉ハ草木ノ總名ナリ

古事記

銅ヲ以テ鑑ト為シテ夜冠ヲ整フベク
古ヲ以テ鑑ト為シテ興替ヲ知ルベシ

秦皇方鏡アリ人ノ心膽ヲ照シ見ル凡ソ邪心アル者之ヲ照セバ
即チ膽張心動ケリ
吳ノ趙咨魏ニ使ス王ノ曰ク吳ニ大夫ノ如キ者幾バカアル對テ曰ク
聰明特達ノ者七八人臣輩ノ如キハ車載半量勝數フベカラス
荊陽ノ金會稽ノ箭ハ乃チ東南ノ寶ナリ
韓信漢王ニ説テ曰ク項羽ハ匹夫ノ勇婦人ノ仁ノミ大王ハ能ク其友
ス三秦櫛ヲ傳ヘテ定ムベキノミ止杜預曰ク王者ノ兵ハ勢ヒ破竹ノ
如シ數節ノ後刃ヲ迎ヘテ解ン
唐ノ太宗ノ曰ク銅ヲ以テ鑑ト為衣冠ヲ正スベシ古ヲ以テ鑑トシ
興廢ヲ知ルベシ人ヲ以テ鑑トシ得失ヲ知ルヘシ云々ト

花木 草木ノ葩ヲ
花ト曰フ

植物一ニ非ス故ニ萬卉ノ稱アリ
穀種甚ダ多シ故ニ百穀ノ號アリ

茨ハ屋蓋ナリ梁ハ車梁ナリ

天ハ少好ナリ喬ハ高キナリ

周濂溪先生極テ蓮ヲ愛ス蓮
ハ君子ノ清潔ナルガ如シ
唐ノ賈耽ノ百花譜ニ海棠ヲ
以テ花中ノ神仙ト為ス

豐袁之梅ヲ評ノ曰氷肌玉骨
物外佳人云々
孔子蘭ヲ見テ嘆ノ曰夫蘭ハ
當ニ王者ノ香タルベキニ衆
草ト伍セリト

菊ハ春芳ヲ競ハズ群卉ニ後
レテ開ク者故ニ隱逸ノ士ヲ
以テ之ニ比ス
詩ニ萋竹倚々斐々君子アリト
秦皇泰山ニ上テ風雨ヲ松下ニ
避ク因テ之ヲ封ノ五大夫ト為

茨ノ如ク梁ノ如キハ禾稼ノ蕃ヲ謂ヒ

惟レ天惟レ喬ハ草木ノ茂レルヲ謂フ

蓮ハ乃花中ノ君子

海棠ハ花内ノ神仙

國色天香ハ乃チ牡丹ノ富貴ナリ

氷肌玉骨ハ乃チ梅萼ノ清奇ナリ

蘭ヲ王者ノ香ト為シ

菊ハ隱逸ノ士ニ同シ

竹ハ君子ト稱シ

松ハ大夫ト號ス

故事必讀

萱草ハ憂ヲ忘レ可ク

屈軼ハ能ク佞ヲ指ス

篔簹ハ竹ノ別號

木樨ハ桂ノ一名

明日ノ黄花ハ時ヲ過ル物ナリ

歲寒ハ松柏ハ節アルノ稱ナリ

樗櫟ハ乃チ無用ノ散材

榿楠ハ大任ニ勝ル良木

玉版ハ笋ノ異號

蹲菴ハ芋ノ別名

萱草又忘草云婦人孕ルアリテ其花ヲ佩レハ則チ男ヲ生ス故ニ宜男草云ナリ
黃帝ノ時屈軼庭ニ生ス凡ソ佞人アレハ則チ之ヲ指セリ
篔簹ハ大竹一節相去ル五六尺
桂ハ岩谷ノ間ニ叢生ス故ニ岩桂ト名ク
邦俗ノ十日ノ菊ト云フニ意自カラ相似タリ
松柏ノ二木能寒ニ耐歲寒ニ値フト雖トモ色變セズ難ニ臨テ節ヲ變セザル者之ニ似
莊子云樗ハ其大本擁腫シテ繩墨ニ中ラズ其小枝ハ卷曲シテ規矩ニ中ラス
東坡劉器之ト廡景寺ニ至ル筍ヲ燒テ之ヲ饗ス器之味勝

レタルヲ覺エ何ノ名ヲ問フ
坡曰此玉版ナリト

昔人芋ヲ遺ル者アリ主人芋字ヲ誤リ認テ芋字トシ其謝帖ニ曰蹲菴ヲ惠マルト云ハ

君子未然ヲ防ギ嫌疑ノ間ニ處セズ瓜田ニ履ヲ納レズ李下ニ冠ヲ整ヘスト謂フ

蕓荑堯塔ニ生ス毎月十五日以前ハ日ニ一葉ヲ生シ十五日以後ハ日ニ一葉ヲ落ス堯帝之ニ因テ旬朔ヲ占セリ

必芻ハ草ノ名体性柔軟ニノ馨香遠ク聞エ日光ニ背カズ以テ出家ニ喻フ

芒刺ハ草刺ナリ漢ノ霍光大將軍ト為リ威權甚レ宣帝心甚ク之ヲ忌ム帝高帝廟ニ謁

瓜田李下ハ事嫌疑ヲ避ナリ

秋菊春桃ハ時來ノ遲早ナリ

南枝ハ先シ北枝ハ後ルハ庾嶺ノ梅

朔ニメ生シ望ニメ落ルハ堯階ノ蕓荑

苾芻陰ニ背テ陽ニ向フハ僧人ノ徳

木樨ハ朝ニ開テ暮ニ落榮華ノ長カラ

玉版ハ笋ノ異號

蹲菴ハ芋ノ別名

榿楠ハ大任ニ勝ル良木

樗櫟ハ乃チ無用ノ散材

明日ノ黄花ハ時ヲ過ル物ナリ

歲寒ハ松柏ハ節アルノ稱ナリ

菅簾ハ竹ノ別號

屈軼ハ能ク佞ヲ指ス

萱草ハ憂ヲ忘レ可ク

スル日光驂乘ス帝芒刺ノ背ニ在ルガ若ニテ之カ為ニ安カラス
 薰ハ香草賢人君子ニ比ス猶ハ臭草不善小人ニ喩フ
 蹊ハ初テ開ク徑路ナリ
 晉ノ王戎七歳諸兒ト道邊ニ遊テ李樹ノ子ヲ結ブアリ諸兒並ニ取ルニ戎動カズ人ノヲ問フ戎答テ曰道傍ニ在テ子多ハ必ス苦李ナラント果然リ
 穉ハ根ナリ下ニ榮ユル者易ニ初九茅ヲ拔ク茹ニ其稟ヲ以テス征ニ古ナリトアリ
 南宋ノ顧愷之文帝ト同年而ノ愷之容顔先ッ老ユ帝之ヲ問フ愷之曰松柏之姿霜ヲ經テ猶ホ茂リ蒲柳之姿秋ニ望テ先ッ零ツト

芒刺ノ背ニ在ルハ恐懼シテ安カラサルヲ言ヒ
 薰菹器ヲ異ニスルハ猶賢否ノ別アルカゴトシ
 桃李言ハスノ下自カラ蹊ヲ成シ
 道傍ノ苦李ハ人ノ為メニ棄ラル
 老人少婦ヲ娶ニ枯楊稊ヲ生スト曰ヒ
 國家多賢ヲ進ニ茅ヲ拔テ連茹ト曰フ
 蒲柳ノ姿ハ未秋ナラサルニ先ッ槁レ
 薑桂ノ性ハ愈々老イテイヨク辛ラシ

秦ノ苻堅晋ヲ伐謝玄ノ兵ニ破ラレ肥水ニ敗レ走テ八公山ニ至ル風聲鶴唳草木ノ動搖ヲ聞モ晋兵ノ追迫ルカト疑ヒ震驚セザル無レ
 銅ヲ以テ鑄タル駝ノ宮門外ニ在ルナリ索靖晋國ノ將ニ亡ントスルヲ知リ嘆ノ曰會汝が荆棘中ニ在ヲ見ノミト
 宋ノ王佑手カラ三槐ヲ庭ニ植テ曰吾子孫必ス三公ニ為者アラント己ニノ王文正公果ノ相ト作ル人号ヲ三槐王氏ト為
 燕山ノ五子俱ニ登第ス馮道詩ヲ贈テ曰燕山竇十郎教子以義方靈椿一株老丹桂五枝芳
 晋ノ宣子靈公ヲ諫ム公鉅鹿ヲノ之ヲ刺シム宣子感服ノ

王者ノ兵ハ勢ヒ破竹ノ如ク
 七雄ノ國ハ地瓜ノ分カ若シ
 苻堅陣ニ望テ草木皆ナ是レ晋ノ兵力ト疑カヒ
 索靖ハ亡ラ知銅駝ノ會荆棘ニ在ン
 ヲ嘆セリ
 王佑ハ子ノ必貴カラント知手三槐ヲ植エ
 竇鈞カ五子齊シク榮エテ人五桂ト稱セリ

反事必讀 花木 六十八

將ニ朝セントス尚早坐ノ假寐ス覺曰民ノ主ヲ賊フハ不忠君ノ命ヲ棄ルハ不信ナリト遂ニ庭槐ニ觸テ死シタリ越王勾踐吳王ノ仇ヲ復セント欲乃膽ヲ座上ニ懸ケ朝夕之ヲ嘗メ又薪ニ臥蓼ヲ嘗以テ自カラ苦ミ曰會稽ノ恥ヲ忘ル母レト歐陽修ノ母ハ蘆荻ヲ以テ地ニ畫レ以テ子ニ教タリ趙ノ廉頗龐相如ノ功ヲ以テ位已レノ右ニ居ルヲ妬ミ將ニ之ヲ辱カレメントス相如之ヲ聞キ毎ニ廉頗ヲ避匿ス其舍人皆以テ恥トス相如曰夫秦ノ威ヲ以テスルモ我之ヲ庭叱ノ其群臣ヲ辱メタリ豈獨リ廉將軍ヲ畏レンヤ願フニ強秦ノ兵ヲ趙ニ加ヘ

故事必讀
 鉏麇ノ槐ニ觸ルハ民ノ主ヲ賊フニ忍
 ヒズ
 越王蓼ヲ嘗テ必ス吳ノ仇ヲ報イント
 欲ス
 修カ母ハ荻ヲ畫テ以テ子ニ教フ誰カ
 賢ト稱セサラシ
 廢頗ハ荆ヲ負テ以テ罪ヲ請ヒ善能ク
 過チヲ悔ルナリ
 彌子瑕ハ常ニ寵ヲ恃ミ餘桃ヲ將テ以
 テ君ニ啖ハシメ

ザル者吾兩人アルヲ以テナリ今而虎共ニ鬪ハハ勢ヒ俱ニ生ジ吾ハ國家ノ急ヲ先ニシ而ノ私仇ヲ後ニスルナリト頗之ヲ聞キ内祖荆ヲ負ヒ門ニ至テ罪ヲ請ヒ遂ニ劊頭ノ交リヲ為セリ彌子瑕衛君ニ寵アリ君ト果園ニ遊ビ桃ヲ食フニ甚ク甘シ其半ヲ以テ君ニ啖シハ君曰ク忠ナルカナ其口ヲ忘レテ寡人ニ啖ハシムト彌子瑕色衰ハ愛弛ブニ及ビ罪ヲ君ニ得タリ君曰是レ嘗テ我ニ餘桃ヲ啖ハシメリト秦ノ孝公ノ時商鞅新令ヲ行フ民遵ハハ乃チ一木ヲ南門ニ立令ヲ下ノ曰此レ北門ニ徙ス者アラバ五十金ヲ與ヘント人アリ之ヲ徙ス即チ

秦ノ商鞅ハ令ヲ行ハシト欲シ木ヲ徙
 ノ以テ信ヲ立ツ
 王戎カ李ヲ賣テ核ヲ鑽スルハ鄙吝ニ
 勝ヘス
 成王ノ桐ヲ剪テ弟ヲ封スルハ戲言無
 キニ因
 齊ノ景公ハ二桃ヲ以テ三子ヲ殺シ
 楊再思ハ蓮花六郎ニ似タリト謂フ
 蔗ヲ倒ニ啖フハ漸ク佳境ニ入り
 哀梨ヲ蒸セハ大イニ本真ヲ失ス

故事必讀
 花本
 卒九

金ヲ與テ惜マズ而メ令遂ニ行ハル
 王我家ニ好李アリ人其種ヲ得
 ニテ恐レ核ヲ鑽テ之ヲ賣タリ
 成王桐葉ヲ削リ珪ヲ為リテ
 戲ニ弟叔虞ニ與ヘテ曰吾此
 ヲ以テ若クヲ封ズト周公入
 リ賀ス王曰吾之ト戯ルノ
 ミト周公曰天子ニ戲言ナレ
 ト遂ニ封メ唐侯ト為
 齊ノ景公ニ勇子三人アリ功ヲ
 恃テ恣横ナリ公之ヲ患フ晏
 子曰二桃ヲ賜ト功ヲ計テ三
 士ニ食シムニト其ノ如クス
 初メ争ヒ後讓リ皆自殺ス
 六郎ハ張昌宗ノ小字ナリ容
 貌俊美ナリ武后ニ寵セラル昌
 宗ノ美ヲ贊シ曰六郎ノ面蓮花
 ニ似タリト楊再思之ニ諛フテ
 曰蓮花六郎ニ似タルノミト

豆ヲ煮ニ其ヲ燃ハ兄ノ弟ヲ殘ナフニ
 比シ
 竹ヲ砍テ箏ヲ遮ルハ舊ヲ棄テ新ヲ憐
 ナリ景公ハ三妹ヲハヤテ三子ヲ殺シ
 元素ハ江陵ノ柑ヲ致シ
 吳剛ハ月中ノ桂ヲ伐ル
 賞ヲ捐テ貧ヲ濟フハ當ニ堯夫ノ麥ヲ
 助ルニ效フベク
 物ヲ以テ敬ヲ申ルハ聊野人ノ苻ヲ獻
 スニ效フト云フ

顧愷之羨フ食フゴトニ尾ヨ
 リ本ニ至成之ヲ問フ答テ曰
 漸ニ佳境ニ入ルハ哀家ノ梨
 子味甚ダ美ナリ蒸テ之ヲ食
 ヘバ則チ真味ヲ失フ
 巨ヲ煮ルノ解兄弟ノ部ニ出
 董元素仙術アリ江陵柑熟ス
 上曰能ク柑ヲ致スヤ否素命
 ノ一盒ヲ取少頃アリテ柑果
 盒ニ滿テリ
 石曼卿家貧ニノ三喪未ダ舉
 ラズ范堯夫麥舟ヲ以テ之ヲ
 助ケタリ
 野人芹菜ヲ食ヒ其味ヲ羨ヲ覺
 テ之ヲ至尊ニ獻セント欲セリ
 郭林宗ハ友ノ來ルヲ見夜ル
 雨ヲ冒シ韭ヲ剪リ餅ヲ作り
 以テ待セリ
 孟浩然詩懷曠達嘗テ雪ヲ冒
 シ驢子ニ騎リ梅ヲ尋テ且曰

雨ヲ冒ノ韭ヲ剪ルハ郭林宗カ友情ノ
 殷ナルニ欸ヒ
 雪ヲ踏テ梅ヲ尋ルハ孟浩然カ自カラ
 雅興ヲ娛ナリ
 商ノ太戊能徳ヲ修テ祥桑自カラ枯レ
 寇萊公ハ深仁有リテ枯竹復ビ生セリ
 王母カ蟠桃三千年ニ花ヲ開キ三千年ニ
 子結故ニ人借テ以テ壽旦ヲ祝ス
 上古ノ大椿八千歳ヲ春トシ八千歳ヲ
 秋トス故ニ人託ノ以テ嚴君ニ比ス

故事必讀

花木

七十

吾詩思ハ風雪中驢子背上ニ
アリト
毫里ニ桑アリ穀ト共ニ合レ
朝ニ生ノ暮ニ拱ニ及ゲ伊陸
日妖ハ徳ニ勝ヤト大戊是ニ
於テ先王ノ政ヲ興レ大ニ徳
ヲ修メケレバ三日ニ其系
枯死セリ
宗ノ寇準死レ西京ニ歸葬ス
人皆祭ヲ路ニ設ケ竹ヲ折地
ニ挿ニ紙ヲ掛ク月ヲ逾テ枯
竹皆ナ節ヲ生レタリ

故事必讀

稂莠ヲ去テ政ニ以テ嘉禾ヲ植エ
枝葉ニ沃ハ根本ニ培フニ如カス
世路ノ榛蕪ハ當ニ剔ルベシ
人心ノ茅塞ハ須ラク開ヘシ

漢ノ武帝、王母ヲ邀フ母桃七枚ヲ出ノ帝ニ與フ帝核ヲ留
テ種ニト欲ス母曰ク此桃三千年一冬花ヲ開キ三千年一冬子ヲ結ブ
凡土ノ植ル所ニ非ズト大椿ノ子ニ出
稂童梁莠ハ苗ニ似テ苗ヲ害スル草ナリ「荃蕪ハ荆棘ナリ

鳥獸

說文ニ鳥ハ長尾禽ノ總名ナリト云フ
爾雅ニ四足ニシテ毛有ル者之ヲ獸ト曰アリ

麟ハ生草ヲ踏ハ生蟲ノ踐ハ
性至仁鳳ハ世ノ治乱ヲ知リ
乱ルレバ則チ出テ龍ハ能ク變
化ス龜ハ吉凶ヲトスミレ皆
靈氣アル者故ニ之ヲ四靈ト
謂フ

麟ハ毛蟲ノ長ト為シ

鬣ハ頸脊ノ毛ナリ剛ハ班ナ
リ豕肥レバ則チ鬣剛ニ
鵝ハ江東ノ人之ヲ家雁ト謂
フ

虎ハ乃獸中ノ王ナリ
龍鳳龜麟之レヲ四靈ト謂ヒ

雞頭ニ冠ヲ戴クハ文ナリ足
搏距アルハ武ナリ前ニ在テ
敢鬥スルハ勇ナリ食ヲ見テ
相呼ハ仁ナリ晨ヲ司リ時ヲ
失セザルハ信ナリ之ヲ五徳
ト謂フ

駉駉駉駉ハ良馬ノ號

陽ハ和暖ノ氣ナリ北地ハ苦
寒南方ハ和暖故ニ秋月ニ至
レハ則チ北ヨリ南ニ投レ春
暖ニ至レバ又北ニ歸ル因テ

羊ヲ柔毛ト曰ヒ又長鬣主簿ト曰フ

鴨ヲ家鳥ト號ス

鴨ハ舒鴈ト名ケ

故事必讀

鳥獸

陽鳥ト名ケ
 駟虞ハ白虎黒文ニノ生物ヲ
 食ハガル仁獸ナリ
 螟ハ心ヲ食フ者蠶ハ葉ヲ食
 フ者蟲ハ根ヲ食フ者賊ハ節
 ヲ食フ者
 鸚鵡ハ能言フ鳥唐ノ時長安
 ノ豪民楊崇義ノ妻劉氏隣舍
 ノ兒李弁ト私通ニ同謀リ崇
 義ヲ害シ井中ニ埋メ劉氏故
 ニ官府ニ訴フ縣官其所ニ詰
 テ檢校ス架上ノ鸚鵡忽然ニ
 曰ク家主ヲ殺ス者ハ李弁ナ
 リト遂ニ執ヘ訊ク實ヲ得タ
 リ明皇封ノ緑衣使者ト為
 虎一狐ヲ得タリ狐曰ク
 子我ヲ食フ母レ天帝我
 フノ百獸ニ長タラシム

雞ニ五徳アリ故ニ之ヲ稱ノ徳禽ト曰ヒ
 鷹ノ性陽ニ隨テ之ヲ名テ陽鳥ト曰フ
 家豹烏圓ハ乃猫ヲ譽ルナリ
 韓盧楚獍ハ皆ナ犬ノ名ナリ
 麒麟駟虞ハ俱ニ仁ヲ好ムノ獸
 螟蠶蟲賊ハ皆ナ苗ヲ害フノ蟲
 無腸公子ハ螃蠯ノ名ナリ
 緑衣使者ハ鸚鵡ノ號ナリ
 狐子虎ノ威ヲ假ルハ勢ヲ借テ惡ヲ為
 ヲ謂ヒ

信ゼンバ吾子カ為ニ
 先行セン子後ニ從ヘト
 其言ノ如ク獸皆虎ヲ畏
 ル虎獸ノ己レヲ畏ル
 ヲ知ラズ以テ狐ヲ畏ル
 ト為シ遂ニ之ヲ縱セ
 リ
 張良漢王ニ謂テ曰漢天
 下ヲ有ツ大半楚兵飢疲
 ス今之ヲ釋テ擊サレバ
 虎ヲ養フテ自カラ患ヒ
 ヲ貽スナリ
 猶豫ハ獸ノ名性疑ヒ多シ
 毎ニ樹ニ上リ久ウメ人
 无ク然ル後下リ須臾
 又上ル是ノ如スル一ニ
 非ズ故ニ決セザル者ヲ
 言フ
 狼ハ後足絶ダ短ク狼ハ
 前足絶ガ短シ毎ニ必

虎ヲ養テ患ヲ貽スハ禍ヲ留テ身ニ在
 ヲ謂フ
 猶豫ノ二獸ハ疑ヒ多キ人ノ決セサル
 ニ喩ヘ
 狼狼ハ二獸ノ相ヒ倚ル人ノ顛連スル
 ニ比ス
 勝負未分タサルヲ鹿誰カ手ニ死スル
 ヲ知ラスト云ヒ
 基業主ヲ易ルハ正サニ燕ノ他家ニ入
 ルカ如シト云フ

文庫不賣
 鳥獸

故事必讀

相倚テ行ク若シ相離ル
趙ノ石勒群臣ニ語テ曰
朕ヲ漢高ニ遇ハシメ
バ當ニ北面ノ之ニ事フ
バシ光武ニ遇ハシ中原
ニ並ビ驅ルベシ未ダ鹿
誰ノ手ニ死スルヲ知ス
劉禹錫ノ鳥衣巷ノ詩ニ
朱雀橋邊野草花鳥衣巷
口夕陽斜舊時王謝堂前
燕飛入尋常百姓家
秦ノ時陳倉ノ人地ヲ掘
テ一物ヲ得タリ羊ノ如
ニテ羊ニ非ズ路ニ二童
子ニ逢フ曰此レ媼ト名
クト媼復曰彼二童ハ陳
寶ト名ク雄ヲ得レバ則
王タリ雌ヲ得レバ則覇

鴈ノ南方ニ到ル先ニ至ルヲ主トシ後

ニイタルヲ賓ト為ス

雉ヲ陳寶ト名ク雄ヲ得ルハ則王タリ

雌ヲ得ルハ則覇タリ

鵠ヲ刻テ鷺ニ類スルハ學ヲ為ノテ粗

成ルナリ

虎ヲ畫テ狗ニ類スルハ巧ヲ弄ノ反拙

ナルナリ

美惡稱ハサル之レヲ狗尾貂ニ續グト

謂ヒ

貪鄙足ラサル之レヲ蛇象ヲ吞ト欲ト

謂フ

禍去テ禍又至ルニ前門ニ虎ヲ拒キテ

後門ニ狼ヲ進ムト曰ヒ

兇ヲ除テ兇ヲ畏サルヲ虎穴ニ入サレ

ハ馬ゾ虎子ヲ得ト曰フ

衆ノ利ニ趨ルヲ鄙スルニ群蟻羶ニ附

ト曰ヒ

己カ兒ヲ愛スルヲ謙ノ老牛犢ヲ舐ル

ト曰フ

故事必讀

鳥獸

七十三

タリト其人媼ヲ舎テ童
子ヲ逐フニ二雉ト化シ
林中ニ入レリ
漢ノ馬援任嚴敦ヲ戒テ
曰龍伯高ハ敦重周慎吾
汝ガ曹ノ之ニ效ハシテ
願フ杜季良ハ濠俠義ヲ
好ム之レニ效フヲ願ハ
ズ蓋シ伯高ニ效ヘバ得
ザルモ猶謹勅ノ士ト為
ラシ所謂鶴ヲ刺テ成ガ
ルモ尚ホ鳥ニ類スル者
ニ季良ニ效フテ得ガレバ
陷テ天下輕薄ノ子ト為
ラン謂ユル虎ヲ画テ成
カ狗ニ類スル者ニト
晋ノ趙王倫位ヲ篡ヒ奴
卒ノ子モ封ヲ加フ朝
スル毎ニ貂蟬座ニ滿ツ
語ノ曰貂足ラヌ狗尾ヲ

續グト
漢ノ和帝年終二十四乃
能ク竇氏ヲ收捕シ孝昭
ノ列ヲ繼グニ足レ惜カ
十官官ト之ヲ議シ以テ
中常侍ノ漢ヲ亡ヌノ皆
ヲ啓ク前門ニ虎ヲ拒
云々此ノ謂ナリ
吳ノ呂蒙軍ニ從ハント
欲ス母之ヲ止ム蒙曰ク
虎穴ニ入ザレバ馬ンガ
虎子ヲ得ント
漢ノ王彪ノ子修、曹操ニ
殺サル操、彪ヲ見問テ曰
公何ガ甚ダ瘦タル曰ク
悔ラクハ日磧先見ノ明
无ク猶老牛犢ヲ欲ルノ
愛ヲ懷クト
衆一庖酒ヲ爭フアリ相
謂テ曰請ノ地ニ畫テ蛇

無中ニ有ヲ生スルニ蛇ヲ畫テ足ヲ添
ト曰ヒ
進退兩ナカラ難キヲ羝羊籬ニ觸ル
ト曰フ
杯中ノ蛇影自カラ猜疑ヲ起シ
塞翁カ馬ヲ失スル禍福分難シ
龍駒鳳雛ハ晉ノ閔鴻吳中ノ陸士龍ノ
異ヲ誇ルナリ
伏龍鳳雛ハ司馬徽カ孔明龐士元ノ奇
ヲ稱スルナリ

ヲ為リ先ツ成者ハ獨リ
飲ント一人先ツ成ル酒
ヲ舉ゲ起テ曰吾能ク之
ガ足ヲ為ラント後ニ成
ル人酒ヲ奪ヒ飲テ曰蛇
ハ足無シ今足ヲ添ル蛇
ニ非ズト
杜洋三歳ナルヲ幾ト曰
晋ノ樂廣客ノ久シク來
ラザルアリ故ヲ問フ答
テ曰前ニ酒ヲ賜フヲ蒙
ルニ盃中蛇影アルヲ見
而シ疾スト時ニ角弓ノ
壁ニ掛ルアリ廣意フ弓
影蛇ノ如クナラント前ノ
處ニ置キ客ニ問フ見ル
所アリヤ否客ノ曰初ノ
如シト乃所以ヲ告ルニ
客ノ病豁然タリ

呂后戚夫人ノ手足ヲ斷テ號シテ人彘
ト曰ヒ
胡人契丹主ノ屍骸ヲ醢ノ之レヲ帝羝
ト曰フ
人ノ狼惡ナルハ構杙ニ同ク
人ノ兇暴ナルハ窮奇ニ類ス
王猛桓溫ヲ見テ蝨ヲ捫テ而ノ當世ノ
務ヲ談シ
甯戚齊桓ニ遇ヒ角ヲ扣テ而ノ卿相ノ
榮ヲ取ル

文庫小讀 鳥獸 七十四

塞上ノ翁馬亡テ胡ニ入
 人之ヲ弔ス翁曰ク安
 福ニ非ルヲ知ンヤト後
 一駿馬ヲ引テ帰ル人之
 ヲ賀ス翁曰ク安ハ禍ニ
 非ルヲ知ンヤト後子馬
 ニ騎墜テ臂ヲ折人之ヲ
 弔ス翁曰ク安ハ禍ニ非
 ルヲ知ンヤト後胡兵大
 出壯者皆戰死ス惟其子
 跛ヲ以テノ故ニ父子相
 保ヲ得タリ
 晉ノ陸機幼ニノ聰明閉
 鴻之ヲ奇トノ曰此兒若
 レ龍駒ニ非ハバ必
 是鳳雛ナラント
 呂后妬忌戚夫人ノ手足
 ヲ斷厨中ニ居ラレメ人
 號ト名ク
 石晋ノ末契丹主兵ヲ將

楚王怒蛙ニ式ノ昆蟲ノ敢死ヲ以テシ
 丙吉牛ヲ問フテ陰陽ノ時ヲ失カテ恐
 十人ヲ以テ而ノ千虎ヲ制スルハ事ノ
 勝難キニ比言シ
 韓盧ヲ走シ而メ蹇兔ヲ搏ツハ敵ノ摧
 キ易ヲ比シ言フ
 兄弟ハ鶴鴒ノ相親シムニ似
 夫婦ハ鸞鳳ノ匹偶ノゴトシ
 勢ヒ有テ能ク為スヲ莫キ鞭ノ長シト
 雖トモ馬腹ニ及ハズト謂ヒ

牛南侵ノ途ニ死ス國人
 塩ヲ以テ之ヲ醃シ名ケテ
 帝把ト曰ク把ハ乾肉ノ屬
 禱杭ハ即チ鯨ナリ窮奇ハ
 即チ共工ナリ元俱ニ惡獸
 ノ名ナリ
 王猛褐衣ヲ被テ桓温ニ
 謁シ氣ヲ捫リナガラ當
 世ノ務ヲ談スル旁ニ人
 無キガ若シ
 桓公客ヲ郊ニ送ル審戚
 牛ヲ飯ヒ角ヲ扣テ歌テ
 曰ク南山燦タリ牛ヲ飲
 フテ夜半ニ至ル長夜漫
 漫何時タ旦ニ桓公之ヲ
 聞キ舉テ以テ相ト為
 楚王吳ヲ伐テ人ノ死ヲ
 輕ンゼンヲ欲レ怒蛙
 ヲ見テ式ノ之ヲ敬ス徒
 者故ヲ問フ曰ク其敢死

小ヲ制メ大ヲ用ヒサル能ク雞ノ小ナル
 ヲ割ニ馬ソ牛刀ヲ用ント曰ク
 鳥ノ母ヲ食フ者梟ト曰ク
 獸ノ父ヲ食フ者獍ト曰ク
 苛政ハ虎ヨリモ猛ク
 壯士ハ氣虹ノ如シ
 腰二十萬貫ヲ纏鶴ニ騎テ揚州ニ上ルハ
 仙人ニノ而メ富貴ナルヲ謂ヒ
 盲人ノ瞎馬ニ騎テ夜半ニ深池ニ臨ム
 ハ險語ノ人ニ逼ルヲ謂フナリ

故事必讀

鳥獸

七十五

タルヲ以テナリト
漢相丙吉途ニ門死ニ遇
テ問ハズ牛ノ喘キ過ル
ヲ見テ牛ノ行幾ナルヲ
問フ或其前後問ラ失ス
ルヲ謂フ吉曰三公ハ陰
陽ヲ調和スルヲ典トシ
方今猶ホ未ダ大ニ熱セ
ズ而シテ牛喘テ舌ヲ出ス
恐クハ陰陽序ヲ失セン
職當ニ問フマキ所ナリ
人死ヲ憂フルハ則チ京
兆ノ職ナリト咸其大体
ヲ知ルト謂フ
十人ヲ以テ云々常安民ノ
呂公著ニ遺ル書ニ謂フ
廬ハ韓ノ良犬ナリ
楚宋ノ伐ソ宋急ヲ晋ニ
告グ晋侯之ヲ救ハント
欲ス伯宗可カオ古人ノ

黔驢ノ技ハ枝此ニ止ルノミ
鼯鼠ノ技ハ枝窮マリ易ス
強ノ兼併ス者ヲ鯨吞ト曰ヒ
小賊ヲ為ス者ヲ狗盜ト曰フ
惡人ヲ養フハ虎ヲ養フカ如シ當ニ其
肉ニ飽スヘシ飽サレハ則チ噬ム
惡人ヲ養フハ鷹ヲ養フカ如シ之ヲ飢
セハ則チ附キ之ヲ飽セハ則チ颺ル
隋珠雀ヲ彈スルハ得ルコト少ナウシ
テ而シテ失フノ多キヲ謂ヒ

故事少讀

言ニ曰ク鞭之長ト難
馬腹ニ及バズト天方ニ
楚ニ投ク與ニ争フマカ
ラズト
孔子泰山ヲ過ギ婦人ノ
哭スルヲ聞テ故ヲ問フ
曰ク吾舅ト夫及ビ子ト
俱ニ虎ニ死サル子曰何
為ゾ去ザル曰ク苛政ナ
シ孔子曰苛政虎ヨリ猛
昔客アリ各其志ヲ言フ
或ハ揚州ノ刺史タラシ
ト願ヒ或ハ貨財ノ多カ
ランヲ願ヒ或ハ鶴ニ騎
テ上昇センヲ願フ一人
曰我ハ腰ニ十萬貫ヲ纏
ヒ鶴ニ騎テ揚州ニ上リ
顧愷之殷仲堪ト危語ヲ
作ス一人座ニ在テ曰ク

鼠ニ投スルニ器ヲ忌ムハ甲ニ因テ而シ
乙ヲ害スルヲ恐ルハ十ヲ以テ計スルニ當
事ノ多キヲ蠅務ト曰ヒ
利ノ小ナルヲ蠅頭ト曰フ
心ノ惑ハ狐疑ニ似
人喜ハ雀躍ノ如シ
屋ヲ愛ノ鳥ニ及フハ此ニ因テ而シ彼
ヲ惜ムヲ謂ヒ
雞ヲ輕シノ鷲ヲ愛スルハ此ヲ捨テ而シ
他ヲ圖ヲ謂フ

故事少讀

鳥獸 七十六

盲人瞎馬二騎リ夜半深池ニ臨ムト仲堪一目ヲ
 眇ス驚テ曰ク此太大人
 二逼ルト因テ罷ム
 黥ニ驢ナレ或者之ヲ舩
 載シ山下ニ放シ虎其籠
 然大物ナルヲ見林間ニ
 避テ之ヲ視驢一鳴ス虎
 大ニ駭キ以テ為ラク已ヲ
 啞ント然レ往來之ヲ視
 其異能ナキヲ覺エ稍近
 キ衝冒ス驢怒テ之ヲ蹄
 ス虎因テ喜ビ之ヲ計テ
 曰ク技此ニ止ノ遂ニ跳
 梁ノ其喉ヲ斷其肉ヲ盡
 ノ去
 鼯鼠能ク飛モ屋ニ上ル
 能ハズ能ク縁モ木ヲ窮
 ル能ハズ能ク游モ谷ヲ
 渡ル能ハズ能ク穴ニ入ル

惡ヲ唆メ非ヲ為サシムルヲ獠ニ水ニ
 升イテ教ト曰フ
 恩ヲ受テ報セサルヲ魚ヲ得テ筌ヲ忘
 ルト謂フナリ
 勢ニ倚テ人ヲ害フハ真ニ城狐、社鼠ニ
 似タリ
 空ク存ノ用ル無キハ何ソ陶犬、瓦雞ニ
 殊ラン
 勢弱ウメ敵シ難キ之ヲ螳臂、螻蛄ニ當ルト
 謂ヒ

モ身ヲ掩フ能ハズ能ク
 走モ人ニ先タツ能ハズ
 海中ノ大魚雄ヲ鯨ト曰
 雌ヲ鯨ト曰フ浪ヲ鼓ン
 雷ヲ成シ沫ヲ噴バ雨ヲ
 成ス
 陳登、呂布ノ為ニ曹操ニ
 説テ曰布ヲ待スル譬バ
 虎ヲ養フガ如シ當ニ其
 肉ニ飽スベレ否レバ則
 人ヲ噬ン操曰然ラニ譬
 バ鷹ヲ養フガ如シ鷹バ
 則用フ為ニ飽バ則鷹リ
 去ント
 莊子云隋侯ノ珠ヲ以テ
 千仞ノ雀ヲ彈セバ世必
 之ヲ笑ハン用ル所ノ者
 重ク求ル所ノ者輕ケレ
 バナリ
 鼠ニ投セント欲ノ器ヲ

人生ノ死シ易キヲ蜉蝣ノ世ニ在ルト
 謂フ
 小ノ大ヲ制シ難キハ越雞ノ鵠卵ヲ伏
 スルカコトシ
 賤ノ反テ貴ヲ輕ニスルハ鸞鳩反テ大鵬
 ヲ笑フニ似タリ
 小人、君子ノ心ヲ知ラサルヲ燕雀豈鴻
 鵠ノ志ヲ知ント謂ヒ
 君子、小人ノ侮ヲ受サルハ虎豹豈犬羊
 ノ欺ヲ受ンヤト謂フ

故事必讀

鳥獸

七十七

忌ム鼠ノ器ニ近キ尚ホ
 之ヲ憚テ投ゼサルハ其
 器ヲ傷ランコトヲ恐ル
 ンヤ貴臣ノ主ニ近キバ
 蟬毛ハ攢起スル矢ノ如
 狐ノ性多疑河ヲ渡ル毎
 必水ノ聲無キヲ待テ
 後ニ渡ル
 人喜ビアレバ雀ノ跳躍
 スルガ如シ
 鳥巢屋ニ近クレバ則チ
 人毀ラズ其屋ヲ傷ハン
 フ恐ルニ因テナリ
 晋ノ庾翼草書ヲ善シ王
 羲之ト名ヲ齊ウス内外
 羲之ヲ尚ズ翼不平ナリ
 人ニ謂テ曰兒輩乃チ家
 雞ヲ輕ン野鷄ヲ愛シ
 皆逸少ノ書ヲ學ブト
 筌ハ漁具ナリ

跖カ犬堯ニ吠ルハ其主ニ非ルヲ吠エ
 鳩ノ鵲巢ニ居ルハ其成ヲ享ルニ安シ
 水ニ縁テ魚ヲ求ムルハ極テ得難キコ
 言ヒ
 圖ヲ按メ驥ヲ索ムルハ甚タ真ヲ失フヲ
 言フ
 惡人ノ勢ヒニ藉ルヲ虎ノ岨ヲ負フカ
 如シト曰ヒ
 窮人ノ歸スルコト無キヲ魚ノ水ヲ失フガ
 如シト曰フ

社鼠城狐テ々託スル所
 ノ者然ルナリ蓋シ狐ヲ
 掘テ城ヲ壞ンコト恐ル鼠
 フテ社ヲ灼ンコトヲ恐
 レテナリ
 齊ノ莊公出テ獵ス螳螂
 アリ足ヲ舉テ將ニ輪ヲ
 擲ントス公曰此レ天下
 ノ勇蟲ナリト車ヲ廻ラ
 ノ之ヲ過グ勇士争テ之
 ニ歸セリ
 越雞ハ身小ナル者ナリ
 莊子ニ鸞鳩大鵬ヲ笑テ
 曰我決起ノ飛ビ輪蹄ヲ
 搶ントスルハ則チ至ラ
 スノ地ニ控ノニ奚ヲ以
 テカ九万里ニ之ヲ南ス
 ルコトヲ為ント
 陳勝耕ヲ壠上ニ輟テ曰
 他日富貴タルモ此ヲ忘

九尾ノ狐ハ陳彭年カ素性諂ニシテ而
 ノ又奸ナルヲ譏リ
 獨眼ノ龍ハ李克用カ一目眇ニメ而メ
 勇アルヲ誇ルナリ
 鹿ヲ指テ馬ト為ルハ秦ノ趙高カ主ヲ
 欺ナリ
 石ヲ叱ノ羊ト成スハ黃初平カ仙ヲ得
 ルトリ
 莊カ勇能ク兩虎ヲ擒シ
 高駢ハ一矢雙鵬ヲ貫ク

故事必讀

鳥獸

七十八

ル、母レト聞者之ヲ笑
 フ勝叱ノ曰汝等燕雀豈
 鴻鵠ノ志ヲ知ンヤ
 漢高祖徹ニ謂テ曰爾ガ
 御陰侯ヲメ反セシムル
 カ對テ曰然リ跣犬堯ニ
 吠堯ノ不仁ナルニ非ズ
 犬固ヨリ其主ニ非ルヲ
 吠ルナリ云々ト
 鵲善ク巢ヲ為ル鳩性拙
 巢ヲ為ル能ハズ毎ニ鵲
 ノ成巢ニ居ル
 山曲ヲ嶮ト曰フ
 宋ノ真宗ノ時陳彭年素
 性奸佞時ニ九尾狐ト号
 唐ノ僖宗ノ時黃巢造反
 ス李克用之ヲ破ル時人
 其一目眇ノ勇アルヲ以
 号ノ獨眼龍ト為
 秦ノ趙高權ヲ專センヲ

司馬懿ハ蜀ヲ畏ル、一虎ノ如ク
 諸葛亮ハ漢ヲ輔ケテ龍ノコトシ
 鷦鷯ノ林ニ巢クフハ一枝ニ過キス
 偃鼠ノ河ニ飲ムハ腹ニ滿ルニ過キス
 人ヲ棄テ甚易キヲ孤雛腐鼠ト曰ヒ
 文名共ニ仰クヲ起鳳騰蛟ト曰フ
 公ノ為メカ私ノ為メカトハ惠帝ノ蝦
 蟇ヲ問フナリ
 左欲ハ左セヨ右欲ハ右セヨトハ湯德
 禽獸ニ及ナリ

欲レ先ツ驗ヲ設ケ鹿ヲ
 持テ二世ニ獻ノ曰馬ナ
 リト二世笑テ左右ニ問
 ニ或ハ黙スルアリ或ハ
 鹿ト言フアリ高乃陰カ
 ニ鹿ト言フ者ニ中ニ法
 ヲ以テス
 黃初平羊ヲ牧ス一道士
 ニ從ヒ金華山ニ入テ九
 年反ラズ其兄尋テ之ヲ
 獲羊ハ何ニ在ト問フ平
 曰山東ニアリト兄曰惟
 白石ヲ見ノミト平之ヲ
 叱スレバ其石皆起テ羊
 ト成レリ
 卞莊子虎ヲ刺ントス管
 堅子止テ曰兩虎食ヲ爭
 ハバ必門ヲ門ハハ則大
 ハ傷ツキ小ハ斃ル傍ヨ
 リ之ヲ刺バ一舉兩獲セ

魚ノ釜中ニ游フハ生クト雖氏久シカ
 ラサルナリ
 燕ノ幕上ニ巢フハ身ヲ棲ス一ノ安カ
 ラサルナリ
 妄ニ自カラ奇ト稱スレハ之ヲ遼東ノ
 豕ト謂ヒ
 其見ノ甚タ小ナルハ譬ヘハ井底ノ蛙
 ノコトシ
 父惡ニ子賢ナル是ヲ犁牛ノ子ト謂ヒ
 父謙ニ子拙キヲ是ヲ豚犬ノ兒ト謂フ

敬重必讀 鳥獸

ント之ニ從フ果ノ二虎
 フ獲タリ
 唐ノ高駢双雕ヲ見テ曰
 我貴ナラバ當ニ之ニ中
 バレト一發ノ双雕ヲ貫
 ク双雕侍郎ト号ス
 孔明魏ヲ伐ツ司馬懿堅
 ク守テ出ズ孔明中樞婦
 人ノ喪服ナリヲ遺ルニ
 仍ホ出ズ軍士曰公蜀ヲ
 畏ル虎ノ如シ後人ノ
 笑ヲ奈何ント
 鷓鴣云々莊子ノ語
 漢ノ肅宗竇憲ニ謂テ曰
 朕汝ヲ乘ント欲ス孤雛
 齋鼠ノ如キノミト
 蛟ハ龍ニ似テ角ナシ其
 氣飛騰レ光彩目ヲ奪フ
 鳳ハ靈鳥羽毛振起シ文
 彩空ニ耀ク

人群ニ出テ而ノ獨リ異ナルハ鶴ノ雞
 群ニ立ツカ如ク
 配偶ニ非スノ以テ相從フハ雉ノ牡匹
 ヲ求ムルカ如シ
 天上ノ石麒麟ハ小兒ノ衆ニ邁ルヲ誇
 ルナリ
 人中ノ騏驎ハ君子ノ凡ニ超ルニ比ス
 ルナリ
 怡堂ノ燕雀ハ後災ヲ知ラス
 甕裡ノ醯雞安ゾ廣見有ラン

晋ノ惠帝上苑ニ遊ヒ蛙
 聲ヲ聞キ問テ曰彼ノ鳴
 ハ公ノ為カ私ノ為カト
 左右之ニ戲答テ曰公田
 ニ在ル者ハ公事ノ為ニ
 シ私田ニ在ル者ハ私事
 ノ為ニスト
 張嬰張綱ニ告テ曰荒裔
 ノ愚民侵枉ニ堪ハズ遂ニ
 相聚テ生ヲ偷ム魚ノ釜
 中ニ游ガ若シ其久シカ
 ルマカラザルヲ知ルナ
 リ
 吳ノ季札晋ニ如キ將ニ
 于戚ニ宿セントス鐘聲
 ノ聞ク因テ孫林甫ニ謂
 テ曰夫子ノ此ニ在ルヤ
 猶ホ燕ノ幕上ニ巢クウ
 カゴトシ以テ樂スマケ
 ンヤト

馬牛ニシテ襟裾スルハ人ノ禮義ヲ識
 ラサルヲ罵ルナリ
 沐猴ニシテ冠スルハ人ノ見ノ恢宏
 ナラサルヲ笑フナリ
 羊質ニシテ虎皮ハ其ノ文有テ實無キ
 ヲ譏
 株ヲ守テ兔ヲ待ツハ其守拙ニシテ能無ク
 言フ
 惡人ハ虎ノ翼ヲ生スルカ如シ勢必ス
 人ヲ擇テ而ノ食ン

鳥獸
 八十

故事必讀

漢ノ朱浮ガ彭寵ニ與ル書ニ曰、往時遼東ヲ豕白頭ノ子ヲ生スルアリ異トノ之ヲ獻ス行テ河東ニ至レバ群豕皆ナ自シ乃漸ノ懷テ退ク云々、莊子云井蛙海ヲ語ルベカラス、子仲弓ニ謂テ曰、犁牛ノ子驛ウノ且角アラバ用ル勿ラント欲スト雖ハ山川其レ諾ラ舍ンヤト、晋ノ欒康年度人ニ過グ人ノ之ヲ美テ曰、康ノ衆中ニ處ル正ニ鶴ノ雞群ニ立ガ如シ、雉ノ雖ヲ求テ此ニ配スルハ常理ナリ、牡ヲ求ルハ則チ其配ニ非ス、淫乱ノ人類ニ非スノ礼ヲ犯

志士ハ鷹ノ籠ニ在ルカ如シ、自カラ是レ凌雲ノ志シアリ、鮒魚ノ涸轍ニ困ンテ西江ノ水ヲ待難キハ人ノ甚ハタ窘ムニ比シ、蛟龍雲雨ヲ得テ終ニ池中ノ物ニ非ストハ人ノ大ニ為ス有ニ比ス、牛耳ヲ執ルハ人ノ主盟ト為ルナリ、驥尾ニ附クハ人ノ引帶ヲ望ムナリ、鴻鴈ノ哀鳴ハ小民ノ所ヲ失フニ比シ、狡兔三穴ハ貪人ノ巧ミニ營ムヲ謂フ

テ相求ルニ比スルナリ、徐陵生ル僧室誌其、麟ヲ摩ノ曰ク此レ天上ノ石麒麟ナリト、徐冠異才アリ、孝嗣之ヲ見テ嘆ノ曰、此子謂ユル人中ノ麒麟必ス能ク速ク千里ヲ致サント、鹽雞ハ籠中ノ小蟲ナリ、項羽ハ沐侯ニ冠スルノミ、(衣冠ヲ着ト雖モ其人ニ稱ハザルヲ言フ)、文彩ノ虎皮ヲ以テ羊身上ニ加フルハ猶ホ好衣冠ヲ以テ不學ノ人ニ加フルガゴトキナリ故ニ文質必ス宜キヲ得ルヲ要ス、宋人畊ス者アリ田中ニ株アリ兔走り來之ニ觸

風セル馬牛ハ勢ヒ相ヒ及ハス、常山ノ蛇ハ首尾相應スルナリ、百足ノ蟲ハ死シテ而ノ僵レサルハ其之ヲ扶クル者衆キヲ以テナリ、千歳ノ龜ハ死シテ而ノ甲ヲ留ム其之ヲトスル則靈ナルニ因テナリ、大丈夫ハ寧ロ口鶏口ト爲ルトモ牛後ト爲ルヲ無カレ、士君子ハ豈ニ雖伏スルヲ甘センヤ、定テ雄飛ヲ要ス

故事必讀

レ頸ヲ折テ死ス因テ明
ヲ釋テ株ノ守リ復タ免
ヲ得ント欲ス

虎ノ爪牙本ト當ルベカ
ラズ又其レニ角ヲ添ヘ
翼ヲ添ルヲ為ス強暴ノ
者ヲ助クル此レニ類スル
アリ

莊子云車轍沖ニ射魚ヲ
見ル曰我ハ東海ノ波臣
ナリ君其レ外斗ノ水ヲ
以テ我ヲ活サンカ周曰
我西江ノ水ヲ汲テ汝ヲ
活スヲ待テ射曰君ガ言
ノ如クバ則我ヲ粘魚ノ
肆ニ索メヨト

周瑜曰劉備ハ久シク屈メ
人ノ用ヲ為ス者ニ非ズ
恐クハ蛟龍雲雨ヲ得ハ
終ニ池中ノ物ニ非ル也

諸侯ノ會盟ニハ尊者牛
耳ヲ執リ以テ盟主ト為
ルナリ

蒼蠅ハ飛ブテ几席ノ間
ニ過キズ若シ能ク驥尾
ニ附ケバ千里ヲ致マシ
詩ノ鴻雁篇ハ周室中コ
ロ衰ヘ萬民離散ス故ニ
鴻雁哀鳴ノ自カラ北ス
ルヲ以テ此歌ヲ作リシ
ナリ

跼促ノ轅下ノ駒ノ如ナルヲ母レ

委靡ノ牛馬ノ走カ如ナルヲ母レ

猩々能ク言モ走獸ヲ離レス

鸚鵡能ク言モ飛鳥ヲ離レス

人惟ダ礼アリ庶クハ相鼠ノ刺ヲ免ル

可シ

若徒ラニ能ク言氏夫何ゾ禽獸ノ心ニ

異ム

楚子使ヒテ齊侯ニ遣リ言シメテ曰君ハ北海ニ處リ寡人ハ南
海ニ處ル唯是風馬牛相及バザルナリト牛ノ走ハ風ニ順ヒ馬ノ
走ルハ風ニ逆ヒ齊ト楚トハ遠ク相干カラサルヲ喻ヘ言フナリ
孫子ニ云フ善ク兵ヲ用ル者ハ率然ノ如シ率然ハ常山ノ蛇ナリ

其首ヲ撃バ則チ尾應シ其尾ヲ撃バ則チ首應シ其中ヲ撃バ
則チ首尾俱ニ應ズ

楚王莊子ヲ聘ス莊子曰ク楚ニ神龜アリ己ニ千歳王笱ヲ申テ
之ヲ藏セン此龜寧ロ其死シ骨ヲ留ル貴キカ寧ロ三テ尾ノ泥
塗ニ曳ンカ吾將ニ尾ヲ曳ントスト

雞口ハ小ナルモ猶ホ能ク食ヲ進ム牛後大ト雖氏糞ヲ出スノミ
後漢ノ趙溫嘆ノ曰ク大丈夫當ニ雄飛スベシ雖伏スベカラズト遂
ニ官ヲ棄テ去レリ

轅ハ車ノ轆ナリ駒ハ二歳ノ馬ナリ駒ノ力小ニノ車ヲ牽トモ動
カズ故ニ獨促スルナリ

牛馬走ハ猶ホ僕ノゴト牛馬ヲ走遣フ僕ト言フノ義ナリ
詩ノ相鼠篇彼ノ鼠ヲ視ルニ心礼アリ人ニノ礼无カルベケンヤ
人ニノ礼无ケレバ則チ死セスシテ亦何ヲカ為ンヤトナリ

衣服

釋名云凡ソ服ノ上ヲ衣ト曰フ衣ハ依ナリ人ノ依テ以テ寒
暑ヲ抗フ所ナリ下ヲ裳ト曰フ裳ハ障ナリ自カラ障蔽ス
ル所以ナリト然レバ総テ衣服ト曰ナルマシ

故朝必讀

并ハ皮ヲ以テ之ヲ為ル
二代ノ制ナリ嗚ハ殿ノ
冠名ナリ冕ハ冠冕ナリ
後仰ギ前俯ス恭ヲ主ト
ルナリ宋ニハ之ヲ更テ
平天冠ト名ク
履ハ礼ナリ足ヲ飾リ以テ
礼ヲ為スナリ履底ヲ緑
ト曰フ履ハ舞人ノ穿ツ
所ノ履ナリ
九錫ハ一輿馬大輅戎輅二
三衣服三樂軒縣之樂
四朱戶居ル所其戸ヲ朱
ニス五納陛陛ヨリ外ル六
虎賁勇士三百七弓矢
形弓矢ハ斧鉞大柯斧
而ノ殺ヲ器ニス九拒虎
鬱金酒ヲ以テ祭ス
冠スル時三加礼ハ始メ
緇布冠ヲ加ヘ再ビ皮弁

冠ヲ元服ト稱シ
衣ヲ身章ト曰フ
并ト曰ヒ嗚ト曰ヒ冕ト曰フハ皆冠ノ
號ナリ
履ト曰ヒ舄ト曰ヒ屣ト曰フハ悉ク
名ナリ
上公ハ命服九錫アリ
士人初冠ス三加ト曰
簪纓緝紳ハ仕官ノ稱ナリ
章甫縫掖ハ儒者ノ服ナリ

シ次ニ爵弁ヲ加テ既ニ冠
スレバ則チ必ズ其名字ヲ
正ス
青ハ純綠色衿ハ衣領ナ
リ父母俱ニ存スレバ衣
絶ナリ
詩ニ糾々葛屨以テ霜ヲ
履ハ可シ糾々ハ縲寒
涼ノ意蓋シ魏地陰隘其
俗儉嗇ニ編急ナリ
緑ハ間色賤カク反テ衣
ト為黄ハ正色貴ク反
テ裏ト為ル蓋シ莊公婢
妾ニ惑ヒ夫人莊姜賢ニ
シテ而シテ位ヲ失フ故ニ云
襜褕ハ衣ノ破タル也
襜褕ハ兒ヲ負フ衣也
鞞ハ小兒ノ用ル所長
スレバ則チ之ヲ棄ツ故
ニ法制ヲ蔑棄スル者常

布衣ハ即白丁ノ謂也
青衿ハ乃生員ノ稱也
葛屨霜ヲ履ムハ儉嗇ノ過チ甚シキヲ
謂フ也
緑衣黄裏ハ貴賤ノ倫ヲ失スルヲ譏ル
ナリ
上服ヲ衣ト曰ヒ
下服ヲ裳ト曰フ
衣ノ前ヲ襟ト曰ヒ
衣ノ後ヲ裾ト曰フ

故朝必讀 衣服

此レヲ借テ以テ之ニ比
 スルノミ
 項羽既ニ関ニ入り江東
 ニ同リ人ニ謂テ曰富貴
 ニ故郷ニ歸ラザルハ
 錦衣ヲ着テ夜ル行ガ如
 晏子ハ一狐裘三十年セリ
 石崇王愷ト富ヲ争フ
 嘗テ紫紵歩障三十里ヲ
 作ル石崇錦歩障四十四
 里ヲ作ル
 齊ノ孟嘗君客ヲ愛ス四
 方多ク之ニ歸シ門下常
 ニ三千餘人アリ俱ニ珠
 玉ニ飾レル履ヲ穿ケリ
 唐相牛思黯ハ家ニ寵妾
 多カリシナリ
 蠶婦ノ詩ニ昨日到城郭
 歸來淚滿襟遍身綺羅者

敝服ヲ襤褸ト曰ヒ
 美服ヲ華裾ト曰フ
 襤褸ハ乃チ小兒ノ衣ナリ
 鞞髦ハ亦タ小兒ノ飾ナリ
 左衽ハ是夷狄ノ服
 後短ハ是武夫ノ衣
 尊卑序ヲ失フハ冠履倒置スルカ如ク
 富貴ニノ歸ラサルハ錦衣ノ夜行ノ如ク
 狐裘三十年ハ儉晏子ヲ稱シ
 錦帳四十里ハ富石崇ヲ羨ム

不是養蠶人
 鷄ハ短尾ノ鳥人衣ノ短
 窄ナルヲ比シ言フナリ
 董京隱居シ殘絮縫帛ヲ
 以テ衣ト為号ノ百結衣
 ト曰フ
 公孫公ハ三公ト為布被ヲ
 為リ儉ヲ示シ詐飾リテ
 名ヲ鉤タリ
 龐統少キ時行テ同馬徳
 操ヲ見ル操桑ヲ樹上ニ
 採リナガラ統ト談論ノ晝ヨ
 リ夜ニ達ス統南州ノ冠冕
 ト為リ 裴駿ハ河東ノ人
 崔浩深ク器トシ之ヲ目ノ
 三河ノ領袖トス
 舜十二章ヲ衣裳ニ制ス
 卽チ日月星辰山龍華蟲
 宗彝藻火粉米黼黻ナリ
 韓昭侯命ノ敝袴ヲ藏ス

孟嘗君ハ珠履三千客アリ
 牛僧儒ハ金釵十二行アリ
 千金ノ裘ハ一狐ノ腋ニアラズ
 綺羅ノ輩ハ蠶ヲ養フ人ニ非ズ
 貴者ハ裊ヲ重子襦ヲ疊ム
 貧者ハ短褐モ完タカラス
 ト子夏ハ甚タ貧シク鷄衣百結シ
 公孫弘ハ甚タ儉ニシテ布衣十年ス
 南州ノ冠冕ハ徳操龐統カ象ニ邁ルヲ
 稱シ

衣服
 八十四

曰吾聞明主ハ一頓一笑ヲ愛ムト今敬袴豈特頓笑ノミナニシヤ此レ留テ有功ノ者ヲ待ツト唐ノ文宗性節儉ナリ嘗テ袖ヲ出シ近臣ニ示シ曰ク此衣已ニ三浣セリト晋ノ文公儉ヲ示シ奢ヲ矯メ衣裘帛ヲ重キ食兼味ナシ未ダ幾ナラズ國人大ニ化シタリ桓沖新衣ヲ著テ好マズ婢新衣ヲ進ム沖怒テ將ニ婦ヲ去ラントス婦曰ク衣新ヲ經ズンバ何ニ由テ故ヲ得ント沖乃チ笑テ之ヲ服セリ韋固王氏ノ女トナル井劍ヲ以テ眉ニ傷ク長スルニ及テ卒ニ固ニ歸

三河ノ領袖ハ崔浩、裴駿ノ群ニ超テ羨ナリ、虞舜ノ衣裳ヲ製スルハ有徳ニ命スル所以ナリ、昭公カ敬袴ヲ藏スルハ有功ヲ待スル所以ナリ、唐ノ文宗ハ袖三浣ヲ經、晋ノ文公ハ衣裘ヲ重キズ、衣履敝レサレハ肯テ更タメ爲ラサルハ世堯帝ヲ稱シ

ス常ニ層階ニ花鈿ヲ貼タリ、貴妃、祿山ト私通ス、祿山ハ爪ヲ以テ妃ノ乳ヲ傷ツク帝ノ見ントテ恐レ訶子ヲ作テ之ヲ畏メリ、漢ノ王章、長安ニ學ブ疾病アリ、衣无シ牛衣、草ヲ編テ爲リ以テ牛ヲ覆フ者中ニ卧シ妻ト對メ泣、後京兆ト爲リ對簿ヲ上ル妻曰ク人當ニ足ラナク知ベシ、獨リ牛衣中涕泣ノ時ヲ念ハザルヤト、晋吳ヲ伐ツ羊枯襄陽軍ニ督タリ、枯思ヲ發テ兵人ヲ懷ク軍中嘗テ輕裘緩帶シ侍衛數十人ニ過ビ、陶淵明常ニ鶴巾ヲ以テ酒ヲ漉タリ、鄭ノ子臧宋ニ奔ル好デ

衣新ヲ經ズハ何ニ由テ故ヲ得トハ婦ノ桓沖ヲ勸ナリ、王氏カ眉花鈿ヲ貼スルハ韋固カ劍ヲ被テ刺サルナリ、貴妃ノ乳訶子ヲ服スルハ祿山カ爪ノ爲ニ傷ラルナリ、姜氏ノ翁和ナル兄弟每宵大被ヲ同シ、王章未遇セザル井夫妻寒夜牛衣ニ臥、緩帶輕裘ハ羊叔子乃斯文ノ主將ナリ、葛巾、夜服ハ陶淵明真陸地ノ神仙ナリ

故事必讀

衣服飲食

八十五

鷄毛ノ冠ヲ服ス鄭尚之ヲ
惡ミ盜ヲノ誘テ之ヲ殺
サシム君子曰ク服ノ身
ニ衷セサル身ノ災也ト
衷ハ中也其服中正ノ制
ヲ得サルヲ謂フナリ

脆ハ物ノ斷易キナリ又輕
キナリ薄キナリ醜ハ厚
酒ナリ
藜ハ野菜ナリ糗ハ米麥
ヲ熬テ為ル所ノ者大牢
ハ牛肉ナリ滋ハ旨ナリ
青州ニ齊郡アリ好酒ヲ
飲ハ直ニ腹臍ニ至ル平
原ニ高懸アリ惡酒ヲ飲
ハ直ニ腸上ニ至テ止レ
故ニ語ヲ隱メ知此云也
莊子云楚諸侯ヲ會ス魯

趙俱ニ酒ヲ獻ズ酒吏趙
ヲ怒リ魯ノ薄酒ヲ以テ
趙ノ厚酒ニ易テ之ヲ奏
ス楚王趙酒ノ薄ヲ以テ
ノ故ニ邯鄲ヲ圍メリ
薄酒ハ茅柴ノ火ノ過キ
易キガ如キナリ
茶品龍鳳團ヨリ貴キハ
ナシ蜀州晋原洞口ニ黃
葉雀舌鳥咀麥顆アリ益
シ其嫩芽ヲ取ル茶ノ最
上ナル者
醴酒云々解實主部ニ出
脱粟ハ穀ヲ去ノ米而メ
未ダ舂カザル者
香醪ハ芳烈ナル美酒也
晋ノ劉伶飲太夕過グ妻
泣テ之ヲ諫ム伶曰善シ
當ニ神ニ祝メ誓斷スミ
シ酒肉ヲ具セト妻之レニ

故事必讀

然ト雖カ氏服ノ衷ハサルハ身ノ災ナリ
縕ハ袍ヲモ恥ザルハ志シ獨リ超ユル歟

飲食

釋名云飲ハ奄ナリ口ヲ以テ奄ホヒ引テ之ヲ咽ナリ
食ハ殖ナリ自カラ生殖スル所以ナリト

甘脆肥醲ハ命ノ腐腸ノ藥ト曰ヒ

羹藜含糗ハ大牢ノ滋ヲ語リ難シ

御食ヲ珍饈ト曰ヒ

白米ヲ玉粒ト曰フハ章固ハ險

好酒ヲ青州ノ從事ト曰ヒ

次酒ヲ平原ノ督郵ト曰フハ

魯酒茅柴ハ皆ナ薄酒ト爲

龍團雀舌ハ盡是香茗ナリ

人ヲ待シテ礼衰フルヲ醴酒設ケスト

曰ヒ母東ハ亦ハ亦ハ

客ヲ款スル甚夕薄キヲ脱粟相留ムト

曰フ莫ハ亦ハ亦ハ

竹葉青狀元紅ハ俱ニ美酒タリ

葡萄綠珍珠紅ハ悉是香醪ナリ

五斗醒ヲ解クハ劉伶ノ獨リ酒ニ溺ル

ナリ

故事必讀

飲食

從フ伶跪キ祝メ曰天劉
 伶ヲ生シ酒ヲ以テ名ヲ為
 ス一飲一石五斗醒ヲ解
 ス婦人ノ言慎テ聽マカ
 ラズト酒ヲ引キ肉ヲ御シ
 陶然トシ復醉タリ
 唐全ノ茶歌云七碗吃不
 得也但覺兩腋習々清風
 生 茶酪漿ノ與メニ奴ト
 為シ杜牧山茶ノ詩閩寔
 東南秀茶稱瑞草舞
 米ノ正ニシ白キ者ヲ擇
 祭祀ニ供ス名ヲ白
 粲ト曰フ
 太羹ハ菜羹ナリ玄酒ハ
 水酒ナリ馨ヲ薦ルハ神
 ヲ祀ルヲ言フ
 飯中ニ塵アリ羹中ニ泥
 アルハ飢テモ食ハレズ
 トナリ

兩腋風ヲ生スルハ盧全カ偏ニ茶ヲ嗜
 ナリ
 茶ヲ酪奴ト曰ヒ又瑞草ト曰フ
 米ヲ白粲ト曰ヒ又長腰ト曰フ
 太羹玄酒ハ亦タ馨ヲ薦ム可ク
 塵飯塗羹ハ焉ノ能ク饑ニ充
 酒ハ杜康カ造ル所口ニ係リ
 腐ハ乃淮南ノ為ル所口ナリ
 僧侶魚ヲ謂テ水梭花ト曰ヒ
 釋徒雞ヲ謂テ穿籬菜ト曰フ

淮南王安始テ豆ヲ磨リ
 乳脂ヲ為ル名ケテ豆腐
 ト曰フ
 僧家語ヲ隱ノ清規ヲ犯
 ス人ノ義ヲ為スアリ而
 ノ之ヲ文ルニ美名ヲ以
 テス何ゾ此ト異ナラン
 田家歲時伏臘烹羊魚
 羊斗酒自勞酒後耳熱
 仰天拊缶而歌
 齊大ニ飢ニ黥赦食ヲ路
 ニ為テ飢者ヲ待ツ一人
 アリ賀々然トノ來ル教
 左ニ食ヲ奉ダ右ニ飲ヲ
 執テ曰差來リ食セヨト
 目ヲ揚之レヲ視テ曰予
 唯差來ノ食ヲ食ハズ以テ
 斯ニ至ル也ト終ニ食ハ
 ズ死セリ
 縉雲氏不才子アリ飲食

淵臨テ魚ヲ羨ム退テ網ヲ結フニ
 如カス
 湯ヲ揚テ沸ヲ止ハ火ヲ去リ薪ヲ抽ニ
 如カス
 美酒自カラ勞スルハ田家ノ樂ミナリ
 哺ヲ含ミ腹ヲ鼓スルハ穢世ノ風ナリ
 人ノ食ヲ貪ホルヲ徒ニ哺啜スト曰ヒ
 食シムルニ敬セザルヲ差來ノ食ト曰フ
 多ク食フテ厭ハザル之ヲ饕餮ノ徒ト
 謂ヒ

故事必讀
 飲食

往テ盗ミ飲ミ因テ醉テ
 甕邊ニ卧ス隣人旦ニ之
 フ視レバ畢吏部ナリ
 越王ノ陣ニ一輩膠ヲ饋
 ル者アリ之ヲ河ニ投シ
 將士ヲ流フ迎テ之ヲ
 飲シム夫輩膠ハ一河水
 ニ味スル能ハサルモ三
 軍之カ為ニ死ヲ思フハ
 滋味ノ及テ所ニアラズ
 晋ノ孫子荆王武子ニ謂
 テ曰當ニ流ニ枕シ石ニ
 漱ッベシト王曰石ハ漱マ
 キニ非ズ流ハ枕スマキ
 ニ非ズト孫曰流ニ枕ス
 ルハ其耳ヲ清サント欲
 ス石ニ漱グハ其齒ヲ砥
 ント欲スルナリト
 宋ノ范希文未ダ第セサ
 ル時家最モ貧シ学ヲ長

君側ノ元臣ハ酒醴ヲ作ル麴蘖ノ若ク
 朝中ノ冢宰ハ和羹ヲ作ル鹽梅ノ如シ
 肉ヲ宰テ甚タ均シキハ陳平父老ニ重
 ンセララル
 羹ヲ夏ノ盡テ示スハ丘嫂心漢高ヲ
 厭フナリ
 畢卓吏部ト爲テ而ノ酒ヲ盜ムハ逸興
 大豪ナリ
 越王士卒ヲ愛シテ而ノ膠ヲ投テ戰氣
 百倍セリ

白山ノ僧舎ニ務ム粟ニ
 升ヲ煮粥ヲ一器ニ作ル
 宿ヲ途遠ニ疑ル刀ヲ以テ
 畫シ四塊ト為早晚二塊
 フ取り纏數十莖ヲ断テ
 之ヲ啗ヘリ

羹ニ傷テ羹ヲ吹クハ人ノ前ニ懲テ後ヲ
 警シムヲ謂ヒ
 酒囊飯袋ハ人ノ學少ウシテ多ク餐ス
 ルヲ謂フナリ
 隱逸ノ士ハ石ニ漱キ流ニ枕ラシ
 沉湎ノ夫ハ糟ヲ藉キ麴ヲ枕ニス
 昏庸ノ桀紂ハ胡ソ酒ハ池肉ハ林ヲ為
 ルヤ
 苦學ノ仲淹ハ准テ羹ヲ断テ粥ニ畫
 アリ

故事必讀
 飲食珍寶
 八十九

珍寶

玉篇ニ珍ハ貴ナリ美ナリ重ナリトアリ
廣韻ニ寶ハ珍ナリ瑞ナリ符ナリトアリ

山川ノ精英ハ毎ニ洩テ至寶ト為リ

乾坤ノ瑞氣ハ恒ニ結デ奇珍ト為ル

玉ハ以テ嘉穀ヲ庇ニ足リ

珠ハ以テ火災ヲ禦グベシ

魚目、豈ニ珠ニ混スベケンヤ

砥礪馬シソ能ク玉ヲ亂ラン

黄金ハ麗水ニ生シ

白銀ハ朱提ヨリ出

玉孫聞曰玉ハ以テ嘉穀ヲ庇ニ足ル便チ水旱ノ災ナシト
砥礪ハ石ノ玉ニ似タル者
朱提ハ山ノ名ナリ
晋ノ魯褒錢神論ヲ著ス其略曰之ヲ親ム兄ノ如ク字ノ孔方ト曰フ之ヲ失バ則貧弱之ヲ得レハ則チ富昌翼元ウノ飛足无ウノ走リ嚴毅ノ顔ヲ解キ発シ難キノ口ヲ開ク錢多キ者ハ前ニ處リ少キ者ハ後ニ居ル錢ノ祐ル所吉ニ利ナラザ

孔方ト曰家兄ト曰ハ俱ニ錢ノ號タリ

青蚨ト曰鵝眼ト曰モ亦是錢ノ名ナリ

貴フ可キ者ハ明月、夜光ノ珠

珍トス可キ者ハ璠璵、琬琰、玉而、美哉

宋人ハ燕石ヲ以テ玉トシ緹巾ノ中ニ

什襲シテ潮スハ東流登々ハ

楚王ハ璞玉ヲ以テ石トシ卞和カ足ヲ

兩刖ス

惠王ノ珠ハ光リ能ク乗ヲ照シ

和氏ハ璧ハ價ヒ连城ヲ重ンス

ル无シ何ゾ必ズシモ書ヲ讀テ然ル後ニ富貴ナラン云々ト
青蚨一名蠓蠓形蟬ノ如シ其子ヲ得レバ母飛ビ來ル其母子ノ血ヲ取リ錢ニ塗リ毎ニ物ヲ市フニ先ヅ母錢ヲ用ヒ或ハ子錢ヲ用ルニ互ヒニ復タ飛ビ來リ輪環ノ已ムヲ无シト云
璠璵ハ魯ノ宝玉ナリ琬琰モ玉ナリ宋ノ愚人燕石ヲ得藏シ以テ至宝ト為周客聞テ往觀ル主人齎スル七日ニ出ス華蓋十重綬巾什襲ス客見テ口ヲ掩ヒ胡盧ノ笑ヲ宋人怒テ之ヲ藏スル愈固ナリ

楚ノ下扣玉璞ヲ得テ楚ノ武王ニ獻ス玉人石ナリト曰フ其一足ヲ削セラル後楚ノ文王ニ獻ス又一足ヲ削セラル和玉ヲ抱テ哭ス玉人ヲシテ璞ヲ剖シムルニ果ノ美玉ヲ得タリ

魏ノ惠王曰寡人徑寸ノ珠アリ車前各十二乗ヲ照ス者十枚ト齊王曰吾四臣アリ將ニ千里ヲ照サントスト

斂人水ニ居ル出テ人聞ニ萬シ縞ヲ賣テ將ニ去ントシ而ノ泣テ珠ヲ成盤ニ滿テ以テ主人ニ謝セリ

漢ノ申公年八十武帝使ヲ使シ束帛璧ヲ加ヘ安

斂人ハ泣淚珠ヲ成シ

宋人ハ玉ヲ削猪ト為

賢ハ乃チ國家ノ寶

儒ハ席上ノ珍タリ

王者賢ヲ聘スル束帛璧ヲ加ヘ

真儒道ヲ抱テ瑾ヲ懷瑜ヲ握ル

雍伯緣多ク玉ヲ藍田ニ種テ而ノ美婦ヲ得

太公ハ奇遇璜ヲ渭水ニ釣テ而ノ文王ニ遇

古事必讀

車蒲輪駟ニ駕シ之ヲ迎

半璧ヲ璜ト曰フ呂尚磻溪ニ釣シ玉璜ヲ得タリ

刻ノ曰ク姫受命呂佐之ト後果ノ文王ニ遇ヘリ

唐ノ太宗曰ク西域ノ胡賈美珠ヲ得レバ腹ヲ割テ之ヲ藏ム珠ヲ愛シ其身ヲ愛セザルナリト

杜ガ美人ニ贈ル詩ニ曰ク笑時花滿眼舞罷錦纏頭

昔合浦ニ珠ヲ出ス前郡守貧汚珠皆徙リ去ル孟嘗郡守ト為テ廉潔ナリ去珠皆復シ還ル

漢武元鼎元年樞靈之閣ヲ起ス二神女アリ玉燕斂ヲ留テ帝ニ與フ帝以

服ヲ割テ珠ヲ藏スハ財ヲ愛ンデ命ヲ愛マサルナリ

頭ニ纏フニ錦ヲ用テ舞ヲ助ケ而ノ更ニ嬌ヲ助ナリ

孟嘗廉潔ニメ克ク合浦ヲシテ珠ヲ還サシメ

相如勇忠器ノ能ク秦廷ヲシテ璧ヲ歸ラシム

玉斂燕ト作テ飛ハ漢宮ノ異事ナリ

金錢蝶舞ヲ成スハ唐庫ノ奇傳ナリ

故事必讀

趣婕妤ニ賜フ昭帝ノ時
 二至マテ宮人猶此叙ヲ
 見ル共ニ謀テ之ヲ碎カン
 ト欲シ明日庫ヲ視ル
 二惟白燕ノ直チニ天
 二升ルヲ見ル後宮人皆
 玉釵ヲ以テ玉燕ト名レ
 唐ノ穆宗ノ時禁中花開
 キ群蝶舞ヒ遠ル上綱ヲ
 擧テ之ヲ張シメ數万ヲ
 得之ヲ視ルニ乃チ庫中
 ノ金錢ナリシ
 張延賞度支ノ寇獄ヲ決
 セント欲ス明日粘子ア
 リ云ク錢十萬貫ヒテ此
 獄ヲ問フコ勿レト因テ
 曰ク錢十萬貫ニ至レバ
 神通スバシ歐スベカラ
 ザルノ事无シ吾禍ノ及
 ハンヲ思ル止ザルヲ得

錢ヲ廣メテ固ニ以テ神ニ通ス可ク
 利ヲ營ミテ乃チ鬼ノ為メ笑ハル
 小ヲ以テ大ヲ致スハ之ヲ磚ヲ抛テ玉
 ヲ引クト謂ヒ
 貴ヲ所ヲ知サルヲ之レヲ擯ヲ買テ珠
 ヲ還スト謂フ
 賢否害ニ罹ルハ玉石俱ニ焚ガ如ク
 貪吝厭フ無
 錙銖ト雖氏必ス算ス更
 崔烈ハ錢ヲ以テ宦ヲ買ヒ人皆其銅臭
 ヲ惡ミ

バト 龍伯高將ニ什一ノ
 利ヲ營マント欲ス一鬼
 旁ニアリ掌ヲ扼シ大笑
 ス龍嘆ノ曰ク貧窮固ヨ
 リ命アリ今日鬼ノ為ニ
 笑ハルト
 楚人珠ヲ賣ルニ玉蘭ノ
 櫃ヲ為リ綴ルニ珠玉ヲ
 以テス鄭人只積ノ羨ヲ
 知テ珠ノ貴ヲ知ラズ其
 擯ヲ買テ其珠ヲ還セリ
 書ニ火昆岡ヲ炎玉石俱
 ニ焚
 八兩ヲ錙ト曰ヒ十釐ヲ
 錙ト曰フ
 後漢ノ桓帝官ヲ賣ル崔
 烈錢五百万ヲ用テ官ヲ
 買ヒ三公タルヲ得其子
 曰大人素英聲アリ人特
 其銅臭ヲ嫌フト

秦嫂敢テ叔ヲ視ズノ自カラ其金多ヲ
 畏ト言
 熊羆父亡ノ天乃チ錢ヲ兩ラシテ葬ヲ
 助ケ
 仲濡家窘ノ天乃チ金ヲ兩ラシテ貧ヲ
 濟フ
 漢ノ揚震ハ四知ヲ畏レテ而ノ金ヲ辭
 唐ノ太宗ハ貪ヲ懲スニ因而ノ絹ヲ賜
 晉ノ魯褒錢神論ヲ作り嘗テ錢ヲ以テ
 孔方兄ト爲シ

反車必積珍寶
 九十二

蘇秦ノ昆弟ノ妻嫂目ヲ
 側テ敢テ仰キ視ズ俯伏
 侍ノ食ヲ取ル蘇秦笑テ
 其嫂ニ謂テ曰ク何ゾ前
 ニ倨テ後ニ恭ナルヤト
 嫂委蛇蒲服ノ面ヲ以テ
 地ニ掩ヒ謝ノ曰ク季子位
 高シ金多キヲ見ルガ故ナ
 リト秦曾然トノ嘆ノ曰
 此一ノ身富貴ナレバ
 則テ親戚之ヲ畏思シ貧
 賤ナレバ則テ之ヲ輕易
 ス况ヤ衆人ヲヤ且我ヲ
 ノ洛陽負郭ノ田二頃ア
 ラシメバ吾豈能ク六國
 ノ相印ヲ佩シヤト是ニ
 於テ千金ヲ散ノ以テ宗
 族朋友ニ賜フ
 熊衣至孝ナリ父死ノ未
 ダ葬ラス天ニ啼テ號泣

王夷甫ハ口錢ヲ言ハスノ乃錢ヲ謂テ
 阿堵物ト為ス
 牀頭金盡クレバ壯士モ顔無ク
 囊中錢空ケレバ阮郎モ羞澀ス
 但匹夫ハ璧ヲ懷ク可カラス
 人生孰レカ財ヲ需メサラム
 揚震太守ト為リ王密ヲ舉テ昌邑ノ令ト為ス密夜ル謁見シ金十
 斤ヲ懷ニシ震ニ遺リ且曰ク暮夜人知ル元シト震曰ク天知地知
 子知我知ル己ニ是レ四知アリト卒ニ受ス
 長孫順徳人ノ婦ヲ鏡ヲ受ケ事覺ル太宗淵十數匹ヲ賜自カラ喚云
 晋ノ王衍ノ妻郭氏聚斂ヲ喜テ行テ疾ニ故ニ口未ダ嘗テ錢ヲ言ハ
 ズ妻之ヲ試シト欲シ錢ヲ以テ牀ヲ遠シ行ヲ得サラシム衍早起錢ヲ
 見婢ニ謂テ曰ク此ノ阿堵ノ物ヲ舉ゲ去レト
 古詩牀頭黃金盡壯士无顔色阮孚清貧嘗テ曰囊空恐羞澀留得

セシニ天一曰錢ヲ兩ス
 十萬以テ其弊幸ヲ終

上古ハ書契无シ大事ニ
 ハ大繩ヲ結ビ小事ニハ
 小繩ヲ結ベリ後蒼頡字
 ヲ制シ之ニ代タリ
 伏羲ノ時龍馬太極圖ヲ
 負テ河中ニ出ヅ伏羲之
 ニ象リ八卦ヲ畫セリ
 大禹ノ時神龜書ヲ負テ
 洛水ニ出ヅ其數九ヲ戴
 キ一ヲ履禹之ニ象リ九
 疇ヲ列ス
 太昊始メ甲子曆アリ黃
 帝容成ニ命ノ曆ヲ作リ
 天命ヲ司トル
 古民花木ノ開謝ヲ視テ
 春秋ト爲大撓斗綱ヲ占

一錢者レ虞公虞叔之玉ヲ求ム叔獻セズ後悔テ曰匹夫罪トシ璧ヲ擲
 ク其罪ナリ吾レ焉ガ此ヲ用ヒ以テ禍ヒヲ買シヤト復タ之ヲ獻ズ
 制作 制ハ字書ニ載ナリ造ナリトアリテ物ヲ作り出ス
 一ナリ作ハ興起ナリトアリ事ヲオコシタツルノ義ナリ
 上古ハ繩ヲ結ビテ事ヲ記ス
 蒼頡字ヲ制シテ繩ニ代タリ
 龍馬圖ヲ負フ伏羲因テ八卦ヲ畫シ
 洛龜瑞ヲ呈ス大禹因テ九疇ヲ列ス
 曆日ハ是レ容成カ爲ル所
 甲子ハ乃チ大撓カ作ル所
 算數ハ隸首ヨリ作
 律呂ハ伶倫ヨリ造

九十三

故輔必讀

ノ建ル所始ラ天干地交
ヲ定テ甲子ヲ造成セリ
十二律ハ黄帝ノ作リシ
所ナリ
甲ハ鑑ナリ器ハ首鑑ナ
リ黄帝蚩尤ヲ伐ツ女
帝ニ請テ甲冑ヲ造リ以
テ身ヲ防ケリ
舟ハ黄帝木ヲ剡テ舟ト
為木ヲ剡テ楫ト為通セ
ザルヲ濟シ以テ天下ヲ利
セリ
車ノ蓋ノ圓キハ天ニ象
リ輻ノ方ナルハ地ニ象
リ人其中ニアリ三才ニ
象トル黄帝始テ作ルニ
蓬轉ヲ觀テ輪ヲ為ル少
昊ノ時牛ニ駕シ禹ノ時
奚仲復タ易ルニ馬ヲ以
テセリ

甲冑舟車ハ軒轅ノ創始ニ係リ
權量衡度モ亦軒轅ノ立規ナリ
伏羲氏網罟ヲ造テ佃漁ヲ教ヘ以テ民
用ヲ贍シ
唐太宗冊籍ヲ造リ里甲ニ編メ以テ田
糧ヲ稅ス
貿易ヲ興シ耜耜ヲ製スルハ皆炎帝ニ
由リ
琴瑟ヲ造リ嫁娶ヲ教フルハ乃是伏羲ナ
リ

權ハ秤、鑑ナリ衡ハ幹
ナリ 量ハ斗斛ナリ
度ハ丈尺ナリ 共ニ皆黃
帝ヨリ始レリ
伏羲氏蜘蛛ヲ觀テ網罟
ヲ結ビ以テ鳥獸魚鼈ヲ
張ル後世網罟ヲ以テ漁獵
ヲ為ス者此ヨリ始レリ
神農氏氏ヲノ日中ニ市
ヲ為シ而シテ賈易ヲ知シ
ム 上古未ダ稼穡ヲ知
ズ神農氏始テ木ヲ鋸テ
耜ヲ為リ木ヲ楸テ耒ト
為此ヲ制シ以テ天下ヲ
利シタリ
伏羲琴ヲ作リ以テ身ヲ
修メ性ヲ理ス 樂五絃
ヲ彈シ南風ノ詩ヲ歌ヒ
而シテ天下ヲ治ル 後文武
ニ至テ二絃ヲ加ヘタリ

冠冕衣裳ハ黄帝ニ至テ而シテ始テ備
桑麻蠶績ハ元妃ヨリメ而シテ始テ興
神農ハ百草ヲ嘗メテ醫藥方アリ
后稷ハ百穀ヲ播テ粒食賴トアリ
燧人氏ハ木ヲ鑽テ火ヲ取リ烹飪初テ
興リ
有巢氏ハ木ヲ構ヘ巢ヲ為テ宮室始メテ
創ル
夏ノ禹王神祇ニ通セント欲メ因テ鑪
鐘ヲ郊廟ニ鑄

蓋シ琴ハ禁ナリ邪私ヲ禁止スル所以ナリ
 琴モ亦伏羲ノ制スル所元ト其絃五十黃帝ノ時半減ノ二十五絃トス蓋シ瑟ハ爾ナリ怒ヲ懲シ欲ヲ窒ギ人ノ徳ヲ正ス所以ナリ
 古氏野合母アルヲ知其父ヲ知ス帝始テ麗皮ヲ以テ礼ト為シ以テ嫁娶ヲ定メタリ
 上古穴居野處毛ヲ衣而ノ皮ヲ帽トス後世聖人鳥獸ニ冠冕アルヲ見遂ニ冠冕ヲ作リ以テ之ニ易ハ黃帝ノ時布ヲ以テ之ヲ為ル今人紬羅緞匹ヲ以テ之ヲ為ル
 黃帝ノ元妃西陵氏始テ

漢ノ明帝、佛教ヲ尊崇ノ始メテ寺觀ヲ中朝ニ立タリ
 周公指南車ヲ作シ羅盤是レ其遺制ナリ
 錢樂、渾天儀ヲ作シ曆家始メテ宗トスル所
 育王、疾ヲ得テ因テ無量寶塔ヲ造リ
 秦政、ハ胡ヲ防ニ特ニ萬里長城ヲ築
 叔孫通、ハ朝儀ヲ制立シ
 魏曹丕、ハ官品ヲ秩序ス
 周公獨リ禮樂ヲ制シ
 蕭何、ハ造テ律條ヲ立

梨ヲ採リ以テ蠶ヲ養フ後世皇妃ノ先蠶ヲ祭ルハ西陵氏ヲ祭ルナリ
 神農氏遍チ草木ヲ食ヒ以テ寒溫平熱ノ性ヲ察シ君臣佐使ノ義ヲ辨シ方書ヲ立テ百病ヲ療ス後世始テ草木ノ性ヲ知り而メ醫藥アリ
 后稷氏ニ稼穡ヲ教ヘ五穀ヲ樹執セシム
 上古ハ毛ヲ茹ヒ血ヲ飲人皆未ダ食ヲ熟スルヲ知ラズ後燧人氏星辰ヲ觀下五木ヲ察シ乃チ木ヲ鑽テ火ヲ取リ人ニ教テ生ヲ炮テ熟ト為腹疾无カラシメタリ
 上古ハ穴居野處ス有巢氏ニ至ルニ迨ビ木ヲ構

堯帝、圍碁ヲ作テ以テ丹朱ニ教ヘ
 武王、象棋ヲ作テ以テ戰鬥ニ象ル
 文章士ヲ取ルハ趙宗ヨリ興リ
 應制詩ヲ以テスル李唐ニ起リ
 梨園ノ子弟ハ乃唐ノ明皇始テ作シ
 資治通鑑ハ是司馬光ノ編ム所ナリ
 筆ハ乃蒙恬カ造ル所
 紙ハ乃蔡倫カ爲ル所
 凡、今人ノ利用ハ皆古聖民ニ前ルナリ

周ノ時越裳氏來貢ノ歸ルニ其路ヲ忘ル周公之ニ指南車ヲ興フ此ノ車ハ木馬人アリ手ヲ舉テ南ヲ指ス其國南ニ在ル故之ニ從テ歸路ヲ知セシメ

故事必讀

ハテ巢ヲ為ル
鑪ハ大鐘
漢ノ明帝ノ時蔡愔等ヲ
天竺ニ往シメ佛道ヲ求
メ其書及ビ沙門ヲ得セ
シム是ヨリ化中國ニ流
ル後テ西域ノ僧白馬ヲ
以テ經ヲ馱シ來リ朝シ
初ノ鴻臚寺ニ止ム遂ニ
僧居ヲ以テ寺トス
道居ヲ名ケテ觀ト曰ハ
其高クノ觀望スベキヲ
以テ言フナリ

渾天儀ハ運轉スベキ者日月五星ヲ其上ニ載ス曆家此憑
リ以テ經度次舍ヲ算スルナリ
始皇方士盧生ニ問テ曰ク朕ガ後世ノ興廢如何ト盧生
曰ク秦ヲ亡ス者ハ胡ナラント始皇已ノ子ノ胡亥ナルヲ悟ラス
秦ヲ亡ス者ハ胡ナリト為万里長城ヲ築テ之ヲ防タリ
叔孫通漢高ニ説テ魯ノ諸生弟子等ト共ニ朝儀礼典ヲ定ム
團恭ハ堯ノ子丹朱不肖ナリ因テ帝之ヲ作テ教ヘタリトゾ
象戲ハ周ノ武王ノ造ル所ナリト又曰ク戰國ノ時ノ人ノ造ル所ト
宋ノ仁宗天下ニ詔シ學ヲ立テ三場ノ科擧新法ヲ定メタリ
司馬光資治通鑑ヲ編ス神宗曰ク前代未ダ此書アラズト
秦ノ蒙恬中山ノ免豪ヲ取テ始テ筆ヲ製シ
尚方ノ人蔡倫魚網做麻ヲ搗キ紙ヲ作ル人蔡侯紙ト謂フ

剛修標註故事必讀卷中終

標註剛修故事必讀卷下

明丘濬 著

市川清流 解

文事

解文臣之
題下ニ出

多才ノ士ハ才ハ斗ヲ儲ハ

博學ノ儒ハ學五車ニ富メリ

三墳五典ハ乃チ三皇五帝ノ書ナリ

八索九丘ハ是レ八澤九丘ノ誌ナリ

書經ハ上古唐虞三代ノ事ヲ載ス故ニ

故事必讀 文事

謝靈運曰ク天下ノ才共
ニ一石子建獨リハ斗ヲ
得予ト衆人ト共ニ二斗
ヲ得タリト
古詩要通云今古ノ事須
ク五車ノ書ヲ讀ムベシ
墳ハ穴ナリ山墳ハ君臣
名物陰陽兵象ヲ言フ氣
墳ハ歸藏生動長育生殺
ヲ言フ形墳ハ天地日月

一
二
三

六〇 五〇 四〇

山川雲氣ヲ言ノ即チ伏羲神農黃帝ノ書ナリ八卦ノ説之ヲ八索ト謂フ索ハ求ナリ丘ハ集ナリ九州アル所皆此書ニ聚ルヲ言フナリ哀公十四年西ノ狩ニ麟ヲ獲鉏商ト云者之レヲ不祥トシ其左足ヲ折ル仲尼曰ク麟ナリ時ニ明主ナシ出テ傷ハル周道ノ興ラザル嘉瑞ノ應无キニ感ノ涕泣襟ヲ沾ホス時春秋ヲ修ノ以テ王法ヲ寓ス因テ筆ヲ獲麟ノ句ニ絶タリ(近來博物新編ニ載ル所亞非利加ノ内地ニ産スル長頸鹿ハ即チ麟ナリト云フ)華衮ハ君上ノ服ナリ褒

尚書ト曰ヒ 易經ハ乃姫周文王周公ノ繫ル所故ニ 周易ト曰フ 二戴曾テ禮記ヲ刪ル故ニ戴禮ト曰ヒ 二毛曾テ詩經ヲ註ス故ニ毛詩ト曰フ 孔子春秋ヲ作り麟ヲ獲ルニ因テ 而ノ筆ヲ絶故ニ麟經ト曰フナリ 華衮ヨリ榮ナルハ乃チ春秋一字ノ褒 ナリ 斧鉞ヨリ嚴ナルハ乃チ春秋一字ノ貶

七〇 八〇 九〇 十〇

美ナリ 斧鉞ハ兵器罪アルヲ刑スル者ナリ貶 疥ナリ 古ハ字ヲ寫ス黃檗ヲ以テ紙ヲ深メ以テ意ヲ避ク故ニ之ヲ黃卷ト曰フ 誤字アレハ雖黃ヲ以テ之ヲ滅ス故ニ文章ヲ可 活スルヲ雌黃スト謂フ 漢ノ使者蘇武ヲ胡ニ求ム曰ク天子上林中ニ射テ雁ヲ得ルニ足ニ帛書ヲ繫ルアリ曰ク武大澤中ニ在リト因テ書信ヲ 雁帛ト曰フ 李白ノ弟曰我兄心肝五臟皆ナ錦繡カ然ラサレバ何ガ口ヲ開ケバ文ヲ成スト 揚子曰彫蟲篆刻壯夫ハ

ナリ 縑緗黃卷ハ總テ經書ヲ謂ヒ 鴈帛鸞箋ハ通ノ簡札ヲ稱ス 錦心綉口ハ李太白カ文章 鐵畫銀鈎ハ王羲之ノ字法 彫蟲ノ小技ハ自カラ文學ノ卑シキヲ 謙スルナリ 馬ニ倚テ待ヘシトハ人ノ文ヲ作速ナ ルヲ羨ナリ 人ノ近來徳ニ進ヲ稱ノ士別テ三日當

故事必讀 文事 九十七

十一〇

十一

十一〇

十一〇

為サズト
李白カ書ニ曰ク請フ万
言ヲ試シ馬ニ侍テ待ツ
ベシト
呂蒙初メ不學ニシテ後ニ
學ブ魯肅見テ大ニ驚テ
曰ク復タ吳下ノ阿蒙ニ
非ズト蒙ガ曰ク士別レ
テ三日ナレバ當ニ目ヲ
刮テ相待ツベシト
達磨祖師少林寺ニ至リ
面壁九年始テ悟リ成佛
セリ
韓浦其弟洎ト皆文辞ア
リ洎人ニ語テ曰ク予ガ
兄ノ文ヲ為ル繩樞草舍
ノ如シ聊カ風雨ヲ避ル
ノミ予ガ文ヲ為ル是
五鳳樓ヲ造ルノ手ナリ
ト浦人ニ因テ洎ニ蜀漢

故事必讀

ニ目ヲ刮テ相看ベシト曰ヒ
人ノ學業精通スルヲ羨ムニハ面壁九
年始テ此ノ神悟アリト曰フ
五鳳樓ノ手ハ文字ノ高奇ナルヲ稱シ
七歩ノ奇文ハ天才ノ敏捷ナルヲ羨ム
才ノ高キヲ譽ルヲ今ノ班馬ト曰ヒ
詩ノ工ヲ羨ニ元白ヲ壓倒スト曰フ
漢ノ晁錯智多クノ景帝號メ知囊ト為
王仁裕詩多クシテ時人號メ詩窖ト為
騷客ハ即是レ詩人

十一〇

十一〇

十一〇

十一〇

ヲ寄セ詩ヲ題ノ曰ク十様
鸞箋出益州新來寄自
浣溪頭老兄得此全无
用助汝添修五鳳樓ト
洎大ニ慚タリ
班ハ班固ナリ漢書ヲ修
ス馬ハ司馬遷ナリ史
記ヲ作ル
元ハ元稹白ハ白居易ニ
人共ニ詩名最モ著ル一
日揚嗣復犬ニ宴シ元白
汝士等ト各酒ヲ飲詩ヲ
賦ス惟汝士ノ詩最モ佳
ナリ汝士歸テ其弟ニ謂
テ曰ク我今日元白ヲ壓倒
セリト
漢ノ晁錯文學ヲ以テ太
常卿ト為ル人智囊ト号
ス
王仁裕詩万餘首ヲ著ハ

譽髦ハ乃美士ヲ稱ス
古ヘヨリ詩人ハ李杜ヲ稱シ
今ニ至マテ字ハ鍾王ヲ仰グ
白雲陽春ハ是レ和シ難ク賡ギ難キノ
韻ナリ
青錢萬選ハ乃チ屢々試ミ屢々中ルノ
文ナリ
神ヲ驚シ鬼ヲ泣スハ皆辭賦ノ豪雄ナ
ルヲ言
雲ヲ過メ梁ヲ遶ハ原是レ歌音ノ嘹唳

故事必讀

文事

九十八

ス人詩響子ト号ス
 響ハ名ナリ髦ハ俊ナリ
 斯士皆譽レテ天下ニ著
 ハシ而メ其俊又ノ美ヲ
 成スナリ
 客郢中ニ歌フ者アリ始
 メ下里巴人(曲名)ヲ為ス
 國中和スル者数千人向
 陽薤露(曲名)ヲ為ス和ス
 ル者数百人陽春白雪(曲
 名)ヲ為ス和スル者数十人
 其曲弥高ウノ其和スル者
 弥寡シ
 唐ノ張鷟少ウノ制學ヲ
 以テ甲第ニ登ル人其文
 辞ヲ称シ猶青銅錢ヲ選
 万中ノゴトシト時ニ青
 錢學士ト号ス青銅ハ貴
 ブバシ故ヲ以テ選ニ中
 杜詩ニ落筆驚風雨詩成

故事必讀

ナルナリ

涉獵精カラザルハ是多學ノ蔽ナリ

呻吟咕嗶ハ皆ナ書ヲ讀ムノ聲ナリ

連篇累牘ハ總テ多文ナルヲ謂ヒ

寸楮尺素ハ乃簡札ヲ稱スルナリ

物ヲ以テ文ヲ求ムル之ヲ潤筆ノ資ト

謂ヒ潤筆ハ長ク味ヲ難ク費ナシ

文ニ因テ錢ヲ得ルヲ乃チ舊古ノカト

曰フ

文章ノ全美ナルニ文點ヲ加ヘバト曰

泣鬼神 秦青節ヲ抚メ
 悲歌スレハ聲林木ニ振
 ヒ響行雲ヲ過メタリ
 曹娥歌ヒ罷テ三日ノ後
 梁湖尚ホ韻ヲ餘セリ
 涉ハ水ヲ度ルナリ獵ハ
 獸ヲ捕促スルナリ遍子
 ク書ヲ看ル山ニ登リ水
 ヲ涉リ獸ヲ獵テ到ラザ
 ル所无キガ若キモ但精
 詳ナラサレバ真儒ト為
 ラレズトナリ
 伊吾ハ書聲ナリ夷那阿
 ノ類聰慧ナラザル者ノ
 口訥メ唇ヲ讀ム故ニ此
 聲アリ咕嗶ハ文義ヲ曉
 ラズ但吟誦スルヲ謂フ
 隋ノ李諤上書メ曰連篇
 累牘月露ノ形ニ出ズ積
 案盈箱盡ク是レ風雲ノ

文章ノ奇異ナルヲ一家ヲ機杼スト曰

應試文無キ之レヲ白ヲ曳クト謂ヒ

書成テ梓ニ綉ス之ヲ青ヲ殺ト謂フ

襪線ノ才ハ自カラ才ノ短キヲ謙スル

ナリ

記問ノ學ハ自カラ學ノ膚キヲ愧ヅル

ナリ

詩ヲ裁スルニ敲推ト曰ヒ

ナリ

故事必讀

文事

九十九

狀ノ三ト
 隋ノ鄭譯、爵國侯ヲ拜ス
 高穎之ニ戯テ曰ク、筆乾
 ケリヤ答テ曰ク、出テ方
 岳ト為リ策ヲ扶テ言ニ
 歸ル一文ヲ得ズ何ヲ以
 テカ筆ヲ潤サンヤト
 後漢ノ桓榮、明帝ノ時、師
 縛ト為ル帝ノ賜ヲ所ノ
 車馬等ノ物甚ダ多シ榮
 庭下ニ棘シ以テ諸生ニ
 示シ曰ク、稽古ノ力也ト
 李白翰林ト作ル詔ノ白
 蓮花ノ序及ビ宮詞ヲ草
 セシム方ニ大醉ス中、贊
 臥水ヲ以テ之ニ沃シ、猶
 醒ノ筆ヲ索メテ一揮シ
 文點ヲ加ヘズ
 祖瑩文學ヲ以テ重シセ
 ラル嘗テ人ニ語テ曰ク

故事
 少請

學ヲ曠スルヲ作輟ト曰フ

文章ノ浮薄ナルハ何ソ月露風雲ニ殊

ナラム

典籍ヲ儲藏スルハ皆ナ蘭臺石室ニ在

リトス

秦ノ始皇、無道ニメ書ヲ焚、儒ヲ坑ニシ

唐ノ太宗、文ヲ好科ヲ開テ士ヲ取レリ

花樣同シカラザルハ乃文章ノ異ナル

ヲ謂ヒ奇異ナリト曰ク

潦草責ヲ塞グハ辭語ノ精キヲ求メザ

文章自カラ機杼ヲ出ノ
 一家ノ風骨ヲ成サバ能
 ク人ト生活ヲ同ウセン
 唐ノ天寶ノ初メ六十四
 人ヲ選シ判ノ第一ニ入レ
 シニ下第ノ者ニ謝ヘラ
 ル、ニヨリ明皇親カラ
 試ルニ惟十六人稍優ル
 餘ハ並ニ下第ス時ニ曳
 白ト号セリ
 青ヲ殺スハ火ヲ以テ商
 ヲ炎リ汗ヲ出サシメ青
 ヲ取リ書ニ易ルヲ謂フ
 唐ノ韓昭祖粗文章アリ
 人曰ク韓ハ座才襪線ヲ
 折ルガ如シ一條ノ長ガ
 シト記問ノ學以テ人ノ
 師ト為ルニ足ラズ
 賈鳴京師ニ于テ途上ニ

ルナリ

邪說ヲ異端ト曰ヒ又左道ト曰フ

書ヲ讀ヲ肄業ト曰ヒ又藏修ト曰フ

文ヲ作ヲ翰ヲ染メ舐ヲ操ト曰ヒ

師ニ從ヲ經ヲ執リ難ヲ問ト曰フ

作文ヲ求ムルニ如椽筆ヲ揮ハシテ乞

フト曰ヒ

文ノ高キヲ羨ヤムニ纜カニ是レ大方

家ト曰フ

競フテ佳章ヲ尚グニ洛陽紙貴シト曰

故事
 少請
 文事

テ句ヲ得タリ曰ク鳥宿
地邊樹僧敲月下門初
ノ推字ヲ着ケント欲シ
又敲字ヲ下サレト欲シ
未ダ定マラズ手ヲ引テ
推ト敲クノ勢ヒテ作ス
時ニ韓愈京兆ノ尹ナリ
出テ行ク鳥覺エズ其行ニ
衝キ至ル左右擁ノ尹ノ
前ニ至ル鴻具ニ其實ヲ
道フ愈曰ク敲字佳ナリ
ト遂ニ與ニ與フ並ベテ
歸レリ
漢ノ高祖功臣ト符ヲ割
キ誓ヲ立鐵券丹書シ之
ヲ金匱ニシ石室ニ藏シ
唐ノ龍朔中秘書省ヲ改
テ蘭臺ト曰フ後又改テ
麟臺ト曰フ
秦相李斯諸生ノ當セテ

問難ヲ嫌ハザルヲ明鏡疲シカラスト
人ノ書架ヲ稱スルニ鄴架ト曰ヒ
人ノ學ヲ嗜ヲ稱シテ書淫ト曰ハ
白居易生レテ七月ニシテ便知ノ無ノ
一字ヲ識リ
唐ノ李賀ハ纔カニ七歳ニメ高軒過ノ
一篇ヲ作ル曰ク又古直曰ク
卷ヲ開ケハ益アルハ宋ノ太宗ノ要語

議論シ乃テ上書スルヲ
以テ儒業ヲ習フヲ許サ
ズ凡ノ書籍俱ニ之ヲ焚
キ儒生ノ禁ヲ犯ス者四
百六十四人ヲ杖坑ヲ掘
リ皆活ナガラ之ヲ埋メ
テ
文章ノ時格ニ合ハザル
者猶ホ織錦ノ花様同シ
カラサルガゴトトシ
端ハ緒ナリ異端ハ論ス
ル所ノ緒正道ト同シカ
ラザルナリ
左道ハ正道ト違ヒ逆フ
ヲ言フ藏修ハ潛處ノ以
テ自カラ修ムルヲ言フ
經ヲ執テ難ヲ問ヒ經ヲ
離レテ志ヲ辨ズ
莊子云吾長ク大方ノ家
ニ笑ハレン一方ハ道也

不學無術高漢ノ霍光ノ人ト為リナリ
漢ノ劉向書ヲ天祿ニ校メ太乙藜ヲ燃
シ
趙匡胤位ニ後周ニ代テ陶穀詔ヲ出
ス
江淹筆花ヲ生スト夢ミテ文思大イニ
進ミ
揚雄ハ白鳳ヲ吐ト夢ミテ詞賦愈々奇
ナリ
李守素姓氏ノ學ニ通ス世南名ケテ人

故事必讀

文事

百一

晋ノ左思三都ノ賦成ル
人競フヲ相傳寫シ洛陽
ノ紙筆之カ為ニ價ヲ増シ
タリ車轍袁羊ニ謂テ曰
ク多問セバ勞煩ヲ恐ルト
袁曰ノ明鏡ハ屢照スニ疲
レズト
唐ノ李泌鄴侯ニ封ゼル
皇甫謐貧ニノ學ヲ嗜ム
人号ノ書淫ト曰フ
白居易生レテ六月ニシ
能ク之無ノ二字ヲ識ル
李賀七歳ニシテ文ヲ能ク
適皇南溟其家ニ過ギ高
軒過テ賦セシム乃チ云
華裾織翠青如篋金環
壓響搖玲瓏
宋ノ太宗日ニ書三卷ヲ
讀ム宋琪其勞瘁アラシ
ク以テ之ヲ諫ム上曰ク

故事必讀

物誌ト為シ

虞世南古今ノ理ニ晰ナリ太宗號ノ行

秘書ト為ス

古ヲ茹ヒ今ヲ含ムハ皆學ノ博キヲ言

英ヲ咀華ヲ嚼ハ總テ文ノ新ナルヲ言

文望尊隆ナルハ韓退之太山北斗ノ若

涵養純粹ナルハ程明道良玉精金ノ如

李白ハ才高ウメ咳唾風ニ隨テ珠玉ヲ

開卷有益勞ヲ為サハ
漢ノ劉向夜ル天祿閣ニ
書ヲ校ス一老人アリ藪
藜杖ヲ持チ以テ進ム杖
頭ヲ吹火光以テ向テ照
ラス即チ太乙真人ナリ
ト云
衆將胤ヲ立テ天子ト為
胤宮ニ入ニ周王猶ホ未
ダ禪ルニ意アラズ學士
陶穀ニ詔ス之ヲ袖中ヨ
リ出ス遂ニ位ニ即タリ
江淹ハ人アリテ彩筆ノ
花ヲ生ズルヲ授クト夢
ニ是ヨリ文藻日ニ前シ
李白ハ筆花ヲ生スト夢
ミテ才思益富タリ

生シ

孫綽詞麗シク詩賦地ニ擲バ金聲ヲ

作ス

楊雄甘泉ノ賦ヲ作り既ニ成リ口中自鳳ヲ吐クヲ夢ミシト云

唐ノ李守素姓氏ノ學ニ通ス世ニ肉譜ト号ス又虞世南之ヲ

評ノ人物誌ト謂フ

唐ノ太宗外ニ薛ハ有司秘書ヲ載セ以テ從ハント請フ上曰ク

須ヒシレ虞世南ノ在ルアリ此レ行秘書ナリト

古ヲ紹ヒ今ヲ含テ端倪アル无シトハ皇甫湜ガ韓愈ノ墓誌ニ謂

フナリ英ヲ咀華ヲ嚼ムハ韓愈ノ進學解ニ云フ

程伊川明道先生ノ行状ヲ撰ノ曰フ充養道アリ純粹ナルヲ精

金ノ似ク温潤ナルヲ良玉ノ如シト

李白ノ詩安垂落九天隨風生珠玉

晋ノ孫綽天台山ノ賦ヲ作ル辭致甚ダエナリ以テ范滂期

ニ示ソ曰ク卿試ニ地ニ擲テ金聲ヲ作レト

故事必讀

文事科第

諸侯鄉射ヲ學ブ宮ヲ泮
宮ト謂フ其東西南ノ三
方ニ水アリテ形半璧ノ
如ク辟雍ニ半ス故ニ泮
宮ト曰フ詩ニ思樂泮水
薄採其芹ト即チ是ナリ
科ニ登レバ布褐ヲ釋テ
藍袍ヲ服スルヲ言フ
知ノ人ニ過ギタルヲ
ト曰フ
周制士ヲ取ル三年ニ則
大ニ其德行道統ヲ比ハ
賢能ノ者ヲ興シ礼ヲ以
テ之ヲ賓トス
宴ヲ設ケテ舉子ヲ待ス
之ヲ鹿鳴宴ト曰フ

科第

人ヲ取ル條格ヲ科第ト曰フ科ハ等ナリ其学カ
ノ等ニ因テ其次第高下ヲ定ルノ義ナリ

士人學ニ入ラ泮ニ遊ブト曰又芹ヲ采
ト曰

士人科ニ登ヲ褐ヲ釋クト曰又雋ヲ得
ト曰

賓興ハ即大比ノ年

賢書ハ即試錄ノ號

鹿鳴ノ宴ハ文榜ノ賢ヲ款スルナリ

鷹揚ノ宴ハ武科ノ士ヲ待スルナリ

文章式ニ入レバ朱衣有リテ以テ點頭

經術既ニ明ナレハ青紫ヲ取芥ヲ拾カ

其家初テ中ル之ヲ破天荒ト謂ヒ

士人超拔スル之ヲ出頭地ト謂フ

狀元ニ中ヲ獨リ鰲頭ヲ占ムト曰ヒ

解元ニ中ヲ名虎榜ニ魁多リト曰フ

瓊林宴ヲ賜フハ宋ノ太宗ノ伊レ始シ

鷹揚ハ鷹ノ飛揚ノ將ニ
擊ントスルカ如ク其猛
ヲ言フナリ共ニ詩ニ出
宋ノ歐陽修貢舉ニ知タ
リ卷ヲ考試スルニ常ニ
坐後ニ一朱衣ノ人アリ
テ點頭スルヲ覺ユ然ル
後文格ニ入レリ
漢ノ夏侯勝曰ク士ハ經
術ニ明ラカナラサルヲ
病ヒヨ苟モ經術明ラカ
ナレバ云々ト
荆州每歲舉ニ應ズル
人多ク名ヲ成サス号メ
天荒解ト曰フ
歐陽公蘇軾ノ應舉文ヲ
見テ曰ク老夫當ニ避ク
ベシ此ノ一頭地ヲ出スト
狀元ハ殿試中第一ノ名
ナリ丈夫一釣ニ六鰲

故事必讀

科第

ヲ連ヌト列子ニ出ツ
 解元又状元ノ名ハ唐ノ
 時舉子ノ京ニ赴クニ本州
 解ヲ給ス故ニ之ヲ拔解又
 發解ト曰フ唐ノ歐陽詹
 進士ニ舉ラル韓愈李肇
 崔群玉等ト第ヲ聯ヌ
 皆天下ノ選ナリ時ニ
 龍虎榜ト稱セリ
 宋ノ興國八年宋白等並
 ニ及第シ宴ヲ賜フ後遂
 ニ定制ト為ル
 宋ノ熙寧三年呂公著貢
 舉ニ知タリ密奏ノ曰ク
 士ヲ試ルニ詩賦ヲ用ル
 ハ賢ヲ舉ゲ治ヲ求ルノ
 意ニ非ズ亡フ詔策ヲ以
 テ治道ヲ諮詢セント是
 ヨリ廷試策文ヲ以テス
 殿試ニハ天子自カラ座

軒ニ臨テ策ヲ問フハ宋神宗ノ端ヲ開
 ナリ
 榜ヲ同ウスルノ人ハ皆是レ同年
 中ヲ取ルノ官ハ之ヲ座主ト謂フ
 應試遺コサル之ヲ龍門ニ額ヲ點スト
 謂ヒ
 進士及第スル之ヲ鴈塔ニ名ヲ題スト
 謂フ
 科ヲ發ルヲ賀スルニ鶚薦ニ榮膺スト
 曰ヒ

主ト為ル
 魚ノ龍門ニ登ル者化ノ
 龍ト為ル登リ得ザル者
 額ニ點シ鶚ヲ暴ス
 唐ノ韋肇及第シ偶慈
 恩寺ノ雁塔ニ名ヲ題ス
 後人之ニ效ヒ遂ニ故事
 ト成レリ
 後漢ノ孔融補衡ノオヲ
 愛シ上表シ之ヲ薦テ曰
 鸞鳥百ヲ累メモ一鸞ニ
 如カズト 礼部閱試ノ
 日皆嚴ニ兵衛ヲ設ケ棘
 ヲ楯テ之ヲ圍ミ以テ假
 濫ヲ防グ
 集英殿唱第ノ日宰臣名
 卷ヲ視テ某人ト曰フ闔
 門之ヲ承ケ以テ階下ニ
 衛士ニ傳フ凡六七人聲
 ヲ齊ウシ其名ヲ傳テ之

貢院ニ入ルニ棘圍ニ鑿戰スト曰フナ
 金殿名ヲ唱ルニ傳臚ト曰ヒ
 鄉會榜ヲ折ルニ撒棘ト曰フ
 仙桂ヲ板テ青雲ニ歩スルハ皆榮發ヲ
 言ヒ
 孫山ノ外紅勒帛總スルハ是レ名無キ
 ナリ
 英雄吾カ毅ニ入ルトハ唐ノ太宗ノ佳
 士ヲ得ルヲ喜ブナリ

故事必讀

科第

百四

ヲ呼ブ之ヲ傳臚ト謂フ
和疑貢舉ニ知タル時進
士喜テ謫譯シ以テ主司
ヲ動カス凝棘園ヲ撤シ
省門ヲ開キシニ蕭然ト
ノ譯ナシ
孫山舉ニ應ジ名ヲ榜末
ニ綴ル同試ノ者アリ山
ニ託メ得失ヲ問フ答テ
曰解名盡處是孫山吾兄
更在孫山外ト 嘉祐中
一舉人アリ論ニ曰天地
陣万物強聖人發歐陽公
戲ニ之ニ續テ曰ク秀才
刺試官破ト盡ク大朱筆
ヲ以テ之ヲ橫抹シ首ヨ
リ尾ニ至ル之ヲ紅勒影
ト謂フ
唐ノ太宗私カニ端門ニ
幸シ進士ヲ見喜テ曰ク

桃李春官ニ屬スルハ

劉禹錫ガ門生ヲ
得ルヲ賀スルナリ

薪ハ采ナリ類ハ積ナリ文王ノ人ト為

ヲ美ルノ詩ナリ故ニ士ヲ考フル之ヲ

薪獲ノ典ト謂フ

彙ハ類ナリ征ハ進ナリ是レ類ヲ連子

テ同進ノ象ナリ故ニ賢ヲ進ムヲ彙征

ノ途ト謂フナリ

英雄ヲ賺了スルハ人ノ下第ヲ慰シ

人ノ門戸ニ傍ハ士ノ依無ヲ憐ナリ

志シアル者ハ事竟ヒニ成ル 守テ榮華

ノ日アリ長シ 高平ナリ

丹ヲ成ス者ハ火候到何ニ烹煉ノ功ヲ

惜マンヤ

唐ノ章孝標下第シ歸燕ノ詩ヲ作テ曰ク舊壘危巢泥已落

今年故向社前歸連雲大廈無棲處更傍誰家門戸飛

光武臨淄ニ至リ軍ヲ擣ヒ耿弇ニ謂テ曰昔韓信歷下ヲ破

テ基ヲ立今將軍東阿ヲ攻テ迹ヲ發ス功相方ルニ足ル將

軍前ニ南陽ニ在テ此ノ大策ヲ建ツ嘗テ落々ヲ以テ合ヒ

難カリシニ志アル者ハ事竟ニ成ルト

釋道鬼神

釋ハ釋迦ノ教即チ佛法ナリ道ハ人ノ大道
ヲ行ヒ身心理ニ順フノ教(終)驗者此ノ類ナリ
鬼ハ陰ノ精氣神ハ陽ノ精氣ナリ

科第釋道鬼神 百五

天下ノ英雄吾毅中ニ入
ルト
唐ノ劉禹錫放榜ノ詩ニ
禮闈新榜動長安九陌人
々走馬看一日聲名徧天
下滿城桃李屬春官
詩ニ凡々穢撲薪之類之
濟々碎王左右趣之
唐ノ制進士ノ科甚々重
ク其文場ニ老死スル者
亦限リナシ故ニ英雄ヲ
賺了スト為ス

釋迦ハ周ノ昭王廿四年
四月八日天竺錫蘭島ニ

故事必讀

生レ周穆王五十三年二月十五日寂ス
老子ハ姓ハ李名ハ耳聃ハ蓋ナリ生ナガラ髪白シ故ニ老子ト曰フ之ヲ道家ノ宗ト為
鷲嶺ハ釋迦ノ成道セシ山ナリ祇園ハ須達多長者諸佛ノ為ニ滿地ニ金ヲ布キ祇陀太子ノ園ヲ購ヒ精舎ヲ建シ處ナリ晋ノ許穆華陽洞ニ入テ道ヲ得シニ紫微夫人授ニ教テ曰ク玉醴金漿交梨火棗ハ飛騰ノ藥ナリト
沙門ハ猶ホ息ムト言フガゴトシ私欲ヲ息メ妄想邪思ヲ致サズ以テ无為ニ至ルノ意

如來釋迦ハ即是レ牟尼原ト成佛ノ祖ニ係
老聃李耳ハ即是レ道君乃チ道教ノ宗ナリ
鷲嶺祇園ハ皆チ佛國ニ屬シ
交梨火棗ハ盡ク是レ仙丹ナリ
沙門ヲ釋ト稱スルハ晋ノ道安ニ始リ
中國ニ佛アルハ漢ノ明帝ヨリ始マレリ
錢籛ハ即是レ彭祖八百ノ高年ナリ
許遜原ト旗陽ニ宰トメ一家超擧ス

錢籛ハ彭祖ノ終スル導引ノ術ナリ彭祖ハ壽八百歳三代ヲ歷四十九妻五十四子ヲ喪ヒシト云波羅密多ハ彼岸ニ登ルト譯ス
紫府清都ハ神仙ノ境ナリ
上方ハ寺ナリ梵ハ浮圖ノ稱号ナリ刹ハ幡柱ナリ沙門一法ヲ得レバ柱ヲ立テ幡ヲ建テ以テ遠方ニ告グ因テ僧舎ヲ梵刹ト曰フ
真神ノ宇舎ハ所謂道觀ナリ蓋珠宮ハ神仙ノ宮ナリ
後漢ノ楚王映闕ニ詣リ料ヲ納テ罪ヲ贖ス帝詔ノ曰ク王ハ黄老ノ學ヲ

波羅ハ猶彼岸ト云ガコトク
紫府ハ即ハチ是レ仙宮ナリ
上方ト曰ヒ梵刹ト曰クハ總テ是レ佛場
真宇ト曰ヒ蓋珠ト曰クハ皆チ仙境ヲ稱ス
伊蒲ノ饌ハ以テ僧ニ齋スヘク
青精飯ハ亦佛ニ供ルニ堪タリ
香積厨ハ僧家ノ備フル所
仙麟脯ハ真人ノ食スル所

故事必讀 百六 釋道鬼神

好ミ浮圖ノ教ヲ尚ムト
其贖ヲ選シ以テ伊蒲塞
桑門ノ饌ヲ助ク

草木ノ葉ヲ取リ汁ヲ煮
米ヲ漬テ炊ク飯青色ヲ
作ス之ヲ服スレハ能ク

隨ヲ補ヒ三蟲ヲ殺ス
八菩薩佛ヲ拜シ食ヲ乞
フ是ニ於テ香積如来麩

香鉢ヲ以テ飯ヲ盛リ之
ヲ與ヘタリ
後趙ノ石勒佛圖澄ヲ召

テ其術ヲ試ム澄鉢ヲ取
リ水ヲ盛リ香ヲ燒テ之
ヲ呪スルニ忽チ鉢中ニ

青蓮花ヲ生セリ
後漢ノ梁巴仙術アリ尚
書郎ト為ル正旦帝酒ヲ

佛圖澄神通ヲ顯ハノ蓮ヲ呪ノ鉢ニ生

葛仙翁ハ戲術ヲ作シ飯ヲ吐テ蜂ト成

達磨ハ一葦シテ江ヲ渡リ

藥巴ハ酒ヲ喫テ火ヲ滅ス

吳猛ハ江ニ晝ノ路ヲ成シ

麻姑ハ米ヲ擲テ珠ヲ成ス

飛錫掛錫ハ僧人ノ行止ヲ謂ヒ

導引胎息ハ道士ノ修持ヲ謂フ

和尚ノ拜禮ニ和南ト曰ヒ

道士ノ拜禮ヲ誓首ト曰フ

圓寂ト曰ヒ茶毗ト曰フ皆和尚ノ死ス

羽化ト曰ヒ尸解ト曰フ悉道士ノ亡フ

ルヲ言フ
女道ニ巫ト曰ヒ男道ニ覘ト曰フ古ハ
ヨリ分ツ攸

男釋ヲ僧ト曰ヒ女釋ヲ尼ト曰フ從來
別カツアリ

救フナリト後成都火ヲ
失スルヲ奏ス雨ヲ得テ

滅ユ雨中ニ酒氣アリシ
麻姑ハ女仙ナリ蔡經ノ

家ニ至リ米少許ヲ求メ
地ニ墮セバ皆ナ珠ト成

凡ソ僧必ス錫杖アリ上
ニ環鈴アリ行ハ則チ飛

シ坐レハ則チ掛ルナリ
古仙導引ノ諸潤節ヲ

動カシ以テ老難キヲ求
ム胎息ハ能ク鼻口ヲ以テ

嘘吸セザルヲ胎中ニ在
ルガ如キヲ謂フ皆ナ養

主方ナリ
僧家合掌ノ礼ヲ作スナ

和南ト曰フ稽首ハ拜ノ

頭地ニ至ルナリ頭首ハ

頭地ヲ叩クナリ九頭首

別カツアリ

釋道鬼神 百七

ハ九タビスルナリ
 茶毗ハ燒化ヲ言フ
 人死シ其形生ルガ如ク
 色青カラス皮皺マズ目
 光ヲ失ナハズ形体ヲ失
 ナハサル者之ヲ尸解ト
 謂フ
 男ヲ僧ト曰ヒ優婆塞ト
 謂ヒ又徳士ト曰フ
 女ヲ尼ト曰ヒ又優婆夷
 ト曰フ
 内德智アリ外勝行アリ
 人ノ上ニ在ルヲ上人ト
 名ク
 比丘ハ乞士ヲ言フ上ハ
 諸佛ニ法ヲ乞ヒ慧命ヲ
 資益シ下ハ施主ニ食ヲ
 乞ヒ色身ヲ資益ス
 梵語ニ施主ヲ陀那鉢底
 ト曰フ唐ニ其鉢底ヲ除

故事必讀

羽客黃冠ハ皆ナ道士ヲ稱シ

上人比丘ハ並ニ僧人ヲ美ム曰ク餘來

檀越檀那ハ僧家ニ施主ヲ稱シ

丹ヲ燒汞ヲ煉ハ神仙ヲ學フナリ古ハ

和尚ノ自カラ謙スル之ヲ空桑子ト謂

道士有經ヲ誦スル之ヲ步虛ノ聲ト謂

菩薩トハ普ナリ薩トハ濟ナリ神祇ヲ尊

稱スユエニ菩薩ノ譽レアリ

水行龍力大ニ陸行象力大ハ佛法ヲ負

荷スルナリ故ニ龍象ノ稱アリ

儒家ハ之ヲ世ト謂ヒ釋家ハ之ヲ劫ト

謂ヒ道家ニ之ヲ塵ト謂フ俱ニ俗縁ハ

未脱セザルヲ謂フ

儒家ニ精一ト曰ヒ釋家ニ三昧ト曰ヒ

道家ニ一貞ト曰フ總ベテ奧義ノ窮マ

リ無キヲ言フナリ

達磨死シテ後手雙履ヲ携テ西ニ歸リ

王喬君ニ朝ノ爲雙鳥ニ化メ下リ降ル

釋道鬼神

百八

ト陀那ヲ訛言ノ擲那ト
 言フ又此人擲施ヲ行ヒ
 能ク貧窮海ヲ越エシム
 故ニ擲越ト言フナリ
 丹ヲ燒汞ヲ煉ルハ皆ナ
 終養ノ方ナリ
 空桑ハ父母无キノ義有
 辛氏桑ヲ空桑中ニ採
 テ兒ヲ得タリ命ノ伊尹ト
 曰フ空桑ハ山ノ名ナリ
 陳思王山ニ遊ブニ忽チ
 空中ニ經ヲ誦スル聲ヲ
 聞ク清遠道亮ナリ音ヲ
 解スル者之ヲ寫シ神仙
 ノ聲ト爲ス道士之ニ效
 ヒ歩虛ノ聲ヲ作ス
 傳燈錄ニ大佛法ヲ負荷
 スル者之ヲ龍象ニ比ス
 達磨端居ノ迹ス熊山ニ
 葬ル後三年魏ノ宋雲西

故事必讀

釋道鬼神

百八

域ニ使シテ回ルニ師ニ惹
 嶺ニ遇フ手ニ雙履ヲ持
 十翮ヲトシ獨リ述ク何
 レニ往ト問フ曰ク西
 天ニ去ルト明帝曠ヲ
 癸ケハ惟一犂履ヲ存セリ
 後漢ノ王喬遠地ノ邑宰
 ト為リ朝望毎ニ必ズ君
 ニ朝ス而ノ車騎ヲ見ズ
 双鳥アリテ南ヨリ来ル
 ヲ見ル上命シ網ヲ舉テ
 之ヲ張ルニ但一鳥ヲ得
 タリ
 梁ノ高僧經ヲ虎丘山ニ
 講ス石ヲ聚メテ徒ト為
 輿ニ至理ヲ談スルニ巖
 石皆點頭セリ
 淮南王安道術ヲ愛ス老
 父アリ門ニ請ル鬚眉皆
 皓白王ニ丹經ヲ授ケ白日

穀ヲ碎ケ粒ヲ絶ハ神仙能ク氣ヲ服シ
 形ヲ煉ナリ
 不滅不生ハ釋氏惟タ心ヲ明カニシ性
 ヲ見ルナリ
 梁ノ高僧經ヲ談シ妙ニ入テ巖石ヲシ
 テ點頭シ天花ヲ地ニ墜サシムベク
 張虚靖ハ丹ヲ煉リ既ニ成テ能ク龍虎
 ヲノ並ヒ伏シ雞犬ニ俱ニ外ラシム
 世界ヲ一粟ニ藏ムルハ佛法何ゾ其レ
 大ナル

天ニ外ル去時ニ臨ミ藥
 器ヲ庭ニ置ク雞犬之ヲ
 紙ニ皆上外スルヲ得
 タリ
 壺公藥ヲ賣テ空壺ヲ
 肆頭ニ懸ケ日入ノ後輒
 チ飛テ壺中ニ入費長房
 樓上ヨリ之ヲ見テ其常
 人ニ非ルヲ知リ乃チ日ニ
 辨錒ヲ進ム公語テ曰ク
 我ニ隨テ壺中ニ跳リ入
 レト長房一跳即チ入レハ
 但樓觀五色重門閣道々
 者數十人ヲ見ル公曰我
 ハ仙人ナリ滴セラレテ暫
 ク人間ニ寓スルノミト
 易睽之上九云鬼ヲ一車
 ニ載ス先之弑ヲ張トアリ
 晋ノ阮瞻无鬼論ヲ作ル
 一日忽チ客アリ與ニ名理

乾坤ヲ一壺ニ貯フルハ道法何ゾ其ノ
 玄ナル
 妄誕ノ言ハ鬼ヲ一車ニ載ナリ
 高明ノ家ハ鬼其ノ室ヲ闕ガフ
 無鬼論ハ晋ノ阮瞻ガ作タリ
 搜神記ハ晋ノ于寶ノ撰ナリ
 顔子滯ト子夏ハ死ノ地下ノ修文郎ト
 爲リ
 韓禽虎寇萊公ハ死ノ陰司ノ閻羅王ト
 爲ル

故事心讀 釋道鬼神 百九

ヲ談ス才辨アリ其久ノ
鬼神之事ニ及ブ客色ヲ
作ノ曰鬼神之事聖賢共
ニ傳フル所君何ゾ无シ
ト謂フヤ我便チ是鬼ニ
ト變ノ異形ト為リ須臾ニ
ノ消滅セリ
昔蘇韶死シ而ノ魁ル弟
節地下ノ事ヲ問フ韶曰ク
顔子淵ト子夏地下ノ修
文郎ト為レト
冠萊公亡ス僧克勤公ヲ
曹川境上ニ見ル之ヲ後
ニ詢フ曰ク闍浮王政ヲ交
スルナリト 韓禽虎白
生テ上柱國ト為リ死
闍王ト作ラバ亦タ足ト
度索山ニ大桃樹アリ下
ニ神荼鬱壘ノ二神アリ
能ク鬼ヲ咬フ故ニ人此

土穀ノ神ヲ社稷ト曰ヒ
乾旱ノ鬼ヲ旱魃ト曰ク同ノ問蘇王イ
魑魅魍魎ハ山川ノ崇神
神荼鬱壘ハ鬼ヲ咬ノ神トイフ文
仕途、偃蹇スルハ鬼モ亦タ之レカ為ニ擲
揄シ論ハ吾レ河龍ヲ拊セリ
心地、光明ナレハ神自カラ之レカ為ニ呵
護ス
羅友一日極温ニ語テ曰ク臣昨一鬼ヲ見ル擲揄ノ曰ク只汝ガ
人ノ郷ト作ルヲ送ルヲ見ル人ノ汝ガ郡ト作ルヲ送ルヲ見ス
ト相送ニ友ヲ以テ襄陽ノ守ト為セリ擲揄ハ兩手相弄スルナ
リ

二神ヲ画キ門ニ貼ノ百
鬼ヲ避ルナリ
黄帝岐伯ヲノ草木ヲ嘗
メ味ハヒ醫ヲ興シ病ヲ
療シム故ニ醫術ヲ岐黃
ノ術ト曰フ
晋ノ平公疾アリ秦伯醫
ヲノ之ヲ視セシム趙武
ガ曰ク醫國家ニ及ブカ
對テ曰ク上ハ國ヲ醫シ
次ハ人ヲ救フ故ニ醫ヲ
國手ト曰フ
扁鵲初メ長桑君ニ逢テ
藥方ヲ受ケ之ヲ飲ニ
上池之水ヲ以テス此ヨリ
病ヲ視ルニ盡ク五臟ノ
藏結ヲ見ル
唐ノ鄭虔善ク山水ヲ画

醫士ハ岐黃ノ術ヲ業トシ稱ノ國手ト
曰ヒ
地師ハ青鳥ノ書ヲ習フ號シテ堪輿ト
曰フ
盧醫扁鵲ハ古ヘノ名醫
鄭虔崔白ハ古ヘノ名畫
晋ノ郭璞ハ青囊經ヲ得テ故ニ卜筮、地
理ヲ善ス
技藝
技ハ字書ニ巧ナリ能ナリ方術ナド註ノ俗ニ云
ワザマヘノコナリ 執モ同クワザノ訓アレトモ
執ハ六執ナト云テ体ニ属シ技ハ用ニ属スルナリ

技藝

故事必讀

ク嘗テ自カラ其詩並ニ
画ヲ寫メ帝ニ上ル帝其尾
ニ大署ノ曰鄭虔三絶ト
崔白ハ濠梁ノ人其画緻
荷鳧雁ヲ以テ名ヲ得ト
雖氏然トモ猶ホ花竹翎
毛ニ精シ
晋ノ郭璞博學ニ陰陽
曆算ニ妙ナリ郭公ト云
者アリ何東ニ客居ス
筮ニ精シ筮之ニ從テ業
ヲ受公青囊中ノ書九
卷ヲ以テ之ニ典ヲ遂ニ五行
天文ト筮ノ事ニ洞ナリ
孫真人曾テ一青蛙ヲ救
フ乃龍子ナリ後龍王召
テ龍宮ニ至リ水府ノ藥
方三十首ヲ得タリ
漢ノ嚴君平筮トヲ以テ
業トス教人ヲ聞シ百錢

孫思邈ハ龍宮ノ方ヲ得テ能ク虎口龍
鱗ヲ醫ス
善トスル者ハ是レ君平詹尹ノ流ナリ
善相スル者ハ即チ唐舉子卿ノ亞ナリ
命ヲ推スノ人ハ即星士
繪畫ノ輩ヲ丹青ト曰フ
大風鑑ハ相士ノ稱
大工師ハ木匠ノ譽
王良ノ若造父ノ若ハ皆ナ善御ノ人
東方朔淳于髡ハ滑稽ノ輩ニ係カル

ヲ得テ自カラ養フニ足
レバ則チ肆ヲ閉テ簾ヲ下
シ老子道德真經ヲ讀ム
吳融ハ画山川ノ歌ニ良工
善得丹青理趣向茅茨
画山水
造父ハ周ノ穆王ノ御者
滑稽ハ口辯アルナリ
鬼谷ハ地名王詡ト善
ノ此ニ居ル因テ号ノ鬼
谷先生ト曰フ
董狐ハ晋國ノ史官直筆
善キ者ナリ
雉盧ハ皆骰子ノ紅點ア
ル者ナリ
養由基射ヲ善ス柳葉
ヲ百歩ノ外ニ懸テ之ヲ
射ルニ百發ノ百中セリ
紀昌射ヲ飛衛ニ學ブ衛
曰小ヲ視ルト大ノ若ク微

善卦ヲトスル者ヲ稱メ今ノ鬼谷ト曰
善怪ヲ記スル者ヲ稱メ鬼ノ董狐ト曰
日ヲ諷ノ人ヲ稱メ太史ト曰ヒ
書算ノ人ヲ稱シテ掌文ト曰フ
骰ヲ擲ノ者ハ雉ヲ喝シ盧ヲ呼ヒ
射ヲ善スル者ハ楊ヲ穿虱ヲ貫ク
樗蒲ノ戲ハ乃チ雙六ト曰ヒ
橘中ノ樂ハ是レ圍碁ヲ説ク

故事必讀

技藝

百十一

ヲ視ルヲ著ナル如ク而ノ後
我ニ告ヨト昌菴ヲ以テ頭
ヲ膺間ニ垂レ南面ノ之ヲ
望ム旬日、間浸大三年、
後大車輪ノ如シ乃引
テ之ヲ射ルニ直ナニ武
ハノ心ヲ貫ケリ
巴園ノ人家ニ橋樹アリ
繡綬ニ大橋子ヲ餘ス各
大三四斗ノ盃益ナリノ
如シ即ノ攀ガ摘ムニ輕
重常橋ノ如シ割キ開ケバ
每橋ニ隻アリ鬚眉皓然
皆ナ相對ノ象棋ス身尺
餘談突自若トシ己ニ賭
ヲ決シ畢テ一叟曰ク橋
中ノ樂ニ高山ニ減ゼム
但根ヲ深ウシ蒂ヲ固ス
ルヲ橋中ニ得ザルノミ
ト一叟袖裡ヨリ一草根

陳平傀儡ヲ作テ漢高白登ノ圍ヲ解キ
孔明木牛ヲ作テ劉備糧ヲ運ノ計ヲ輔
公輸子ハ木鳶ヲ削リ天ニ飛テ三日ニ
至リ而シテ下テス
張僧繇ハ壁龍ヲ畫キ晴ヲ點スレハ則チ
雷電ノ而シテ飛騰ス
然レ尺奇技ハ人ニ益無キニ似
而シテ百藝ハ用ヲ濟有テ期ス
漢帝自帝城ニ冒頓ニ圍マル冒頓ノ妻阏氏兵強シ將ニ破レントス陳平
閼氏ノ妬忌ナルヲ知り沐綢美人ヲ造テ綽問ニ弄ハス閼氏果シテ入ナリ
ト疑ニ城ヲ下サバ冒頓ガ必ス之ヲ納ンテ恐レ遂ニ陣ヲ退シト云フ
孔明兵ヲ祁山ニ出シ木牛流馬ヲ造テ糧ヲ運セリ

故事必讀

ヲ出シ之ニ喫スレバ化
メ龍ト為ル四叟之ニ乘
ズルニ足下雲起リ風雨
晦冥在ル所ヲ知ラズト

韓愈ノ孟東野ヲ送ル序
ニ九ノ口ニ出テ聲ヲ為
ス者ハ其皆ナ平ナラザ
ル者乎云々
折楊ハ械ナリ頸ヲ夾ム
モノ
肺石ヲ立テ窮民凡ソ寬
アリテ上ニ抑復スル者
ヲ迄ス士其碎ヲ聽テ上
ニ告グ肺石ハ赤石ナリ
宋ノ蒼梧王曰ク凡ソ人
憂苦スレバ則チ善ヲ思

世人惟タ不平ナレバ則チ鳴ル
聖人ハ訟無キヲ以テ貴シト為
上ニ恤刑ノ王アレハ折楊雨潤シ
下ニ寬枉ノ民無ウメ肺石風清シ
圖固ハ便テ是レ福堂ト雖尺
而メ地ニ畫ノ亦獄ト爲メシ
訟獄 財ヲ争フヲ訟ト曰ヒ
罪ヲ争フヲ獄ト曰フ
張僧繇金陵ノ安樂寺ニ於テ二龍ヲ画キテ晴ヲ點セズ毎ニ云フ之ニ點
スレバ即チ飛ビ去ルト人以為ラク羨ナリト因テ其一ニ點スレバ須臾ニ
ノ雷電壁ヲ破リ一龍天上ル眼ニ點セザル一龍ハ現在セリト
云フ

故事必讀

技藝 訟獄

百十二

フ故ニ智者ハ囹圄ヲ以テ福堂ト為シ漢ノ路溫舒曰ク地ニ畫ソ獄ト為シモ議ノ入ラス刺メ吏ト為サルモ期ノ對セズト詩ノ行露ニ誰カ謂雀角无ク何ヲ以テ我屋ヲ穿ソ誰カ謂フ女家无ク何ヲ以テ我ヲ訟ニ速クト女家无ク何ヲ以テ我ヲ訟ニ速クト

人ト訟ヲ構フルヲ鼠牙雀角ノ争ヒト曰ヒ罪人冤ヲ訴ルハ地ニ捨シ天ニ籲ノ慘アリ
 狴犴ハ乃チ猛犬ニシテ而シテ能守ル故ニ獄門ニ狴犴ノ形ヲ畫ケリ
 棘木ハ外刺アリテ而シテ裏直シ故ニ訟ヲ聽クハ棘木ノ下ニアリ
 郷亭ノ繫ハ岸アリ朝廷ノ繫ハ獄アリ誰カ敢テ奸ヲ作シ科ヲ犯サン

夏ニ夏臺ト曰ヒ商ニ羨里ト曰ヒ周ニ囹圄ト曰フ皆ナ囚獄ヲ云囹圄ハ領ナリ囹圄ハ繫ナリ囚徒ヲ領録ノ繫繫スルヲ謂フ桎ハ木械足ニアルモノ今鐵ヲ以テ為リ脚線ト曰フ桎ハ木械手ニアルモノ即今ノ手杻ナリ
 蘓氏越王ニ説テ曰ク蚌出テ曝ス而シテ其肉ヲ啄ム蚌合シ其喙ヲ閉ス魚者并シテ擣セリ風俗通云城門火ヲ失フ殃ハ池魚ニ及ブ唐ノ周興來俊臣並ヒ事ヲ用テ武后刑ヲ用ルテ深酷ナリ一日興人ニ誣告セテ音興ニ逮テアリ俊臣ヲノ之ヲ諷セシ

死者復生バカラ刑者復贖ハカラス上ハ當ニ情ヲ原テ罪ヲ定ヘシ
 囹圄ハ是レ周獄ナリ羨里ハ是レ商牢ナリ
 桎梏ノ設ハ乃チ罪人ヲ拘スルノ具縲紲中豈ニ賢者ト冤無カラシヤ
 兩争放タサルハ之ヲ鵠蚌相ヒ持スト謂ヒ下ニ罪ニ及ハ夏ハ決ハ其其其幸無ク牽連スル之ヲ池魚害ヲ受ト謂フ

故事必讀

ム而ノ興之ヲ知ラズ方ニ俊臣ト會食ス俊臣興ニ問テ曰ク囚多ク當ヲ承ケズ何ノ法ヲ以テ之ヲ治ヤン興曰ク一大甕ヲ置キ囚人ヲ内レ外炭火ヲ用テ之ヲ炙ラバ自カラ承ケン俊臣曰ク肯アリ請フ兄甕ニ入レト大禹罪人ヲ見車ヨリ下リ泣テ曰ク堯舜ノ民ハ堯舜ノ心ヲ以テ心ト為寡人ノ民ハ寡人ノ心ヲ以テ心ト為是痛ハベキ也ト易ノ訟卦上剛下險タニ而訟ヲ健トアリ魯仲連曰ク天下ノ士ヲ貴ブ所ハ人ノ為ニ難ヲ排シ紛ヲ解テ取ル所无ケレバナリト

請フ公甕ニ入レトハ周興自カラ其孽ヲ作ナリ車ヨリ下テ罪ニ泣ハ夏ノ禹ノ深其民ヲ痛ナリ訟ヲ好ムト健訟ト曰ヒ無訟ト曰ヒ掛告ヲ株連ト曰フナリ人ノ為ニ訟ヲ解ク之ヲ紛ヲ釋ト謂ヒ人ノ冤ヲ裁セラル之ヲ禍ヲ嫁スト謂ヒ徒配ヲ城旦ト曰ヒ罪ト問戌ヲ遣ハ是軍ヲ問

秦韓ノ上黨ヲ伐ツ上黨ノ守氏ト謀リ上黨ヲ以テ趙ニ歸セント欲シ使ヲシテ趙ニ告シム平陽君曰是レ禍ヒテ趙ニ嫁セント欲スル且ニ起テ城ヲ治スルヲ城旦ト曰フ三尺ハ劍ヲ謂フナリ即宋ノ太祖ノ法ヲ犯サバ劍アリノ意ナリ三木ハ柳桤檉ヲ謂ナリ墨ハ面ニ懸スルナリ灑ハ鼻ヲ割ナリ刑ハ足ヲ割ナリ官ハ淫刑大辟ハ殺ナリ古ハ木人ヲ以テ罪ヲ犯スノ家ニ置キ犯人木ヲ抱キ公庭ニ入テ訟ヲ聽シナリ唐ノ太宗死囚ヲ放テ家ニ歸シ期スルニ來秋死ニ就クヲ以テス期ノ如ク

三尺ハ乃朝廷ノ法ナリ三木ハ是罪人ノ刑タリ古ノ五刑ハ墨劓剕宮大辟ナリ今ノ律例ハ笞杖死罪徒流ナリ上古ノ時ハ木ヲ削テ吏ト為今日淳風安クニカ在ル唐ノ太宗囚ヲ縱シ獄ニ歸ス古人ノ誠信嘉スヘシ花落テ訟庭間ニ草生ノ囹圄靜ナルハ何易ノ民ヲ治ノ簡ナルヲ歌フナリ

故事必讀

訟獄貧富

百十四

皆至ル太宗其信ヲ嘉ノ
俱ニ之ヲ釋セリ
唐ノ何易氏ヲ治メテ異
政アリ人皆訟ヲ息ム獄
中草庭ニ滿テ羅張ル
シ因テ花落庭閑ノ歌アリ
乱ヲ治メ平ヲ興ス云々俱
ニ漢ノ崔寔ノ言ナリ

君子ハ道ヲ憂ヒテ貧ヲ憂
ヒズ 智者ハ義ヲ以テ命
自カラ安ンズ
漢景帝ノ初メ京師ノ錢

故事少議

吏ハ氷上ニ從テ立テ人ハ鏡中ニ在行ハ
盧象ガ獄ヲ折ルノ清ヲ頌スルナリ
見ル 亂ヲ治ノ藥石ハ刑罰ヲ重ト為
バシ 太平ヲ興ノ梁肉ハ徳教ヲ先ト為

貧富 貧ハ財元ナキナリ 富ハ財豊ナルナリ

命ノ脩短ニ數アリ 人ノ富貴ハ天ニ在
惟ダ君子ハ貧ニ安ジ
達人ハ命ヲ知ルナリ

鉅万ヲ累子貫擗テ校ス
カラス大倉ノ粟陳々相
因リ充溢ノ外ニ露積シ
シ紅腐ノ食フヘカラサ
リシト云
梁ノ武帝ノ弟蕭宏性
錢ヲ愛シ百万ヲ一聚シ黃
榜ヲ以テ之ヲ標シ千万一
庫ニ紫標ヲ掛ク此ノ如
キ十餘間アリ之ヲ計ルニ
錢三億餘万アリ蕭綜
錢思論ヲ作テ之ヲ譏リ
タリ
唐ノ李暹善ク産ヲ殖ヤス
伊州ニ膏腴ノ地ヲ有ス都
ヨリ関口ニ至ルマデ田疇相
望ム人ノ之ヲ地癖ト謂フ
漢ノ馬援牛馬羊数千頭
穀万斛アリ嘆ノ曰ク凡
ソ財貨ヲ殖ヤハ能ク施

貫朽粟陳ハ財多キヲ稱羨スルノ謂ヒ
紫標黃榜ハ錢庫ヲ封記スルノ名ナリ
財物ヲ貪愛スルハ之ヲ錢思ト謂ヒ
好テ田宅ヲ置ク之レヲ地癖ト謂フ
錢ヲ守ル虜ハ財ヲ蓄ヘテ而ノ散セザ
ルヲ譏リ
落魄ノ夫ハ業ヲ失フノ依ル無キヲ謂
フナリ
貧者ハ地雖ヲ立モ無ク
富者ハ田阡陌ヲ連ラヌ

故事少議 貧富

販スルヲ貴ブ否レバ則チ錢ヲ守ル博ノミト盡ク其所有ヲ散シ以テ昆弟故舊ニ與ヘタリ業ヲ失ノ依ル无キヲ落魄ト云フ
秦ノ孝公井田ヲ壞シ阡陌ヲ開ク民買賣スルヲ得富者田阡陌ヲ連テ貧者雖ヲ立ル地モ无シ左傳公ニ齊侯曰室罄ヲ懸ルガ如ク野ニ青草无シ何ヲ恃テカ恐レザル
鄧毅傳ニ家担石ノ儲无ク而ノ擲蒲一擲百方ス孔子陳ニ在テ糧ヲ絶リ數ハ命ナリ奇ハ獨ナリ獨ニガレナリ
左哀十三吳ノ大夫申叔儀糧ヲ魯ノ大夫公孫有

室懸磬ノ如キハ其甚ダ窘メルヲ言ヒ家擔石無キハ其極メテ貧ナルヲ謂ノ米無キヲ陳ニ在リト曰ヒ死ヲ守ヲ斃ルヲ待ト曰富足ヲ殷實ト曰ヒ命蹇ニ數奇ト曰フ涸鮒ヲ甦スルハ乃人ノ急ヲ濟フナリ庚癸ト呼ブハ是レ人ノ糧ヲ乞フナリ家徒ニ壁立ハ司馬相如カ貧ナルナリ廢屨炊ヲ為ハ秦ノ百里奚ノ苦ルナリ

山氏ニ乞フ有山氏曰ク若ク首山ニ登リ以テ呼バ庚癸カト曰ハミ則チ諾セヨト軍中糧ヲ出ス
一ヲ得ズ故ニ約ノ私隱ヲ為ス蓋シ庚ハ西方教ヲ主トル癸ハ北方水ヲ主トル即チ飲食物ノ一ト為ルナリ
百里奚秦ニ事フ其妻歌テ曰百里奚五羊皮憶別時烹炊雖炊廢屨云々
廢屨ハ門ヲ支フル木ナリ梁ノ簡文ノ時江南百姓食乏シ死者野ヲ蔽ヒ富室ニ食无ク皆鳥形鵠面金玉ヲ懷キ床ニ伏テ死ヲ待ツ
礼記王制ニ三年耕セバ必一年ノ食アリ九年耕セバ

鵠形菜色ハ皆チ窮民饑餓ノ形チナリ骨ヲ炊骸ヲ爨ハ軍中糧乏ノ慘ヲ謂フ餓死ノ君臣ノ義ヲ留ルハ伯夷叔齊ナリ
貨財王公ノ富ニ敵スルハ陶朱倚頓ナリ石崇ノ妓ヲ殺シ以テ酒ヲ侑ハ富ヲ恃テ兇ヲ行フナリ
何曾カ一食ニ萬錢ヲ費スハ奢侈ノ過ル甚シキナリ

貧富

必三年ノ食アリ三十年ノ通ヲ以テ凶荒水溢アリト雖氏民菜色ナシ云々
 三軍堅守日久ウノ糧无ク軍中骨ヲ炊ギ骸ヲ爨而ノ食ス
 范蠡越ヲ辞シ舟ニ乗テ胡ニ歸リ名ヲ鳩夷子皮ト改メ海畔ニ畔シ産ヲ致ス數十万後去テ陶ニ止リ復又父子耕種シ時ヲ候ヒ物ヲ轉シ什一ノ利ヲ逐ヒ何中无ク賞ヲ致シ鉅方ヲ累手自ラ陶朱公ト号ス
 倚頓ハ魯ノ貧士ナリ陶朱公ノ富ヲ聞往テ術ヲ問フ曰ク富ヲ欲セバ五牝ヲ畜ハト倚頓牛羊ヲ畜フ一十年間子息万計賞王公ニ擬ス

三月ニ新絲ヲ賣リ五月ニ新穀ヲ糶スルハ真コトニ是レ肉ヲ刻テ瘡ヲ醫スルナリ
 三年耕シ而ノ一年ノ食アリ九年耕シ而ノ三年ノ食アレバ庶幾ハ菜ニ遇ノ備アラシ
 貧士ノ腸ハ藜藿ニ習ヒ
 富人ノ口ハ膏粱ニ厭ク
 石崇ハ蠟ヲ以テ薪ニ代銘ヲ以テ釜ニ沃グ
 范冉ハ蛙土灶ニ生シ塵破甑ニ生ゼリ

晋ノ何曾性奢侈毎日一食万錢ヲ費シ還テ言フ箸ヲ下ス處无シト
 韓愈ノ詩ニ腸肚習藜藿常ニ惡食スルヲ云
 玉璽ト石崇ト皆財ニ富ミ以テ奢侈ヲ競フ愷ハ銘ヲ以テ釜ニ沃グ崇ハ蠟ヲ以テ薪ニ代タリ
 後漢ノ范冉菜蕪ノ令ト為テ貧ナリ民歌テ曰ク甑中塵ヲ生ス范史雲釜中蛙ヲ生ス范菜蕪ト

曾子襟ヲ捉レハ肘見履ヲ納レハ踵ヲ決ス貧言フニ勝ヘズ
 韋莊ハ米ヲ數テ而ノ炊キ薪ヲ秤テ而ノ爨ク儉實ニ鄙ヘシ
 之レヲ徳ニ飽ノ士ハ膏粱ヲ願ハス
 總ルニ聞譽ノ施奚ゾ文繡ヲ圖ン
 人事
 人ハ説文ニ天地ノ性最モ貴キ者ナリト又釋名ニ人ハ仁也物ヲ生スル物ナリトアリ
 大學ハ道トメ夫ノ明新ヲ重シ
 小子ハ應對ヨリ先キナルハ莫シ

故事必讀

貧富人事

百十七

故事必讀

毛詩ニ其容改メズ言ヲ
出セバ章アリト云リ
智ハ云々胆ハ云々ノ二句
ハ孫思邈ノ言ナリ
沛公曰ク鯨生我ニ説ク
関ヲ距テ諸侯ヲ納ル母
レト(鯨生ハ小人距ハ関也
軻ハ車輪ヲ碍フルノ木
發ハ木動ケバ則車行ク
故ニ發動ノ初メヲ曰フ

其容固ヨリ宜シク度アルベク
言ヲ出テハ尤モ章アルヲ貴ブ
智ハ圓ナランコトヲ欲シ而ノ行ハ方ナ
ランコトヲ欲ス
膽ハ大ナランコトヲ欲シ而メ心ハ小ナ
ランコトヲ欲ス
閣下足下ハ竝ヒニ人ヲ稱スルノ辭
不佞鯨生ハ皆テ自カラ謙スルノ語
罪ヲ恕スルヲ寬宥ト曰
惶恐スルヲ主臣ト曰フ

其容固ヨリ宜シク度アルベク

言ヲ出テハ尤モ章アルヲ貴ブ

智ハ圓ナランコトヲ欲シ而ノ行ハ方ナ

ランコトヲ欲ス

膽ハ大ナランコトヲ欲シ而メ心ハ小ナ

ランコトヲ欲ス

閣下足下ハ竝ヒニ人ヲ稱スルノ辭

不佞鯨生ハ皆テ自カラ謙スルノ語

罪ヲ恕スルヲ寬宥ト曰

惶恐スルヲ主臣ト曰フ

大春元、大殿選、大會狀ハ人ヲ擧ルノ稱

一ナラズ

大秋元、大經元、大三元ハ士人ノ譽殊ナ

ル多ナリ

大椽吏ハ吏員ヲ推羨ムルナリ

大柱石ハ卿宦ヲ尊稱スルナリ曰

人ノ學ニ入ルヲ賀スルニ雲程軻ヲ發

スト曰ヒ

人ノ新ニ冠スルヲ賀スルヲ元服榮ヲ

加ト曰フ

細載ハ財物ヲ疎縛シ装
ニ滿テ載テ歸ルヲ謂フ
ナリ
獻芹ノ解花木部ニ出
左傳廿三年晉ノ公子重
耳曹ニ及フ僖負羈盤盃
ヲ餽テ璧ヲ其中ニ置ク公
子瑕ヲ受テ璧ヲ反セリ
禮記ニ士大夫相接見スル
必ス執ル所アリ以テ質ト
為卿ニ羊ヲ執リ大夫ハ
雁ヲ執リ士ハ雉ヲ執リ
庶人鷓ヲ執ル

故事少讀

人ノ榮歸ヲ賀スルヲ之ヲ錦旋ト謂ヒ

商ヲ作テ財ヲ得ル之レヲ細載ト謂フ

送禮ヲ謙ノ芹ヲ獻スト曰ヒ

餽ヲ受サルヲ璧ヲ反ト曰フ

人ノ禮厚キヲ謝スルニ厚贖ト曰ヒ

自カラ禮ノ薄キヲ謙ノ菲儀ト曰フ

送行ノ禮之ヲ贐儀ト謂ヒ

拜見ノ贐名テ贐敬ト為ス

壽ヲ賀スルノ儀ヲ祝敬ト曰ヒ

死ヲ弔テスノ禮ヲ奠儀ト曰フ

黃帝ノ子累祖、遠遊ヲ
好ミ道ニ死ス後人祀リ
テ術神ト為故ニ出行ニ
ハ必ス之ヲ祭リ而シ其処
ニ飲スト云フ
楚ニ優孟アリ晋ニ優解
アリ皆能ク謹言ヲ發シ
以テ人意ヲ迴ラス蓋シ俳
優ノ始メナリ

漢ノ曹邴生、季布ヲ揖
ノ曰楚ノ諺ニ黃金百斤
ヲ得ルハ季布、一諾ニ如
ズト足下何ヲ以テ此名

人ノ遠歸ヲ請フニ塵ヲ拂フト曰ヒ

酒ヲ携ヘテ行ヲ送ルヲ祖餞ト曰フ

僕夫ヲ擣フハ之ヲ旌使ト謂ヒ

戲文ヲ演スル之ヲ俳優ト曰フ

人ノ書ヲ寄ルヲ謝スルニ辱ク華翰ヲ

承クト曰ヒ

人ノ問ヲ致スヲ謝スルヲ多寄聲ヲ蒙

ムルト曰フ

人ノ信ヲ寄ルヲ望ムニ早ク玉音ヲ賜

ハト曰ヒ

故事少讀 人事

フ梁楚ノ間ニ得タル哉且
僕足下ト皆ナ楚人便チ
僕足下ノ名ヲ天下ニ遊
揚セン願フニ美ナラズ
乎
古ハハ紙无シ姓名ヲ竹
木ノ上ニ刺故ニ刺ヲ投
スト曰フ
李白ガ韓荆州ニ上ル書ニ
曰白聞天下ノ談士相聚テ
謂ア曰生テ万户侯ニ封セラ
ルヲ願ハズ但願フ一タビ
韓荆州ニ識レント何ノ人
ヲノ之ヲ景慕セシムル
ニ此ニ至ルト
前漢ノ司馬相如蘭相如
ノ人トナリヲ慕フ故ニ
亦自カラ相如ト名ツク
後漢ノ應奉袁賀ニ詣ル

人ノ物ヲ許スヲ謝スルニ已ニ金諾ヲ
蒙ルト曰フ
名帖ヲ具スルヲ刺ヲ投スト曰
書函ヲ發クヲ緘ヲ開クト曰フ
思慕ノ久キヲ極ヲ韓ヲ瞻ニ切ナリト
曰ヒ
想望ノ殷ナルニ久ク蘭ヲ慕フヲ懷ト
曰フ
相識テ未ダ真ナラサルニ半面ノ識
リト曰ヒ

賀時ニ出テ門ヲ閉ツ門
内ニ車丘ノ車ヲ造レル
ガアリ扇戸ヲ開キ半面
ヲ出シ奉テ視ル奉即チ出
テ後數年路ニ車近ヲ見
識テ之ヲ呼ブ所謂半面
ノ識ナリ
後漢ノ李膺聲名ヲ以テ
自カラ高シ當時ノ士其容
綬ヲ被ル者アレハ名ケテ
龍門ニ登ルト為
韓愈六經ノ文ヲ以テ諸
儒ノ為ニ倡フ學者之ヲ
仰グ泰山北斗ノ如シ
毛詩ニ一日見ザレバ三
秋ノ如シ秋ハ陰ニ屬ス故ニ
人氣モ自カラ悒鬱ノ時也
盧仝僖上人ヲ訪フテ遇ハ
ズ題ノ曰三入寺待不來
轆轤无繩井百尺渴心歸

期セスシテ而ノ會スルヲ邂逅ノ縁ト
曰フナリ
龍門ニ登ルハ名士ニ參スルヲ得ルナリ
山斗ヲ瞻ルハ高賢ヲ仰フギ望ムナリ
一日三秋ハ思慕ノ甚切ナルヲ言ヒ
渴塵萬斛ハ想望ノ久殷ナルヲ言フ
教命ニ睽キ違フニ乃チ鄙吝復タ萌ス
ト云
來往憑ルヲ無キハ則チ萍踪定ルヲ靡
ト曰フ

故事必讀 人事

去生塵埃
陳蕃周舉ノ二人嘗テ相
謂テ曰教日黃生ヲ見ザ
レバ鄙吝ノ態復々心ニ聯
スト黃憲字ハ叔度人ト
為リ寛洪大量語ニ云叔度
汪々トシテ頃ノ波ノ若シ
之ヲ澄スモ清ズ之ヲ擾ス
モ濁ラズト
舜食スレバ則テ堯ヲ羨ニ
見立バ則テ堯ヲ牆ニ見ル
ハ思慕ノ心ニ切ナルナリ
顔淵曰ク夫子歩スレバ亦
歩シ趨レバ亦趨リ夫子奔
軼絶塵而ノ回其後ニ瞻
タルガ若シ
漢ノ馬不疑暴勝之ヲ見
テ曰ク海瀕ニ竊伏ノ暴公
子ヲ聞ク舊シテ乃チ顔
ヲ承ケ辞ヲ接スト

虞舜唐堯ヲ慕フテ堯ヲ羨ニ見堯ヲ牆

ニ見ル

門人孔聖ヲ學孔趨ハ亦趨孔歩スレハ

亦歩ス

曾テ會晤ヲ經ヲ向ニ顔ヲ承ケ辭ヲ接

スルコヲ獲タリト曰ヒ

人ノ指教ヲ謝スルヲ深ク耳提面命ス

ルコトヲ蒙ムルト曰フ

人ノ涵容ヲ求ムルヲ包荒ヲ望ト曰ヒ

人ノ吹噓ヲ求ムルヲ汲引ヲ望ト曰フ

詩ノ柳篇朱注徒ニ面之
ヲ携ノノミニ非ズ而ノ又
之ニ示スニ事ヲ以テ徒ニ
面之ヲ命スルノミニ非ズ而
ノ又其耳ヲ提グ之ヲ喻ス
所以ノ者詳且切ナリ
易ノ泰卦ニ九ニハ荒ヲ包
テ退遺セズ朋七
宋ノ王曾父ヲ進退ス人之
ヲ知ル莫シ范仲淹曰公盛
德獨リ汲引ヲ少クノミト
曾曰政ヲ執リ而メ恩ヲ
ノ已レニ歸セシメバ怨ハ將ニ
誰ニ歸セントスルカト
莊子ニ耶人鼻端ニ堯ツケ
匠石ヲノ之ヲ斲ラシムルニ
堯去テ鼻傷ズ耶人立テ
容ヲ改メズト云
平原君曰毛先生楚ニ
至リ趙ヲ九鼎欵詔ヨ

人ノ薦引ヲ求ムルニ幸ニ先容ヲ為セ

ト曰ヒ

人ノ文ヲ改ヲ求ニ郢斲ヲ賜ハンヲ望

ト曰フ

重鼎ノ言ヲ借ルハ是人ノ事ヲ言フ

ニ托スルナリ

玉趾ヲ移スコトヲ望ハ是人ノ親カラ行

クヲ浼スナリ

多ク推轂ヲ蒙ルハ人ノ舉薦ヲ謝スル

ノ辭ナリ

故事必讀人事

去生塵埃
陳蕃周舉ノ二人嘗テ相
謂テ曰教日黃生ヲ見ザ
レバ鄙吝ノ態復々心ニ聯
スト黃憲字ハ叔度人ト
為リ寛洪大量語ニ云叔度
汪々トシテ頃ノ波ノ若シ
之ヲ澄スモ清ズ之ヲ擾ス
モ濁ラズト
舜食スレバ則テ堯ヲ羨ニ
見立バ則テ堯ヲ牆ニ見ル
ハ思慕ノ心ニ切ナルナリ
顔淵曰ク夫子歩スレバ亦
歩シ趨レバ亦趨リ夫子奔
軼絶塵而ノ回其後ニ瞻
タルガ若シ
漢ノ馬不疑暴勝之ヲ見
テ曰ク海瀕ニ竊伏ノ暴公
子ヲ聞ク舊シテ乃チ顔
ヲ承ケ辞ヲ接スト

虞舜唐堯ヲ慕フテ堯ヲ羨ニ見堯ヲ牆

ニ見ル

門人孔聖ヲ學孔趨ハ亦趨孔歩スレハ

亦歩ス

曾テ會晤ヲ經ヲ向ニ顔ヲ承ケ辭ヲ接

スルコヲ獲タリト曰ヒ

人ノ指教ヲ謝スルヲ深ク耳提面命ス

ルコトヲ蒙ムルト曰フ

人ノ涵容ヲ求ムルヲ包荒ヲ望ト曰ヒ

人ノ吹噓ヲ求ムルヲ汲引ヲ望ト曰フ

詩ノ柳篇朱注徒ニ面之
ヲ携ノノミニ非ズ而ノ又
之ニ示スニ事ヲ以テ徒ニ
面之ヲ命スルノミニ非ズ而
ノ又其耳ヲ提グ之ヲ喻ス
所以ノ者詳且切ナリ
易ノ泰卦ニ九ニハ荒ヲ包
テ退遺セズ朋七
宋ノ王曾父ヲ進退ス人之
ヲ知ル莫シ范仲淹曰公盛
德獨リ汲引ヲ少クノミト
曾曰政ヲ執リ而メ恩ヲ
ノ已レニ歸セシメバ怨ハ將ニ
誰ニ歸セントスルカト
莊子ニ耶人鼻端ニ堯ツケ
匠石ヲノ之ヲ斲ラシムルニ
堯去テ鼻傷ズ耶人立テ
容ヲ改メズト云
平原君曰毛先生楚ニ
至リ趙ヲ九鼎欵詔ヨ

人ノ薦引ヲ求ムルニ幸ニ先容ヲ為セ

ト曰ヒ

人ノ文ヲ改ヲ求ニ郢斲ヲ賜ハンヲ望

ト曰フ

重鼎ノ言ヲ借ルハ是人ノ事ヲ言フ

ニ托スルナリ

玉趾ヲ移スコトヲ望ハ是人ノ親カラ行

クヲ浼スナリ

多ク推轂ヲ蒙ルハ人ノ舉薦ヲ謝スル

ノ辭ナリ

故事必讀人事

リモ重カテゾムト
 法齊ノ孝公魯公ヲ伐ツ
 展僖ヲソ師ヲ擣ハシテ曰
 寡君君ノ親カラ玉趾ヲ
 舉ゲ擣ニ故邑ニ辱ウセン
 トスルヲ聞下臣ヲ擣ヲ
 持シ事ヲ執シム
 推轂ハ人ヲ推シ薦ムル
 一車轍ノ運轉スルガ如
 キヲ云フ
 人ノ儀則ト為リ僭率事
 ヲ作テ頭トナルハ衣ノ領
 袖アルガ如キナリ
 後漢ノ許都從兄靖ト俱
 高名アリ好テ共ニ郷
 黨ノ人物ヲ論ス月朔每
 ニ輒チ其品題ヲ更タム
 故ニ汝南ノ俗月旦ノ評
 論アリ
 揚敬ガ項斯ニ贈ル詩ニ云幾

故事以讀

領袖ト作ルヲ望ハ人ヲ僭首ニ託スル
 ノ説ナリ
 言辭爽ハサル之ヲ金石ノ語ト謂ヒ
 郷黨ノ公論之レヲ月旦ノ評ト曰フ
 人ニ逢テ項斯ヲ説ト云ハ善行ヲ表揚
 スルナリ
 名ノ下ニ虚士無シ果シテ是レ賢コキ
 人アリハ好ハズ
 惡ニ黨ノ非ヲ為スヲ朋奸ト曰ヒ
 財ヲ盡メ賭博スルヲ狐注ト曰フ
 徒ニ事ヲ了スルヲ但責ヲ塞クヲ求
 ト謂ヒ
 明察ヲ戒シムルヲ必スシモ苛求セズ
 ト曰フ
 命ニ方フハ是レ人ノ言ニ逆フナリ
 拘扱ハ是レ已レガ性ヲ執スルナリ
 覬覦ト曰ヒ睥睨ト曰フハ總テ是私心
 ノ窺望ナリ
 倥偬ト曰ヒ旁午ト曰フハ皆ナ人事ノ
 紛紜ヲ言フ

度見君詩盡好及觀標格
 過于詩平生不解藏人
 善到處逢久說項斯
 關立本家代画ヲ善ス
 荆州ニ到リ張僧繇ノ舊
 迹ヲ觀ル初メ往テ曰ク虚
 ク名ヲ得ルノミト明日又
 往テ曰ク猶ホ是レ近代ノ
 雅詩ナリト明日又往テ曰
 名下定テ虚士无シト坐
 臥之ヲ觀其下ニ留宿スル
 十日去ルヲ能ハザリト云
 宋ノ真宗ノ時契丹澶淵
 ニ入寇ス宰相寇準上ニ
 勸メ兵ヲ督ノ親カラ之ヲ
 禦クニ士卒銳ヲ奮フ契
 丹大慙テ退ク上益厚ク
 準ヲ待ス玉鉞若準ヲ上
 ニ潛ノ曰陛下博ヲ知ルカ
 輸錢盡シト欲スレハ乃チ

徒ニ事ヲ了スルヲ但責ヲ塞クヲ求
 ト謂ヒ
 明察ヲ戒シムルヲ必スシモ苛求セズ
 ト曰フ
 命ニ方フハ是レ人ノ言ニ逆フナリ
 拘扱ハ是レ已レガ性ヲ執スルナリ
 覬覦ト曰ヒ睥睨ト曰フハ總テ是私心
 ノ窺望ナリ
 倥偬ト曰ヒ旁午ト曰フハ皆ナ人事ノ
 紛紜ヲ言フ

故事以讀 人事

盡ク有ル所ヲ出ス之ヲ
注ト謂フ前ニ澶淵ノ役
準陛下ヲ以テ孤注ト為
リト上乃チ準ノ相ヲ罷
出テ陝州ニ知タラシム
書ニ命ニ方ヒ族ヲ地ル
トアリ
旁牛ハ縱横ナリ
深ク隱僻ヲ求ルモ縫
吹開テ以テ疵ヲ求ルカ如シ
韓愈ガ柳子厚ノ墓誌ノ畧
肺肝ヲ出シ相示シ天日ヲ
指テ涕泣シ死生ヲ誓フ
相負カス眞ニ信ス可キカ
若キモ一旦小利害ニ臨ミ
僅カニ毫髮ノ如ク沈
眼ヲ及ノ猶舜ニ落ルモ
相識ストシ一ニ手ヲ引テ
救ハサルノミナラズ
及テ之ヲ擠シ又石ヲ下

小過必ラス察スル之ヲ毛ヲ吹テ疵ヲ
求ムト謂ヒ
患ニ乗ジ相ヒ攻ル之ヲ穽ニ落ノ石ヲ
下スト謂フ
慾心ノ厭キ難キハ谿聲ノ如ク
財物ノ費エ易キハ漏卮ノ若シ
茅塞ヲ開クヲ望ムハ是人ノ教導ヲ求
ムルナリ
多ク藥石ヲ蒙ルハ是レ人ノ箴規ヲ謝
スルナリ

ス者皆是ナリ云々
溪聲ハ猶ホ深坑ト言フ
ガゴトシ
卮ハ酒器ナリ卮漏レバ隨
テ酌ミ隨テ乾ク
嘉言ノ人ニ益アル藥石
ノ能ク病ヲ治スルガ
如シ
文選云玄軌前覺ニ芳
芳躅ハ前賢ノ美辭ナリ
格ハ至ナリ格言ハ至言ニ
同ジ 宋ノ范子淵河ヲ
開テ功无シ哲宗蘇軾ニ
命シ詔ヲ草メ之ヲ賤ス
時ニ至言ト稱セリ詔ニ
曰ク限リ有ノ財ヲ以テ必
ス成ルヘカラザルノ役ヲ
興シ事无キノ衆ヲ驅テ
之ヲ必死ノ地ニ置ク云

芳軌、芳躅ハ皆ナ善行ノ摹ス可キナリ
格言、至言ハ悉ク嘉謨ノ聽クベキナリ
言無キヲ緘黙ト曰ヒ
怒ヲ息ヲ霽威ト曰ヒ
包拯ハ色笑寡ナク人其ノ笑ヒヲ比シ
テ黄河清ムト為シ
商鞅カ最モ兇殘ナル常ニ囚ヲ論スル
ヲ見而ノ涓水赤シ
仇深キヲ切齒ト曰ヒ
人ノ笑ヒヲ解頤ト曰ヒ

故事少讀

人事

百廿三

緘黙ハ綴ヲ以テ其口ヲ
 緘テ言ハザラシムルガ
 如キナリ
 孔子周鼎ヲ觀ルニ金人アリ
 其口ヲ三緘シ而シ其背ニ
 銘ノ曰古ノ言ヲ慎ムノ人
 也
 唐ノ太宗怒甚シ魏徵神
 色變ヒズ上之ガ為ニ對
 成ス霽ハ止也
 宋ノ包拯性峭嚴未タ嘗
 テ笑容アラズ
 秦ノ商鞅法ヲ用ル嚴酷
 囚ヲ論スル斬殺多シ
 頤ハ口輔ナリ笑ハ則チ
 頤開ク之ヲ解頤ト云
 胡盧ハ大笑ナリ
 同僚ニ叙シ幸ヒニ同寅
 フ獲ルト曰フ 書ニ寅

人ノ微笑ヲ莞爾ト曰ヒ
 口ヲ掩テ笑フヲ胡盧ト曰
 大ニ笑フヲ絶倒ト曰
 衆ノ笑ヲ哄堂ト曰フ帝ニ囚
 晉位ニ賢ヲ待之ヲ左ヲ虛
 官僚署ヲ共ニスル之ヲ同
 人ノ信ヲ失スルヲ爽約ト
 食ト曰フ
 人ノ誓ヲ忘ルヲ寒盟ト曰
 又汗ヲ反
 スト曰フ

フ同ウシ恭ヲ協ヘ衰ヲ
 和セヨ寅ハ敬ナリ君臣
 當ニ其寅畏ヲ同ウシ其
 恭敬ヲ協フベキヲ言フ
 左傳孟武伯郭重ヲ惡ム
 曰ク何ゾ肥タルヤ郭公曰
 是言ヲ食フ多シ能ク
 肥ルヲ無カラシヤト
 寒盟寒ハ約ニ背クナリ
 劉向カ封事ニ云フ帝令ハ
 汗ノ如シ出テ歎スル者ナリ
 今令出テ未ダ時ヲ踰ボノ
 之ヲ反ス是レ汗ヲ反スナリ
 趙林武云心ニ貫シ骨ニ鑄
 ム李義山云心骨ニ刺鋸
 スト
 魏武子疾ム子魏顆ニ命
 ノ其孿妾ヲ嫁セシム成
 ニノ復ク曰ク殉葬セシ
 メヨト顆曰ク疾ヒ病ナ

心ニ銘シ骨ニ鏤ムハ徳ニ感シテ忘難
 キナリ
 草ヲ結ビ環ヲ邸ムハ恩ヲ知テ必ス報
 ルナリ
 自カラ其ノ災ヲ惹ク之レヲ衣ヲ解テ
 火ヲ包ムト曰ヒ
 其害ヲ離ルヲ幸トスルハ真ニ網ヲ
 脱メ淵ニ就カ如
 兩ナカラ相容レザル之ヲ拮鑿ト謂ヒ
 兩ナカラ相投ゼザル之ヲ氷炭ト謂フ

故事必讀
 人事

レバ則チ心乱ル吾其ノ初ニ從ハント之ヲ察ス後
 願泰將杜回ト戦フキ一
 老人アノ草ヲ踏テ回
 フ躓カシム因テ之ニ捷
 タリ夜老人ヲ夢ム曰ク
 余ハ乃チ汝ガ嫁セシメ
 タル妾ノ父ナリ故ニ草
 フ踏テ其思ニ報ユト
 漢ノ揚保傷ヲ被ルノ黃
 フ救フ雀双環ヲ御来テ
 之ヲ報セリ
 崔浩魏主嗣ニ對ノ曰ク
 劉裕秦ニ克テ歸リ心其主
 ヲ慕フ関中ハ華我雜錯
 ノ風俗勁悍裕ヲ粉化ヲ
 以テ之ニ施カント欲スルハ衣ヲ
 解テ火ヲ包ミ綱ヲ張テ虎
 ヲ捕フルニ異ナルナシ云々ト
 圓鑿ニノ方枘ナレハ齟齬

彼レ此レ合ハサルヲ齟齬ト曰ヒ
 前ント欲ノ前サルヲ越起ト曰フ
 落落ハ合ハザルノ詞
 區々ハ自謙スルノ語
 竣者ハ事ヲ作テ已ニ畢ルノ謂ヒ
 釀者ハ財ヲ斂テ酒ヲ飲ノ名ナリ
 其事ヲ贊襄スル之ヲ玉成ト謂ヒ
 氷裂完タウシ難キ之ヲ瓦解ト謂ヒ
 事ニ低昂アルヲ軒輕ト曰ヒ
 力相上下スルヲ頡頏ト曰フ

ノ入りガタキ也枘鑿ト
 ノミ云ハ略言ナリ
 區々ハ其畫スル所アリテ
 普ク通セサルヲ謂ナリ
 事ノ賤ルヲ土崩尾解
 ト曰フ
 輕ハ車ノ覆テ亦ムナリ
 軒ハ車ノ仰テ後ル也
 飛デ上ルヲ頡ト曰ヒ飛
 テ下ルヲ頏ト曰フ
 左傳介子推曰ク尤シテ
 之ニ效フハ罪又甚シト
 尤ハ咎ムル也
 拮据ハ手口共ニ作ス良
 鞅掌ハ容ヲ失フ頡頏ノ
 状ヲ云フ
 士ノ識者ニ遇ガルハ明珠
 暗ニ投スルカコトキナリ
 夫子ノ道ヲ以テ反テ夫子
 ヲ害スルハ室ニ入テ戈ヲ操

平空ニ事ヲ起スヲ俑ヲ作ルト曰ヒ
 前ニ仍テ弊ヲ踵グヲ尤ニ效ト曰フ
 手口共モニ作スヲ拮据ト曰ヒ
 容ヲ修ルニ暇ザルヲ鞅掌ト曰フ
 手足並ビ行クヲ匍匐ト曰ヒ
 首ヲ俯メ而メ思ヲ低徊ト曰フ
 明珠暗ニ投ズルハ大ニ才能ヲ屈スル
 ナリ
 室ニ入テ戈ヲ操ハ自カラ相魚肉スル
 ナリ

故事必讀 人事

ルナリ
 韓愈カ陳生ニ答フル書ニ曰
 是謂ニ聽ヲ聳ニ借リ道
 フ盲ニ問フ未ダ其得ルヲ
 見ザルナリ
 周瑜推ヲ諫メ前州ヲ許
 ス劉備之ヲ聞テ曰智謀
 之士見ル所略同シ孔明
 狐ヲ諫メテ行ク莫レト
 言フ亦見ニ此ニ及マ
 リ
 常人ニシテ妄ニ斧ヲ魯
 班ノ門ニ弄スル者豈分
 量ヲ知テシヤ
 左隱元祭仲曰姜氏何
 ノ厭フカ之ヲ早ク之
 ガ所ヲ為シニ如カス滋
 護セシムル無ケレ蔓ス
 レバ圖リカタシ蔓草タモ
 除クベカラス况ヤ君ノ寵

教ヘテ愚人ニ求ムルハ是レ道ヲ盲ニ
 問フナリ
 道ヲ枉テ以主ヲ子スハ玉ヲ銜テ售ラ
 求ルカ如シ
 智謀ノ士ハ見ル所略同シ曰
 仁人ノ言ハ其利甚タ溥シ
 班門ニ斧ヲ弄スルハ分量ヲ知ラサル
 ナリ
 岑樓ニ木ヲ齊スルハ高卑ヲ識ラサル
 ナリ

弟ヲヤ
 諺曰ク舎ヲ道傍ニ作レ
 バ三年成ラズ(教言ニ惑
 ハサルハニ因テ言フ)
 左僖五士葛藟ノ曰狐裘
 尙茸一國三公吾誰適從
 元ノ阿沙不花武帝ヲ諫
 テ曰ク惟麴蘖是好シ姬
 嬪是耽ルハ猶ホ双斧孤
 樹ヲ伐ルカゴトシ未ダ
 顛仆セザル者アラズ
 膠ハ水ヲ澄シテ清カラシ
 ムル者ナレ氏一寸バカリ
 ノ膠ニテ黄河ノ水ハ澄
 清スベカラズトナリ
 人技執アリテ自カラ忍
 プ一能ハザルハ身ノ癢キ
 ヲ忍ブ能ハザルガ如シ
 莊子云何居乎形固ク槁
 木ノ如ナラシム可キ心固ク

勢延テ過ルヲ莫キハ之ヲ滋蔓圖リ難
 シト謂ヒ
 禍心ヲ包藏スル之ヲ人心測リ叵タ
 シト謂フ
 舎ヲ道傍ニ作ルハ議論多而ノ成難キナ
 リ
 一國三公ハ權柄分レテ一ナラサルナ
 リ
 事ニ奇縁アルヲ三世幸アリト曰ヒ
 事皆ナ意ニ拂ヲ一事成無シト曰フ

故事必讀

人事

百廿六

死灰ノ如クナラシムベケンヤ
山谷詩ニ座上若有江南
客莫向春風唱鷓鴣鷓鴣
鷓鴣ハ江南ノ産スル所客
鷓鴣ノ曲ヲ聞ハ則歸ヲ
思フ
秦ノ子楚楚ニ質タリ扶
賈呂不韋見テ之ヲ憐テ
曰ク此綺質居クベシト
子楚ヲ以テ財貨ニ方アル
ナリ
漢ノ時諸呂乱ヲ作ス周
勃令ヲ軍中ニ下ノ曰ク
劉氏ノ為ニスル者ハ左ヲ
袒ゲト軍中皆左袒ス
唐ノ蘇味道相ト為リ人
人ニ謂テ曰事ヲ決スル明
白ナルヲ欲ヒザレ悞クハ則
悔アラシク後ヲ摸テ兩端ヲ
持ノ可ナリト世ニ摸稜ノ

酒色是レ耽ルハ雙斧ヲ以テ孤樹ヲ伐
ルカ如ク
力量勝ヘサルハ寸膠ヲ以テ黄河ヲ澄
スカ如ク
兼聽キハ則明カナリ偏ニ聽クハ則暗
シト云ハ此魏徵ガ太宗ニ對ルナリ
衆怒ハ犯シ難ク專欲ハ成シガタシト
云フハ此子産ノ子孔ヲ諷スルナリ
長スル所ヲ逞セント欲ハ之ノ心煩ノ
技癢ト謂ヒ

手ト号ス
淮南王安曰漢廷ノ大臣
獨汲黯節ヲ守リ義ニ死
セン丞相弘等ハ發蒙振
落ノ如キノミト物上ニ蒙
フ塵ヲ發ヒ去リ枝上ノ葉
ヲ振ヒ落スノ義
項羽趙ヲ救フ急ニ兵ヲ
引釜ヲ破リ船ヲ沉メ再
轉ノ渡リ且食ヒザルヲ
示スナリ
霍光ノ女宣帝ノ后ト為ル
性驕侈ナリ徐福上言ス
宜ク時ヲ以テ抑制スベシ
ト上聽バ後霍氏誅滅ス
ルニ及ビ或人福ノ為ニ上
書メ曰ク客主人ノ竈ノ直
突シ旁ニ積薪アルアルヲ
見請フ突ヲ更メ其薪ヲ
徙サン然ラズンバ火患

絶エテ情欲ノ無キハ之レヲ槁木死灰
ト謂フナリ
座上ニ江南アルハ語言須ラク謹マク
往來白丁無キハ交接皆ナ賢ナルナリ
將ニ好所ニ近ントスルニ漸佳境ニ入
ト曰
端シ無ク倨傲ナルヲ傍若無人ナリト
曰フ
事ヲ借テ役ヲ寬スルヲ假ヲ告クト曰

敬事必讀

人事

百廿七

アラン主人應ゼス俄ニノ
 果ノ火ヲ失ス鄰里共ニ救
 フテ息スヲ得タリ於是
 牛ヲ殺シ置酒ノ灼爛ノ
 者ニ謝シ而ノ突ヲ曲ルヲ
 言シヲ録ス人主人ニ謂テ曰
 ク突ヲ曲ガ薪ヲ徙スニ恩澤ナ
 ク頭ヲ焦シ額ヲ爛スルヲ上
 客ト為ス耶
 漢ノ陳寔ノ家ニ夜ル盜ア
 リ室ニ入テ梁上ニ在リ
 寔陰リニ見起テ子孫ヲ
 呼ビ之ニ訓テ曰ク夫レ
 人ノ不善ナル未タ必シモ
 本ヨリ惡ナラズ習ヒ性ト
 成リ遂ニ此ニ至ル梁上ノ
 君子ノ如キ是ナリト盜地
 ニ投シ罪ニ歸ス
 晋陶侃船ヲ造ル其竹頭
 木屑皆之ヲ歲ス衆解ヒ

錢ヲ將テ託ヲ囑スルヲ黃緣スルト曰
 事ニ大利アルヲ奇貨居ク可シト曰ヒ
 事宜前ニ鑒バキヲ覆車當戒ヘシト曰
 彼ヲ外ニシ此カ為メニスルニ左袒ト
 曰ヒ
 事ニ處シテ兩端ヲ持スルヲ摸稜ト曰
 敵ノ甚摧キ易キヲ蒙ヲ發シ落ヲ振ト
 曰ヒ

ス後雪晴ニ會シ廳地餘
 濕ナリ乃木屑ヲ以テ地ニ
 鋪ク蜀ヲ伐ツニ及ヒ竹頭
 ヲ以テ釘ト作シ船ヲ造ル
 其精密類子如此
 唐ノ祝欽明祭酒ト為ル
 中宗群臣ヲ宴ス欽明ハ
 風ノ舞ヲ能ス地ニ據リ
 頭ヲ搖カシ目ヲ眩ス帝大
 ニ笑フ盧藏用菓ノ曰ク
 是レ五經ヲ舉テ地ヲ掃
 フナリト
 王敦謀反スアルカ一木ヲ
 將テ天ヲ撐フルト夢ム
 許真君曰ク一木ハ是未ノ
 字ナリ未ダ動クベカラサ
 ルノミト
 呂安籍康ヲ訪フ康外出
 シ兄喜アリ出テ之ヲ延
 クニ入ラズ門上ニ題シ

志シ必勝ニ在ルヲ釜ヲ破リ船ヲ沉ト
 曰フ
 曲突薪ヲ徙シテ恩澤無キハ豫防ノ力
 ノ大ナルヲ念ハサルナリ
 頭ヲ焦シ額ヲ爛ノ上客ト為ハ徒ニ急
 ヲ救ノ功宏ナルヲ知ナリ
 賊人ヲ梁上ノ君子ト曰ヒ
 強梗ハ化外ノ頑民ヲ曰フ未だ
 木屑竹頭ハ皆ナ有用ノ物為リ
 牛溲馬渤ハ藥物ノ資ニ備ヘシ

人事
 百廿八

故事必讀

鳳字ヲ作テ去ル鳳字ハ
凡鳥其兄ノ與ニ談スル
ニ足ラサルヲ示シタル
ナリ
午字ヲ書スルハ牛ノ頭
ヲ出サ、ルヲ謂フナリ
昔一婦人アリ其夫ヲ尋
ルニ見ズ麥ヲ破ルト夢
ム計者曰ク麥ヲ破レバ
穀ヲ見ル穀ト夫ト同シ
必ス夫ヲ見ント後果シ
テ然リ
庾統其子ヲ失ヒ人ト梨
ヲ分ツト夢ミ分離スベ
キヲ以テ心甚タ憂フ文
道林曰ク梨ヲ分クバ
行ヲ見ント果シ然リ
秦檜和議ヲ成サント欲シ
岳飛ヲ殺スベキヲ思ヒ異
謀アリト誣ヒ飛父子ヲ獄

五經地ヲ掃ラフハ祝欽明カ自カラス
文ヲ褻ルナリ
一木天ヲ撐ハ晋ノ王敦ノ未擅動スヘ
カラサルナリ
鳳ヲ題シ午ヲ書スハ友ヲ譏リ親ヲ譏
ルノ隱語ナリ
麥ヲ破リ梨ヲ剖クハ夫トヲ見子ヲ見
ルノ奇夢ナリ
毛遂カ片言九鼎ナリトハ人其言ヲ重
スルナリ

ニ下シ何鑄ニ命ノ之ヲ鞠
ス飛背ヲ以テ鑄ニ示ス舊
史シテ盡忠報國ノ四大字
アリテ深ク其膚裡ニ入ル
後漢ノ揚震性公廉子孫
蔬食歩行ス或産業ヲ開
カシメント欲ス震曰ク後
世称ノ清白吏子孫ト為
ス此ヲ以テ之ヲ遺ス亦タ厚
カラズヤト
倒ニ太阿ヲ持チ柄ヲ以テ
人ニ授クルハ権ノ已レニ属
セザルヲ言フ
唐ノ太宗曰ク業ヲ創ルト
成ルヲ守ルト孰レカ難キ
房玄齡曰ク業ヲ創ル難
シ魏徵曰ク成ヲ守ル難シ
宗澤岳飛ニ謂テ曰ク爾
ヲ智勇材統古良將モ
過ル能ハズ然レハ野戰

季布カ一諾千金ナリトハ人其信ニ服
スルナリ
岳飛ハ背ニ盡忠報國ヲ涅シ
揚震ハ惟清白ヲ以テ家ニ傳フ
上弱ク下強キヲ尾大ニノ掉ハズト曰
ヒ
上権ヲ下ニ奪ヲ太阿倒マニ持ツト曰
フ
今ノ世ニ當テハ但君ノ臣ヲ擇フノミ
ナラス臣モ亦君ヲ擇フ

故事必讀

人事

百廿九

ヲ好ハ萬全ノ計ニ非スト
因テ之ニ陣圖ヲ授ク飛曰
ク陣ノ而後戰フハ兵法之
常運用之妙ハ一心ニ存
スト澤其言ヲ是トス
漢ノ公孫述蜀ニ帝タリ
馬援往テ觀レ述感シ
陸衛ヲ陳シ延キ入ル接隗
翼ニ謂テ曰公孫述嗚ヲ
吐テ國士ヲ迎ヘズ反テ
邊幅ヲ修飾ス偶人形ノ
如シ何ゾ天下ノ士ヲ稽ル
ニ足ラン
唐ノ鄭群天性和樂家ニ
居リ人ニ事フルト交遊
ヲ待スルト一心ヲ持シ未
ダ嘗テ節ヲ變メ崖岸斬
絶ノ行ヲナサズ
事ヲ作スノ精シカラサルヲ
鹵莽滅裂ト曰フ

命ヲ受ノ主ハ獨業ヲ創ノ難キノミナ
ラス成ヲ守亦易カラス
生平ノ為所皆人ニ對メ言ヘキハ司馬
光ノ自カラ信スルナリ
軍用ノ妙ハ惟タ一心ニ存スルトハ岳
武稷ノ兵ヲ論スルナリ
邊幅ヲ修サルハ人ノ儀容ヲ飾ラサル
ヲ謂ヒ
崖岸ニ立タザルハ人ノ天性和樂スル
ヲ謂フ

漢ノ高祖生平誤甚ダ
多シ唐ノ中友斷曰ク
高祖ノ誤ル處ハ皆ナ不學
ニ緣ル改ル處ハ皆ナ性
明達ニ緣ルト
橋詳ノ恭ヲ為スヲ足恭
ト曰フ
原ハ恩ニ同謹厚ナリ郷中
皆ナ稱ノ謹厚ノ人ト為ス
ヲ謂フ
事ヲ作スノ輕率ナルヲ
孟浪ト曰フ
精詳云々凡事豫シメス
レバ則チ立ノ意ナリ
晋桓溫常ニ曰ク大丈夫芳
ヲ百世ニ流ル能ハズバ亦タ
當ニ莫ヲ万年ニ遺スベ
シト
武王曰ク商ノ罪貫盈天
命ノ之ヲ誅ス

最爾公膺ハ其ノ甚タ少ナルヲ言ヒ
鹵莽滅裂ハ其精シカラサルヲ言フ
誤ル處ハ皆ナ不學ニ緣リ
強テ作スハ乃自然ヲ成ナリ
事速成ヲ求テ等ヲ躐ト曰ヒ
禮貌ニ過クルヲ足恭ト曰フ
忠孝ヲ假ル者之レヲ鄉原ト謂ヒ
人群ヲ出ル者之レヲ巨擘ト曰フ
孟浪ハ輕薄ニ由リ
精詳ハ暇豫ニ出ツ

故事必讀
人事

故事必讀

治容云々慢藏云々二句易
繫辭ニ出
物ヲ蔵ムル謹慎ナラザレバ
人ニ盜賊ヲ為スヲ教カ如
ク故ナク治艷之容ヲ修飾
スルハ則チ人ニ淫乱ヲ教
ガ如キ一般ナリ
諸葛亮孫權ニ説テ曰將
軍ハ江東ヨリ起リ劉豫
州ハ衆ヲ漢南ニ收メ曹
操ト天下ヲ並ビ争フ今
操荆州ヲ破リ英雄武ヲ
用ル地无シ故ニ豫州逃
遁メ此ニ至リ云々
展ハ舒ルナリ米ハ藪藉
ナリ
趙括少ウシ兵法ヲ學ブ
父奢難スル能ハズ然レモ
善ト謂ハズ母其故ヲ問フ
答テ曰ク兵法ハ死地ナリ而

善ヲ為セハ則チ芳ヲ百世ニ流シ
惡ヲ為レハ則チ臭ヲ萬年ニ遺ス
過チノ多キヲ矜惡ト曰ヒ
罪ノ滿ヲ貫盈ト曰フ
常ニ治容淫ヲ誨フルヲ見ル
須ラク慢藏盜ヲ誨ルヲ知バシ
管中ヨリ豹ヲ窺ガフハ見ル所多カラ
ス
井ニ坐メ天ヲ觀ハ知識廣カラサルナ
リ

ルニ括馭ク之ヲ言フト
蘭相知曰ク括徒ニ能ク父
ノ書傳ヲ讀テ變通ヲ知
ラズト
唐ノ張弘靖曰ク天下事
無ケレバ爾ガ輩兩石弓ヲ
挽クモ二丁字ヲ識ルニ如カス
ト蓋シテ一ニハニ作ル象文
ハトト相似タリ傳寫論
テ丁ト作ナリト
陳王武臣ノ家ヲ謀セント欲
ス相國房君諫テ曰ク秦
未ダ亡ビズ又武臣等ノ家ヲ
誅ス此又一秦ヲ生スルナ
リト
左文十三晋ノ士會秦ニ在
リ晋人謀テ之ヲ歸ス行ニ
及テ秦ノ大夫饒朝之ニ
贈ルニ策ヲ以テノ曰ク子
秦ニ人无シト謂フ无カ

勢ノ乘スヘキ無キハ英雄武ヲ用ルノ
地無キナリ
道アルキハ則見ハルハ君子展采ノ思
アレハナリ
名利ヲ求テ達スルヲ捷足先得タリト
曰ヒ
士ノ遲滯ヲ慰スルヲ大器ハ晚成スト
曰フ
變ニ通スルヲ知ラサルニ徒ニ父ノ書
ヲ讀ト曰ヒ

故事必讀

人事

レ吾謀適用ヒラレザルナ
 司馬懿曹操ニ謂テ曰ク今
 漢中ヲ見ルニ益州震動
 ス兵ヲ進メ之ニ臨マバ勢
 ヒ必ス瓦解セン操曰ク人
 足ルヲ知ラズ既ニ隴ヲ得
 テ復タ蜀ヲ望ムト隴ハ益
 州ナリ
 孔子欬器ヲ觀テ曰ク試
 ニ水ヲ注グ中ナレバ則チ正
 シク滿レバ則チ覆ル夫レ物
 アンテ滿テ覆ラザル者ア
 ランヤ
 東方朔談諧ヲ好ム上俳
 優ヲ以テ之ヲ蓄フ談ハ調
 戲ナリ諧ハ和合ナリ俳
 優ハ今ノ調戲雜劇人
 ナリ
 龐共魏王ノ譏ヲ容ンテ

自カラ聰明ト作スヲ徒ニ已レカ見ヲ
 執ルト曰フ
 淺見ヲ膚見ト曰ヒ
 俗言ヲ俚言ト曰フ
 時務ヲ識ル者ハ俊傑ニ在リ
 幾ニ先ニ昧者ハ明哲ニ非ス
 村夫ハ一丁ヲ識ラス
 愚者豈一得無ランヤ
 一丁ヲ抜キ去ルヲ一害ヲ除クト謂ヒ
 又一秦ヲ生スルハ是一仇ヲ増スナリ

愚ヒ王ニ謂テ曰ク一人アリ
 市ニ虎アリト言ハ信ゼン乎
 曰ク信ゼン二人アリト言ハ信
 ゼン乎曰半疑半信セン曰ク三
 人言ハ如何曰ク之ヲ信セン共
 曰ク夫レ市ニ虎无キ明カナリ
 而ノ三人アリト言ハバ市虎
 ヲ成ス願クハ王之ヲ察セヨト
 中山靖王曰ク幾沫山ヲ漂
 ハシ衆蚊雷ヲ成ス是ヲ以
 文王羨里ニ囚ハルト
 詩註ニ萋菲ハ小文ノ貌ナリ
 ハ水中ノ介蟲文采アリ
 テ錦ニ似タリ因テ貝錦ト
 成ス人ヲ譏スル者人ノ小
 過ニ因リ飾テ大罪ト成スニ
 比シ言フナリ
 江淮ノ間短狐アリ城ト名ク
 能ク沙ヲ含テ人影ヲ射ル
 ニ人輒チ病ス亦名テ射

言ヲ輕スルヲ戒ムルニ恐ハ垣ニ漏ス
 ル耳アラント曰ヒ
 敵ヲ輕スルヲ戒ムルニ秦ニ人無シト
 謂フ莫カレト曰フ
 同惡相ヒ幫クル之ヲ桀ヲ助テ虐ヲ為
 ト謂ヒ
 貪心厭ク無キ之レヲ隴ヲ得テ蜀ヲ望
 ト謂フ
 當ニ器滿ルキハ則チ傾クヲ知ベク
 須ラク物極ルキハ則チ反ルヲ知ベシ

工ト為
 鳩ハ毒鳥ナリ黒身赤目
 喫蛇ヲ食フ其血ヲ以テ
 飲食ヲ歴レバ則チ人ヲ殺
 ス
 李義甫ハ容貌温恭人ト
 語必多ク笑フ而ノ狡
 險忌刺時人笑裡藏刀
 ト謂ノ又陰柔ヲ以テ人ヲ
 害スルヨリ号シ李猫ト為
 莊子ニ許由曰ク庖人庖ヲ
 治セスト雖尸祝樽俎ヲ
 越テ之レニ代ラズ
 漢王方ニ食ス子房食ス
 ル所ノ箸ヲ請ヒ借而箸ト
 シ前世ヲ度リ湯武ノ把
 彩ヲ封スル今時ノ若サ
 ルヲ見而復ク六國ヲ立マ
 カラザルヲ説明セシナリ
 漢武文學ヲ招ク汲黯曰

嬉戲ヲ喜フヲ名ケテ弄ヲ好ムト為シ
 笑諛ヲ好ムハ之レヲ諛諧ト謂フナリ
 讒口交ゴモ加フレハ市中虎アルヲ信
 ス可ク
 衆奸釁ヲ鼓スレハ蚊ヲ聚テ以テ雷ヲ
 成ス
 成ハシ
 萋菲錦ヲ成スハ譖言ノ禍ヒヲ釀スヲ
 謂ヒ
 沙ヲ含デ影ヲ射ハ鬼蜮ノ人ヲ害スヲ
 謂フ

陸下内多欲而ノ外仁義
 ヲ施ス奈何唐虞ニ效ハシ
 ト欲スルヤト上退ヲ怒ル
 甚シ或黜ニ告グ黯曰天子
 輔臣ヲ置寧從設セシメン
 ヤト
 宋江南ヲ伐ッ徐鉉奏兵
 ノ罷シテ上怒テ曰天下
 一家臥榻ノ側豈他人ノ軒
 睡ヲ容シヤト
 唐ノ高祖上皇ニ從テ未
 央宮ニ置酒ス上皇突厥
 結利ニ命メ起テ舞ハシ
 メ又南蠻ニ命メ詩ヲ詠
 ゼシメ既ニシテ笑テ曰ク
 胡越一家古ヨリ來ル
 アリト

鍼砭ハ病ヒヲ治スル所以
 鳩毒ハ必ス人ヲ殺テ致ス
 李義甫ハ陰柔ニ物ヲ害ス人之ヲ笑
 裡藏刀ト謂ヒ
 李林甫ハ奸諛人ヲ陷イル世之ヲ口蜜
 腹劍ト謂ヘリ
 人ニ代テ事ヲ作スヲ庖ニ代ト曰ヒ
 人ノ與ニ謀ヲ設ルヲ箸ヲ借ルト曰フ
 事ヲ見テ真ヲ極ルノ明ナルヲ火ヲ觀
 カ若シト曰ヒ

秦ノ先伯醫舜ヲ佐ケテ
功アリ姓嬴ヲ賜フテヨ
リ歴世連綿タリ莊襄王
ノ趙ニ質タリシ時大賈
呂不韋嫁メル美姬ヲ獻
シ秦政ヲ生ハシ是レヲ始皇
トス姓嬴ト雖モ實姓ハ呂
ナリ
東晋ノ元帝ハ瑯琊王親
ノ子ナリ始メ王ノ妃ト
史牛金ト通シテ齋ヲ生
ム是レヲ元帝トス姓司
馬ト雖トモ實姓ハ牛ナ
リ

敵ニ對シテ勝チ易キヲ執ヒ枯ヲ摧ク
カ若シト曰フ
漢武ハ内多欲ニメ而シテ外仁義ヲ施コ
シ
廉頗ハ國難ヲ先ニメ而シテ私仇ヲ後ニ
ス
臥榻ノ側豈他人ノ鼾睡ヲ容ンヤトハ
宋ノ太宗ノ語
一統ノ世眞ニ是レ胡越一家トハ唐ノ
高祖ノ時ナリ

中宗ノ后韋氏武三思ト
私通ス一日三思ト双陸
ス中宗乃ケ親カラ為ニ
鐵簿ヲ點セリ

楊貴妃安祿山ヲ養フテ
兒ト為宮女ヲシテ祿山
ヲ捧シテ之ヲ洗ハシム
明皇往テ之ヲ觀喜ンデ
貴妃ニ金銀錢ヲ賜ヒ洗
兒錢ト為
鶉鵲ノ屬ハ本々疆々ト
シテ居常匹アリ飛バ則
チ相隨フノ貌アリ云フ
鹿ハ北獸ナリ獸類ハ父

暴秦ハ呂ヲ以テ嬴ニ易フ是レ嬴ノ莊
襄ノ手ニ亡フナリ
弱晋ハ牛ヲ以テ馬ニ易フ是レ馬ノ懷
愍ノ時ニ滅ルナリ
中宗ハ親カラ為ニ籌ヲ韋后ニ點テ穢
ヲ千秋ニ播シ
明皇ハ洗兒錢ヲ貴妃ニ賜フテ醜ヲ萬
代ニ遺コセリ
類ニ非スメ相從フハ鶉鵲ニ如カス
父子北ヲ同ウスル之ヲ聚鹿ト謂フ

子ノ別ヲ知ラズ故ニ其咄
ヲ同ウスト亂ニ出

故事必讀

下ヲ以テ上ニ淫スル之ヲ蒸ト謂ヒ

野合、奸倫スル之レヲ亂ト謂フナリ

從來、淑慝途ヲ殊ニス惟タ後人ノ法戒

ニアリ

斯世清濁品ヲ異ニスルハ全吾輩激揚

ニ賴ル

疾病死喪

疾ハ病ノ初メ来ル急ナルナリ故ニ字矢ニ从フ
病ハ疾ヒノ加ハルナリ甚シキナリ
莊子ニ人ノ生ルハ氣ノ聚ル之聚ハ則チ生トシ散ス
レバ則チ死ト為ト為ト喪ハ服ヲ持スルナリ

福壽、康寧ハ人ノ同ク欲スル所ニ因リ

死凶、疾病ハ亦人ノ無ク能サル所ナリ

惟ダ智者ハ能ク調へ

達人ハ自カラ玉ニス

人ノ疾ヒヲ問フニ貴體和ニ違フト曰

ヒ

自カラ疾ヲ謂テ偶賤恙ニ沾サルト曰

フ

病ニ罹ル者ハ甚ハタ造化小兒ノ苦ム

ル所ト為リ

唐、杜審言疾甚シ宋之
問等省族ス答テ曰ク甚
ダ造化小兒ノ為ニ苦メ
ラルト
晋候病アリ杜者曰實沈
臺駘崇ヲ為スト子産曰
寔沈ハ乃參神ナリ臺駘
ハ汾神ナリ此ノ二者君
ガ身ニ及ハズト
晋ノ景公病アリ醫ヲ秦ニ
求ム未ダ至ズ公夢ニ疾化
ノ二豎子ト為リ曰ク彼

故事必讀

疾病死喪

故事必讀

ノ良醫ノ我ヲ傷シテ患ル
馬クニ之ヲ逃レン其一日ク
前ノ上膏下ニ居ラバ我ヲ
若カント醫至テ曰ク疾為
ムミカラス膏ノ上膏下ニ
アリ之ヲ攻ル可之ニ達スル友
ラズ藥至ラズ為ムミカラザ
ルナリト公曰ク良醫ヲト
厚ク礼シ之ヲ歸ヘセリ
「膏ハ腸ナリ膏ハ心下ナリ」
採薪ノ患ハ病アリテ平
生事トスル所ノ賤業ヲ
モ做シ得ズトノ謙辞ナ
リ
左傳河魚ノ腹疾奈何ハ
河魚ノ腐ルハ内ヨリ外
ニ及ブ今趙楚ノ為ニ圍
マレ報ヒ將ニ潰破セン
トスル河魚ノ腹疾ノ如
シトナリ

疾ヲ患ル者ハ豈是實沈臺駘災ヒヲ為
シヤト云フ
疾ノ療ス可カラサルヲ膏膏ト曰
平安無事ヲ恙カ無シト曰フナリ
採薪ノ憂ヒハ病ヲ抱テヲ謙シ言ヒ
河魚ノ患ヒハ是レ腹災ニ係ルナリ
以テ藥スルヲ勿ル可キハ其病ノ安ヲ
喜ナリ
厥疾瘳エサルトハ其病ヒノ篤キヲ言
フナリ

楚ノ惠王寒道ヲ食ス中
ニ蛭アリ庖人ヲ罪センヲ
恐レ強テ之ヲ吞ム王舊
病アリ蛭ヲ吞ニ因リ泄滯
ノ瘡疾乃チ瘡タリ
屬纊ハ綿ヲ以テ鼻間ニ
置キ氣ノ絶ルヤ否ヲ驗ス
ルナリ
曾子病ニ卧シ將ニ終ラ
ントスルニ季孫ノ賜ヲ所ノ
萃晚ノ簣ニ卧ス因テ曾
元ニ命シ扶ケ起サレテ
他席ヲ以テ之ヲ易ヘ席
ニ反リテ歿セリ
丁ハ當トリ父母ヲ憂傷ス
ルノ日ニ當ルヲ言フナリ
喪ニ居テ未ダ葬ラザンバ

瘡ハ君子ヲ病サス君子ヲ病マシムル
ハ政瘡ヲ為スノ所以也
トハ疑ヒテ決スル所以既ニ疑ハズン
ハ復何ゾトセンヤ
謝安鷄ヲ夢ミテ而シテ疾テ起サルハ
太歳ノ酉ニ在ルニ因リ
楚王蛭ヲ吞テ而シテ疾ヒ乃チ瘡ルハ厚
徳ノ人ニ及ニ因テナリ
將ニ纊ヲ屬トシ將ニ簣ヲ易トストハ
人ノ將ニ死トスルヲ言

故事必讀

喪礼ヲ讀ミ已ニ葬ムレバ
 祭礼ヲ讀ム
 言ハ音硯生ヲ甲ヲ言
 ト曰フ又劉總曰ク諺言
 ト同諺ハ直語ナリ贊ア
 リテ成ナシ喪言ハ文ナ
 フズ故ニ弔スルヲ言ト曰フ
 礼倚ルニ居ルハ親ノ外ニ
 在ルヲ哀ムナリ皆ニ寢塊
 ヲ枕ニスルハ親ノ上ニ在ル
 哀ミ敢テ自カラ安セザ
 ルヲ示スナリ
 礼註孝子ノ哀ハ天性
 ノ至極ヨリ發ス豈出過スミ
 ケンヤ聖人礼ヲ制シ以テ其
 哀ヲ節ス蓋シ順テ之ヲ喪
 スルナリ
 凡男兒疾病ノ將ニ終ラ
 ントスレバ則テ居ヲ正寢
 ニ遷シ以テ氣絶ヲ候フ女

古人ト作リ鬼録ニ登ルハ皆ナ人ノ已
 テニ亡フルヲ言フナリ
 親死スルキハ憂ニ丁タリ
 喪ニ居ルキハ則テ禮ヲ讀ム
 牀ニ在ル之ヲ尸ト謂
 棺ニ在之ヲ柩ト謂フ
 孝ヲ報グル書ニ訃ト曰ヒ
 孝子ヲ慰スルヲ唁ト曰ヒ
 往テ弔スルニ匍匐ト曰ヒ
 墓ニ廬スルヲ問ニ倚ト曰ヒ

人ノ若キハ仍ホ内寢ニ
 居テ必ズ遷サズ
 喪ニ居ルヲ哀子哀孫ト
 称シ祭ニ孝子孝孫ト称
 スル礼ナリ
 詩云父无シバ何ヲカ悒マ
 ン母无クシバ何ヲカ悵マ
 小祥ハ周年ナリ大祥ハ
 周年ナリ
 父死スレバ斬衰ノ服ヲ服
 ス母死スレバ齊衰ノ服ヲ
 服ス俱ニ三年ノ服ナレバ
 其制送アリ以下大功小
 功ニ至ルモ其限制ニ差
 アルナリ
 禫ハ祭ノ名禫服スルハ大
 祥ノ後一月間ナリ喪ヨリ
 此ニ至ル凡ソ二十七月ニ
 ノ也ム
 文公家礼ニ云フ孫ハ祖父母

苦ニ寢子塊ニ枕スルハ父母ノ土ニ在
 ヲ哀ミテナリ
 哀ヲ節シ變ニ順フハ孝子ノ身ヲ惜ン
 男子ノ死スルヲ壽正寢ニ終ルト曰ヒ
 婦人ノ死スルニ壽内寢ニ終ルト曰ヒ
 天子ノ死ヲ崩ト曰ヒ諸侯ノ死ヲ薨ト
 曰ヒ大夫ノ死ヲ卒ト曰ヒ士人ノ死ヲ
 不祿ト曰ヒ庶人ノ死ヲ死ト曰フ
 童子ノ死ヲ殤ト曰ヒ自カラ父ノ死ヲ

故事必讀

百三十七

疾病死喪

ノ為ニ服ヲ成ス嫡孫ハ期ニ杖ツキ其衆孫ハ皆服ノ杖ツカズ或ハ長子死スレバ嫡孫一人重キヲ承テ期ニ衰三年ス其衆孫ハ長スト雖凡只仍ホ服ノ期ニ杖ツカズ衆孫ノ服ヲ承ル嫡孫ト相類セザル所ナリ

謙ノ孤子ト曰ヒ母ノ死ニ哀子ト曰ヒ父母俱ニ死ルニ孤哀子ト曰フ
自カラ父ノ死ヲ言テ怙ヲ失フト曰ヒ母ノ死ヲ失フト曰ヒ父母俱ニ死スルヲ怙恃ヲ失フト曰フ
父死何ゾ考ト謂考ハ成ナリ已ニ事業ヲ成ナリ母死ノ何ソ妣ト謂妣ハ媿ナリ克父ノ媿ヲ媿スルナリ
百日内ヲ泣血ト曰百日外ヲ誓願ト曰期年ヲ小祥ト曰ヒ兩期ヲ大祥ト曰フ

喪家ヲ助レ貨財ニ賻ト曰ヒ車馬ニ賻ト曰ヒ玩好ニ贈ト曰ヒ衣服ニ襚ト曰フ襚トハ彼ノ生時ノ意ヲ遂ルヲ謂フリ玲ハ人ノ死ニ送ル口中ノ玉ナリ一ニ曰フ天子死スレバ珠ヲ以テシ后母死スレバ玉ヲ以テシ大夫ハ璧ヲ以テシ士ハ貝ヲ以テス
緋ハ棺ヲ引之索ナリ之ヲ執ル者皆ナ助ルニカラ以テスルナリ輻ハ喪車ナリ陶侃ノ母死シ將ニ葬ラン

緝サルヲ斬衰ト曰之ヲ緝ヲ齊衰ト曰ハ喪ノ輕重アルヲ論スルナリ
九月ヲ大功ト為シ五月ヲ小功ト為スハ服ノ等倫アルヲ言フナリ
三月ノ服ハ總麻ト為シ三年將ニ滿ントスルヲ禫禮ト曰フ
孫ハ祖ノ服ヲ承嫡孫ハ期ニ杖長子已ニ死テハ嫡孫重ヲ承
死者ノ器ヲ明器ト曰待スルニ神明ノ道ヲ以テス

シトスルニ忽チ一牛ヲ失フテ
在ル所ヲ知ラズ一先父ニ
遇フ曰ク前岡ニ牛ノ眠
ル處ヲ見ル其地葬ニ宜
シ位人臣ヲ極メント佩牛ヲ
尋子之ヲ得因テ馬ニ葬
ムリシニ果ノ其言驗アリシ
封ハ土ヲ築キ墳ト為スナ
リ形馬鬣ノ如シ故ニ馬
鬣封ト曰フ

田横死ス其門人之ヲ傷
ミ輓歌ニ章ヲ作ル一ヲ
薤露ト名ケ一ヲ蒿里ト
名ツ墓誌ハ人死スレ

孝子ノ杖ニ哀杖ト曰フ哀痛ノ驅ヲ扶
クルナリ
父ノ節ハ外ニ在リ故ニ杖竹ニ取リ
母ノ節ハ内ニ在リ故ニ杖桐ニ取ル
財物ヲ以テ喪家ヲ助ル之ヲ賻ト謂ヒ
車馬ヲ以テ喪家ヲ助ル之ヲ賻ト謂フ
衣ヲ以テ死者ノ身ヲ斂ムル之ヲ襚ト
謂ヒ
玉ヲ以テ死者ノ口ニ實ツル之ヲ琯ト
謂フ

其生平ノ行事并姓名
生歿年月日ヲ書シ石
碑ニ勒シ以テ之ヲ誌シ後
人ヲ一見シ其墓ノ墓ナ
ルヲ知ラシムルナリ
唐ノ姚崇自カテ壽藏ヲ
万安山ニ立ツ兆ヲ安居
穴ト曰ヒ土ヲ以テ床ヲ為
ルヲ化臺ト曰フ
鄒南千秋亭壇廟東枕
道ニ兩石翁仲アリ
魏ノ明帝二銅人ヲ鑄テ
翁仲ト名ツク
銘旌ハ絳帛ヲ以テ之ヲ
為シ喪具ハ皆素ヲ用フ
惟此レ絳ヲ用ル者他人
ノ書贈カ故ナリ
漢ノ滕公駕ノ東都門ニ
至ルニ馬悲鳴ノ進マズ
命ノ其處ヲ掘リ石擲ラ

喪ヲ送ルニ紼ヲ執ルト曰ヒ
柩ヲ出スヲ輻ニ駕スト曰フ
吉地ヲ牛眠地ト曰ヒ
墳ヲ築ヲ馬鬣封ト曰フ
墓前ノ石人ハ原翁仲ト名ケ
柩前ノ功布ヲ今銘旌ト曰フ
挽歌ハ田横ヨリ始リ
墓誌ハ傳奕ヨリ創ル
生墳ヲ壽藏ト爲シ
死墓ヲ佳城ト曰フ

得ルニ辨蚪ノ書アリ云フ
佳城静々三十年見白
日差滕公居此室ト公
嘆ノ曰天ナルカナ吾レ死
セバ此ニ安カト後其地ニ
葬ムル
窀穸ナリ窀ハ夜ナリ
厚夜ハ猶長夜ノゴトキ
ナリ
郭林宗母ノ憂アリ徐釋
往テ之ヲ弔シ生芻一束
ヲ門前ニ置テ去ル衆怪
テ其故ヲ知ラズ林宗曰ク
此レ必ス南州ノ高士徐孺
子ナラン詩ニ云ハズ生芻
一束其人玉ノ如シト
吾徳ノ以テ之ニ當ルモノ
ト
子羔親ノ喪ヲ執リ泣キ
三年未ダ嘗テ齒ヲ見ハ

墳ヲ夜臺ト曰ヒ
壙ヲ窀穸ト曰フ
己ニ葬ムルニ瘞玉ト曰ヒ
祭リヲ致スヲ束芻ト曰フ
春祭ニ禴ト曰ヒ夏祭ヲ祠ト曰フ
秋祭ニ嘗ト曰ヒ冬祭ヲ蒸ト曰フ
栝捲ニ飲テ而ノ痛ヲ抱クハ母ノ口澤
存スルカ如ナレハナリ
父ノ書ヲ讀テ以テ傷ヲ増スハ父ノ手
澤未ダ泯セサレハナリ

晋ノ王良父死シ詩ヲ讀
ム毎ニ哀々タル父母我ヲ生
デ劬勞スト云ニ至リ未ダ嘗
テ三復流涕セズンバアラズ
門人業ヲ受ル者遂ニ蓼
莪ノ篇ヲ廢セリ
王修七歳ノ時母社日ニ
死ス明年社日ニ至リ痛哭
止マズ里人因テ為ニ社ヲ
輟マタリトゾ
家語ニ子養ハント欲ノ親
待ズ木静ナラント欲ノ風
停マラズ
人ノ生ル、木ノ根ヨリ生
シ水源ヨリ發スルガ
如シ

子羔親ヲ悲テ而ノ血ニ泣キ
子夏子ヲ哭メ而ノ明ヲ喪フ
王良父ノ死ヲ哀テ門人因テ蓼莪ノ詩
ヲ廢シ
王修母ノ亡ヲ哭メ鄰里遂ニ桑柘ノ社
ヲ停ム
樹静カナラント欲メ而ノ風息マス子
養ハント欲メ而メ親在ラサルハ鼻魚
ガ感ヲ増スナリ
其牛ヲ推シテ而メ墓ヲ祭ランヨリハ

鷄豚ノ存ニ速クニ知カサルハ曾子ノ

思ハク興スナリ

養故ニ人ノ子タル者亦當ニ木本水源

樹ヲ思フ

須ラク終ヲ慎ミ速キヲ追フヲ重ス

五ノ終

五ノ終

五ノ終

五ノ終

標註刪修故事必讀卷之下終

明治十年五月三日版權免許

同年九月廿日刻成

銀座第三街

貳拾二號地

市川清流藏梓

發

兌

書

肆

東京日本橋通二丁目 五山堂

同 銀座三丁目 奎章堂

同 芝三島町 甘泉堂

同 同 町 名山閣

同 本町三丁目 種玉堂

西京御幸町御池下 五車樓

同 三條通御幸町角 津逮堂

大坂心齋橋通茨太郎町 積玉圃

同心齋橋通備後町角 寶文堂

稲田佐兵衛

稲田政吉

山中市兵衛

牧野吉兵衛

岡田文助

藤井孫兵衛

大谷仁兵衛

抑原喜兵衛

吉岡平助

